



案山子



2019年夏号

新潟大学文芸部

目次

◆お題作品『憂』

- ・ 明けない夜を見に行きたい 萩野柚夾
- ・ ジューンブライド 雪兎
- ・ 追憶 伊倉よね
- ・ 哀Need憂 香月日向
- ・ 海の日常 猫宮麻呂
- ・ 蓮華の愛を貴女に ユルング

◆通常作品

- ・ 不審者に注意 杉原太蔵
- ・ それは再会の感動ではなく 杉原太蔵
- ・ アレルギー 田代 霞
- ・ 順路 笠原ざわ
- ・ スクリュードライバー 如月深琴
- ・ 一生のお願い 炬燵猫
- ・ キャラバン 佐久間 佳雪
- ・ パラダイムシフト 守目冥人
- ・ 夏は短し君は、 大島治輔

第三十回お題作品集

お題「憂」

明けない夜を見に行きたい

明けない夜を見に行きたい

萩野柚來

誰しにも、人生には必ず忘れられない出会いがあるという話を昔、誰かに聞いたことがある。その言葉を聞いたとき、私はなんて当たり前のことをこの人は言うのだろうって、ほんの少し馬鹿にしていた。私にとってのそれは、その時もうすでに体験しているものだったから。私にとってのその出会いは、きっと素晴らしいものだった。忘れられない出会い、というか、忘れたくない出会いだった。だけど……。

机の上に伏せられていた、うっすらと埃を被った大判の写真立てを手に取った。写真立てと言っても、飾られているものは写真ではなく絵である。枠を指でなぞると、なぞった指に埃がついた。伏せていたために絵が見える面には塵一つついていない。汚れた指で触ると、アクリル板が黒ずんだ。数か月に一度、こうしてこの絵を見るのが癖になっている。ぼんやりと眺めながら考える。この絵を描いたあの子は今、どこで何をしているのだろう。

私が忘れられない出会いってものを体験したのは、中学二年生の頃。私が通っていた学校は、特別都会というわけでも田舎というわけでもない、程よい環境に位置していた。市内では割と辺鄙なところに建てられていたためか、小、中学校と顔ぶれはあまり変わらず、人間関係はだいぶ楽だった。中学二年生って、世間では中二病とか言われるようになる人も多いらしいけれど、私の記憶では周りにそんな人はいなかった。長い付き合いの人が多い環境にいと、おちおち中二病なんかになっていられない。わざわざ自分の居場所をなくすような真似はしたくないと、みんな考えていたんだろう。私たちは、周りの大人が思っていたよりも、きっとずっと大人びていた。

で、この学校の特徴。転校生が頻繁に来る。付近に自衛隊の基地があって、そこに配属された人の子供が転校してくるのだ。小学校の頃から転校生は多かったので、私たちの間では、日常茶飯事とまではいかなくとも慣れっこになっていた。そして、私が忘れられない出会いをしたのは、そういうような転校生の一人だった。

夏休み明け、始業式の全校集会。校長先生の話とか、夏休み中の生活についてとかの話の後、司会進行役の先生が改めてこう言った。

「今日は、明日から皆さんの仲間入りをする転校生の紹介をしたいと思います」

この時期の転校生は珍しいな、と思いながら話を聞く。学年やクラスが変わる春休み明けを見計らって転校してくる人が多いのだ。もちろん、転校の手続きとか家庭の事情とかで例外もいるのだけれど。

「はじめまして。ミウラウミ、って言います。これからよろしくお願いします」

第一印象は、ポニーテールが似合う子だな、ということだった。特別美人というわけでもないけれど、愛嬌がある顔立ちだ。自己紹介もうまくやっていたし、ちゃんと学校に馴染めるだろう。

「はい、ウミさんありがとう。ウミさんは二年生、ということで、二年一組に入ってもらいます」

先生の言葉で二年一組、私のクラスの生徒が沸く。教室に戻ったら、おそらく彼女は質問攻めだ。いくら転校生に慣れていても、興味が湧かない訳ではない。数日は忙しい日々を過ごすだろう。教室に戻るよう指示が出され、集会が終わる。彼女は先生と一緒に、後から来るはずだ。裾が捲れていたスカートを直しつつ、床から立ち上がる。まだまだ残暑は続きそうで、この集会中にも具合を悪くしている人がいた。ふと窓の外を見やると、夏はまだまだこれからと言わんばかりの日差しが瞳に飛び込んできた。

それからの数日、彼女は私が思った通り、質問攻めにあっただ。どこから来たの、前の学校の制服は、最近読んだ漫画は、彼氏はいる、今度遊ぼうよ、エトセトラエトセトラ。それらの一つ一つに彼女は冗談を交えながらも丁寧に答えていき、結果的に私が思っていたよりも早くにクラスに馴染んだ。ポニーテールが似合う、という私の第一印象はあながち間違いでもなかったようで、彼女はとても運動神経がよく、体育の授業では一つに縛った綺麗な髪の毛を揺らしながら、誰よりも先を駆けていた。これは皆に好かれるタイプだな、と直感した。

ここまでの話からは、私と彼女との接点はないように思えるだろう。実際、彼女が転校してきてから数か月はほとんど話もしなかった気がする。席も離れていたし、特別仲良くする理由が

ない。私は特定のグループに属したりすることもなく、割とクラスメイトとはつかず離れずの付き合いをしていたが、彼女はクラスの人気者的な立ち位置になっていたためにいつも同じ友人とつるんでいた。もう出来上がっているグループにわざわざ首を突っ込む理由だってなかったから、私から彼女に話しかけに行くこともないし、また彼女も私に用事などあるはずもなく、お互いにただのクラスメイト程度の認識しかしていなかった。

季節が移ろい、肌寒さを感じる秋がやってきた。クローゼットの奥の奥にしまい込んでいたカーディガンをそろそろ引っ張り出すことを考え始める時期、私と彼女に転機が訪れる。

学校の帰り道でのことだった。友人と丁字路で別れ、一人家へと歩みを進める。住宅街の中の小じんまりとしたスペースに申し訳程度に置かれている公園の前に差し掛かった時のことだった。ベンチに座る人影が見えて、思わず足を止めてしまう。ここの公園で人影を見るのは初めてのことだった。ベンチと古いブランコ、それに数本の街灯のみ置かれているここの公園は、近くに住んでいる子供たちでさえ使うことをためらうような、独特の雰囲気や昼夜問わず醸し出している。公園って言うと利用する子供の防犯のために地域の人々の目が届くような場所に作られるようなものだけけれど、ここの公園は背の高い木々に覆われ、出入り口以外からは中の様子がほとんど見えなくなっている。近くに住む私でさえあまりここで遊んだ記憶はない。そんな公園に、人がいる。興味本位でこっそりと中の様子を窺う。座っている人影は、じっと俯いている。何をしているのだろう、と見ていると、思わぬ発見をした。その人影は、どうやらスカートを身に着けているようなのだ。しかもよくよく目を凝らすと、私が通う学校の指定スカート。この辺に住んでいる人ならほとんど顔見知りだったから、誰だろう、と考えを巡らせる。現在時刻、午後五時ちょっと前。この時間に学校外にいるということは、私と同じように部活に入っていないのだろう。一年生の間は必ず何かしらの部活に入ることになっているし、この辺りには同校の先輩は住んでいなかったはずだから、おそらくここにいるのは同級生。そこまで推理して、公園内に足を踏み入れた。家に帰っても暇だし、その人影が何をしているのか、気になったのだ。

後になってこの時の自分の行動を振りかえてみると、われながら大した勇気だな、と思う。もしも予想が外れて、全然知らない人だったらどうするつもりだったんだろう。

やっほー、と声をかけようとして、喉まで出かかった声が止まる。公園にいたその人影は、スケッチブックに絵を描いていたから俯いていたのだ。問題はそこではない。絵を描いていたその人は、あのウミちゃんだった。気配を察知したウミちゃんは勢いよくスケッチブックを閉じ、顔を上げ、私を見、それから目をまんまるに見開いた。そりゃそうだ。ほとんど話したことの無いクラスメイトと学校の外で会って、しかも近づいてこられたら、誰でも同じ顔をするだろう。気まずい沈黙が流れる。なんとかこの場の收拾をつかせたくて、脳みそをフル回転させるけれど

、全然いい案が思い浮かばない。

「えっと、あの……ウミちゃん、だよね」

「うん」

しどろもどろになりながらも話しかけるが、全然会話が續かない。どうしよう、といよいよ焦り始めたころ、ウミちゃんの方から私に話しかけてきた。

「ね、立ち話もなんだし、よかったら隣においでよ」

思わぬ展開になってしまった、と隣にいるウミちゃんを横目に思う。私とウミちゃんは、何を話すわけでもなく、並んでベンチに座っていた。ウミちゃんがぼんやりと空を見上げていたので、つられて私も顔を上げる。秋の日は釣瓶落とし、って言うけれど、本当に日が落ちてくるのが早い。ついこの間まで午後五時を過ぎても明るかったのに、今ではもう目を凝らせば星が見えるほど夜が近づいてきている。

数分の沈黙。この場を作り出してしまったのは私だし、何かしらの行動を起こすべきかな、と思いつつも躊躇してしまう。だって、ここにいるウミちゃんは学校で見ている姿とは違う雰囲気を感じていた。そのとき、惑う私に気づかぬウミちゃんが、突然沈黙をさう。

「葵ちゃんはどうしてここに？」

どう答えるか一瞬迷い、結局素直に答えることにする。

「この公園が面してる道路、私の通学路なの。たまたま公園の中に人影が見えたから、珍しいなって思って……」

「そっか、葵ちゃんの家こっちの方なんだね」

「うん。……実はさっきちらっと見えちゃったんだけど、ウミちゃん、絵を描いていたよね」

「バレたか」

そうやって舌を出すウミちゃんは、やっぱり学校で見る彼女と変わらないように思える。

「ウミちゃん、運動もできる上に絵も描けるんだね」

「そんな大したものには描けないよ。ただ、好きなんだ」

「さっきは何の絵を描いていたの？」

そう質問すると、ほんの少し彼女の顔が曇る。聞かない方がよかったかな、と思い謝罪すると、ウミちゃんは首を振った。

「謝らないで。わたし、他人に絵を見せたことがほとんどないからさっきは少し戸惑っちゃったけど、実は誰かに自分の絵の感想を聞いてみたいなってずっと前から思ってたの」

そう言って、私が来た時に荒々しく閉じてしまったスケッチブックのページを丁寧に繰る。今日描いていたページを見せてくれるようだ。

「さっき描いていたのは、これなんだけど」

彼女が私の前にスケッチブックを差し出す。それを見て、うわ、と危うく声に出してしまうところだった。すごくきれい。これはここの公園をモデルにしたのだろうか。よく似ている場所で、ジャングルジムのてっぺんに座った女性が満月に向かって煙草を燻らせている。ジャングルジムの錆びている感じだとか、一本だけ描かれた街灯に群がる虫だとか、紫煙の背景への溶け込み具合だとか、すごく細かく描きこまれている。スケッチブックから、煙草と夜の匂いがしてきそうだった。

「これ……ウミちゃんが描いたの」

そう絞り出すだけで精いっぱいだった。自分の陳腐な言葉でこの絵を飾りたくないと思ってしまった。私は素人だけれどわかる。この絵はすごい。一言言って黙ってしまった私を見て、ウミちゃんが不安げな表情をしていることに気づき、慌てて言う。

「ごめん、見とれちゃって何もコメントできなかった」

「本当？　すごく嬉しい。実はここ最近、なんだか全然ピンと来なくて、描いては消して描いては消してを繰り返すばかりだったけど、やっとこれだって思えるものができたなってわたしも思ってたの」

照れた笑みを浮かべながら話すウミちゃんを見て、唐突にさっき感じた違和感に気づく。学校でのウミちゃんはたくさんの友人に囲まれて、いつも楽しそうにしている。でも、その実たまにどこか遠くに想いを馳せるような、そういう表情を見せることがあった。周りにいる人はおそらく気づいていないだろう。彼女は自分が時々そういう顔をしていると自覚していて、皆にバレないようにしているらしかった。ほとんど話したことのない私が気づくのもおかしい話だけれど――いや、ほとんど話したことのない私だから、気づいたのかもしれない、とふと思う。近くにあるものは、意外にも遠くにあるものより見えづらいのだ。

話を戻すけれど、ここにいるウミちゃんはそういった類の雰囲気纏っている。でも、その方が自然体のように見えた。学校での彼女が無理をしているってわけでもないと思うけれど。

会話がふっと途切れる。そういえば、部活は大丈夫なのだろうか。何部に所属しているかはわからないけれど、彼女の運動神経を知ったクラスメイトからたくさんの勧誘を受けていたことはまだ記憶に新しい。

「ウミちゃん、今日部活オフなの？」

「えっ、わたし帰宅部だよ」

驚いたようにそう返すウミちゃんを見て、私もまた驚いていた。てっきりウミちゃんは何かしらの部活に所属しているものだと思っていた。というか、あれらの勧誘の全てを断るなんて逆にすごいな、と思う。

「葵ちゃんもそうでしょう。去年は何部だったの？」

入りたいと思うような部活がなくて、一年生の頃から帰宅部同然のよくわからないところに入っていた、と答えると、ウミちゃんは笑いながら言った。

「わたしもそうだよ。入りたいところがなくて」

でも、あんなに運動神経が良くて、しかもこんなに絵だって上手いのに。そう思っていると、私が考えていたことを汲み取ったのかウミちゃんが言う。

「確かに、美術部に入ろうかなって考えていた時期もあったんだけどね。美術部でさ、友達とわいわい絵を描くよりも、わたしはこうやって一人で絵と向き合っているのが好きなの」

その気持ちはわからないでもない。本当に好きなものを他人と共有するのって、気恥ずかしい

というか、自分の奥の方をさらけ出しているようですしだけ怖い。そこまで考えて、私はさっき彼女に絵を見せてもらったことを思い出す。

「ウミちゃんの大事な絵、簡単に見せてとか言っちゃってごめん」

「気にしないで。絵をより良くするためには他人の感想が必要だって、わたしもずっと考えてたんだけどなかなか勇気が出なくて。それに、あの、なんていうか……葵ちゃんになら見られてもいいかなって」

驚いた。私、ウミちゃんにそんなことを言ってもらえるようなこと、何かしたっけ。どう返してよいかわからず、ありがとう、とだけ言うとウミちゃんは焦ったように続けた。

「変なこと言ってごめん。葵ちゃんなら忌憚なく意見を言ってくれるかなあとと思って」

ほとんど話したことがない故に、というやつだろうか。確かに、普段から一緒にいる友人よりは、私のようにほとんど話したことのないクラスメイトに見せた方が絵の批評としては正確なものが得られるのかもしれない。

「葵ちゃん、わたしとクラスで一度だけ話した時のこと覚えてる？」

そんなことあったっけ、と記憶を巡らす私を置いて、ウミちゃんは話し始める。

「たったの一回だけなんだけどね。私が転校してきてすぐのことだったよ」

改めて、はじめまして。ミウラウミ、って言います。そう言ってウミちゃんは黒板に自分の名前を書き始める。三浦憂望、と丁寧な文字が書き連ねられていくのを、ぼんやりと眺める。珍しいけれどいい名前だな、と思った。隣のどこそこから来ました、仲良くしてもらえると嬉しいです——といった当たり障りのない自己紹介を終えた憂望ちゃんへの質問の場が設けられると、皆が一斉に手を挙げる。大変だな、と思いつつ、まあこれで授業が潰れるならラッキーと私はうたた寝を決め込む。

それから暫くして、授業終了のチャイムが鳴る。確か次は移動教室だったはずだ。目を開いて周囲の様子を窺うと、皆教科書を準備していた。中にはもう移動し始めている人もいる。この休み時間、外部からパンを売りに来てくれる人たちがいるとかで、移動のついでにパンを買おうとする人たちは授業が終わると同時に教室を出てしまうのだ。十分の休み時間はとても短い。私は

用事もないしのんびり行こう、と思っていると、いつの間にか教室内の人はほとんどいなくなっていた。そろそろ私も出るか、と用意していると教室に憂望ちゃんが入ってくる。あれ、さっき教室を出ていかなかったっけ、と不思議に思っていると、憂望ちゃんが話しかけてきた。次の教室教えてもらってもいい、と。曰く、トイレに行っている間に皆に置いて行かれてしまったらしい。それならちょうど私も出ようとしていたところだったから一緒に行こうと告げると、あからさまにほっとした顔をする。はじめてきた学校で教室に戻るとほとんど人がいないって、下手なホラーよりも怖いだろう。

「名前、なんていうのか聞いてもいい？」

「わたし？ 葵だよ。みんなからはあお、って呼ばれたりしてる」

「葵ちゃんね、覚えた。わたしは……って、さっき自己紹介したか」

「憂望ちゃんでしょ。私も覚えてるよ、珍しいけどいい名前だね」

教室までの道のり、会話しながら歩を進める。すると、憂望ちゃんが少し驚いたようにこう言った。

「珍しいとはよく言われるけど、いい名前だねって初めて言われた」

「そう？ だって憂望、って心配して思いやる、って意味でしょう。確かに憂って漢字はあんまり名前向きではないかもしれないけれど」

「すごい、初対面で名前の由来まで言い当てられるの初めて」

おどけた様子で彼女が言うのと、目的地にたどり着いたのはほぼ同時だった。それじゃ、と言うと、ありがとうと声が返ってくる。教室に入り、彼女はさっき話していた女子のところへ、私は後ろの方の窓際の席へ。それが私たちのたった一度の会話だった。

そうだ、思い出した。数か月前の、他愛もない会話。だけど、それがどうしたのだろう。

「その時、わたし自分でもわからないけど葵ちゃんのこと、すごく……ううん、なんていうか…
…こういう表現が正しいかわからないけど、好きだなって思って。」

「人にそんなこと言われたのはじめて。すごく嬉しい……、ありがとう」

なんだかどんな顔をしていいのかわからない。でもそれは憂望ちゃんも同じだったようで、互いの視線が公園を彷徨う。

「恥ずかしいついでに言っちゃおうかなあ。わたし、葵ちゃんがちょっとだけ羨ましくて」

「私を羨む要素、ある？」

「あるよ。葵ちゃん、身軽そうだなって」

「そんな、猫じゃないんだから」

「へへ、でもそう思ったの。わたし、学校でいつも決まった友人と一緒にいるでしょう。その友達のこと、嫌いってわけでは全くないんだけど、たまに……本当にたまに、こう、一人にしてもらいたいかなって、そう思っちゃうんだ」

「どれだけ仲が良くても、人に疲れちゃうことってあるよね」

「うん……わかってもらえて嬉しい。わたし、すごくわがままなの。一人は好きだけど独りは嫌で、だから転校してすぐ友達をたくさん作ろうって思ってたんだけど……」

そこまで言って、言葉を止める。憂望ちゃんは突然履いていた靴から踵だけ抜き出し、勢いよく片足だけ遠くへ飛ばしてしまった。綺麗な放物線を描いて飛んだローファーは、着地した先で横倒しになる。

作りすぎちゃったみたい、と吐息と共に吐き出された言葉がやけに私の耳に残る。私はあんまり特定の仲が良い人、というものがいない。話そうと思えば誰とでも話せるから、それで不便はしてこなかったし、その方が自分には合っていた。憂望ちゃんももしかしたら転校してくる前は私みたいなタイプだったのかな、と思う。

「だから、葵ちゃんが羨ましくて。ずっと葵ちゃんみたいになりたいなって思ってたの」

そっか、とだけ言う。それから、私たちはぽつぽつと会話を続けた。憂望ちゃんの前の学校のこと。今日の数学の授業のこと。憂望ちゃんがこれまでに描いてきた絵のこと。聞くと、絵は全て独学らしい。描きたいものを描くと、自然とああいう作風になるって憂望ちゃんは何でもないことのように言っただけで、それって結構すごいことじゃないかな、と思う。そして、沈黙。今

度は気まづくなかった。びゅう、と風が吹き抜ける。気づかないうちに、夜の気配が色濃くなっている。公園の街灯にも、明かりが灯っていた。すると突然、隣に座っていた憂望ちゃんがベンチから立ち上がり、さっき飛ばした靴に、器用に片足で飛び跳ねながら向かって行く。そうして再び靴を履き、こちらへ向き直る。

「今日、葵ちゃんとここで話せてすごく嬉しかった。ありがとう、もしよければ学校でもよろしく」

「憂望ちゃんって、いつもここで絵を描いてるの？」

つい、そう聞いてしまったのはこの公園での憂望ちゃんとの会話がとても居心地の良いものだったからだ。お互い、様々なことを話したけれど深くまでは追及しない。憂望ちゃんは距離感の測り方がとても上手い。友人がたくさんいるだけあって、ちゃんとその辺をわきまえているようだった。

「うん。前は家で描いたりもしてたけど、外で描いた方が煮詰まらないし、それにここは全然人が来ないし」

まあ葵ちゃんは来たけどね、といたずらっぽく笑いながら言う。

「葵ちゃん、たまに遊びに来てよ。絵の感想も聞きたいし」

「いいの？」

「それはこっちのセリフ。わたしなら雨でも降らない限り毎日のようにここにいるから、いつでも来て」

「じゃあ、たまに見に来ちゃおうかな」

そう言って、私もベンチから立ち上がり、二人で示し合わせたように出口へと向かう。もう夜だ。早く帰らないと。

「わたし、こっちだから」

そう言って、私に別れを告げると憂望ちゃんは私に背を向けて歩き出す。私も家へと帰るべく、憂望ちゃんとは反対方向へと足を踏み出した。

それから私たちは一週間に一度くらいの頻度で、公園で会うようになった。公園では、憂望ちゃんは絵を描き、私は学校で出された宿題をしたり、図書室で借りた本を読んだりする。私が飽きると憂望ちゃんの手元を邪魔にならないようにのぞき込んでみたり、反対に憂望ちゃんが休憩するときはお喋りしたり、私が読んでいた本の内容を話したりした。沈黙が一時間くらい続くこともあったけれど、居心地は悪くなかった。こうしてみると随分仲良くなったように思えるけれど、私たちは学校では相変わらずほとんど会話をしなかった。今考えると、学校外で時々会う関係というものに私たちは価値を見出していたのだろう。

そんな関係が続き、冬がやってきた。私たちは未だに公園で会う関係が続けている。変わったことと言えば、一週間に一度だった会う頻度が三日に一度になったことくらいだった。そんなある日のこと。私たちは、今日も公園で各々のやりたいことをやっていた。ふと、隣で絵を描いていた憂望ちゃんの手が止まる。何か、冷たいものが頬に当たる感覚。私も今日図書室で借りてきたばかりの本を読む手を止め、空を見上げる。落ちてきたもの、それは雪だった。

「雪だ」

「今年初、かな」

今日、挨拶以外で初めてこのとき言葉を交わした私たちはそれからしばらくの間、並んで空を見上げていた。灰色の空から落ちてくる雪は、ちらほらと周囲を漂っている。そういえば、そろそろ冬休みが始まる。休みはいいけど宿題はやだな。自由研究、何しようかなあ。本は濡れないようにとリュックにしまってしまったので、することがなくなってしまった私はぼんやりと空を眺めながら考える。

「憂望ちゃんは、冬休みの自由研究何するの？」

「まだ考え中。でも、どうせなら冬しかできないことがいいな」

スケッチブックを私同様しまいながら、憂望ちゃんはそう答える。冬しかできないことかあ。うーん。雪の結晶の観察とか、ベタだけどネタ被りしそうだし……。考えていると、憂望ちゃんが口を開いた。

「ねえ、自由研究一緒にやらない？」

「いいけど……」

こういうのって、憂望ちゃんは引く手あまたな感じがするけれど、私と一緒にやっていいのかな。それこそ前言っていた友達とかに誘われたりしてないんだろっか。

「わたしなら大丈夫だよ、葵ちゃんとやりたいの」

そうまで言われたら断る理由もない。今日のうちに、決められることは決めてしまおうという話になって私たちは話し合いを始めた。

結局、自由研究は星空観察をしよう、ということになった。決め手は、憂望ちゃんが星座望遠鏡を持っているということ、それから星ならば冬にしか見られないものもあるし、冬しかできないことに入るという私の意見だった。かなり長く話していたため、もう真っ暗だ。雪はいつの間にか止んでいた。電球が切れかかっているのか、街灯はストロボのように明滅していて夜の公園の不気味さを際立たせている。日程は天気予報を見ながらまた相談、ということにして、私たちはいつものベンチから立ち上がる。

「じゃあ、また明日学校でね」

いつも公園前で私たちが交わす言葉。学校で話すことはやっぱりほとんどないし、連絡先だって交換してはいないけれど、お互いクラスで姿を認識すると視線が交わることもあった。クラスメイトの誰も知らない、不思議な関係。奇妙な居心地の良さを感じるこの関係性を、私は大切にしたいと思うようになっていった。

つつがなく日々は過ぎ、冬休みに入る。今日からしばらくは学校に行かなくてもよいという開放感からか、今日も今日とて公園で会っていた私たちの口数は普段よりも多かった。

「ね、星空観察いつやろうか」

「四日後とか、どう？ 月もまだ痩せてるだろうし、天気予報だと晴れだったよ」

「いいね、そうしよう」

そこで一度会話が途切れると、憂望ちゃんの手が私の膨らんだリュックに留まる。

「それ、何が入ってるの？ いつもより膨らんでる気がするけど……」

「実はね……ふふ、見てこれ。お父さんのおさがりなんだけど」

そう告げて私がバッグから取り出したのは、一台のカメラ。父が新調すると言っていたので、それまで父が使っていたものをねだってみたらあっさりもらえた。父はどうやらフィルムタイプの一眼レフが欲しかったようで、デジタルタイプの今私が持っているこの一眼レフは本命ではなかったらしい。このご時世にフィルムか、と思わなくもないけれど、父が凝り性なのは今に知ったことではないのでありがたく譲り受けた。カメラのいろははわからないけれど、きれいな写真がどんなものかは見ればわかる。それに私は一つの物事に熱中するタイプだったから、憂望ちゃんにカメラを見せた時には、自分が撮った写真もある程度他人に見せられるくらいには成長していた。

憂望ちゃんに撮った写真見せてよ、と言われたので、自分の中でもよく撮れたな、と思っているものを選んで見せる。

「これとか私、好きだなあ」

そう言って憂望ちゃんが指差したものは、学校からの帰り道に撮った夕暮れの写真だった。きれいなグラデーションがかかった空に、一等星がきらりと光っている。私も気に入っている写真だった。

「本当？　じゃあ、現像したら憂望ちゃんにもあげるよ」

「いいの？　嬉しい、じゃあわたしからも何か、絵をあげるよ」

申し出は嬉しいけれど、とても美しい彼女の絵と始めたばかりのど素人な私の写真では、果たして釣り合いがとれるのだろうかと私が頭を悩ませている間に憂望ちゃんは会話を進める。

「あっ、でもどうせならこれから描く絵をプレゼントしたいなあ。ね、星空観察の日までに新しいものを描くからさ、それと交換じゃだめ？」

きらきらした目で見つめられるともう何も言えなくて、私はただ頷く。やった、とはしゃぐ憂望ちゃんを見て、喜んでもらえるならいいかと思う。憂望ちゃんは早速絵を描く用意をし始めている。私もリュックから本を取り出した。

あれから時は流れ、もう星座観察の当日になってしまった。もうすっかり夜の帳が下りきった空の下、いつもの公園へと急ぐ。一度公園で落ち合ってから、もっと広い空き地に行こう、と話していた。今日は星座観察にはもってこいの満天の星空だったけれど、いつもの公園は木々に囲まれて星を見るには視界が悪い。

公園に着くと、まだ誰もいなかった。集合時間、五分前。もう少し待てば憂望ちゃんも来るだろうと思い、いつものベンチに腰掛ける。

しばらくそのまま待っていたが、憂望ちゃんはなかなか来ない。腕時計を見ると、もう集合時間を二十分過ぎている。連絡先を交換していなかったことを、今更だが後悔した。周囲を見に行くべきか考えつつ、入違いになった時のことを考えて動き出せないでいたその時。公園に、憂望ちゃんが入ってきた。だけど、明らかにいつもと違う。とても疲れているように見えた。

「待たせてごめん」

「私は大丈夫、そんなに待ってないよ。憂望ちゃんこそ疲れてるように見えるけど、大丈夫？ 星座観察、別な日にする？」

「大丈夫。今日やろう」

そう言いながらも、憂望ちゃんは私の隣に腰を下ろす。あれこれと詮索しない方がいいかな、と思い、私からは何も聞かなかった。少しして、憂望ちゃんは立ち上がる。私もそれに続き、二人無言のまま空き地へと歩き出した。

数分歩くと、目的地に着いた。ここなら街灯も少ないし、星もよく見える。荷物を下ろした憂望ちゃんが、星座望遠鏡を手渡してくれる。

「じゃあ始めようか」

二人で星座盤を見ながら星々を確認して、望遠鏡を覗きながらそれぞれが形作る星座をノートにメモする。冬の澄んだ空気が、星々の光を研ぎ澄ませていた。私は持ってきていたカメラで写真を撮った。夜空を撮るには私にはわからない設定がいろいろと必要らしく、家を出る前に父に手伝ってもらった。おそらくきれいに撮れるはずだ。シャッターを押し、撮った写真を確認する。うん、きれい。これなら大丈夫だろうとそのまま連続してシャッターを切る。自由研究には、共同でやってもいいが最後のまとめは各々でしなければならないというルールがある。写真を撮

り終わると、私たちは並んで地面に腰を下ろし、持ってきたノートに今書けることは今のうちに書こうとペンを走らせた。

とりあえず、いまできることはやった。ふう、と一息ついて、ペンを筆箱へとしまう。隣の憂望ちゃんも、ほとんど同時に書き終えたようだった。ノートをリュックにしまっている。なんだか疲れた、と思い、リュックを枕にして地面に寝転がると、思わぬ絶景が広がっていた。視点が変わるとこんなにも見え方が変わるのかと驚く。吸い込まれそうな漆黒の夜空に輝く星々。すごくきれいで、少しだけ怖い。もしも今、重力がひっくり返ってしまったら、私はあの中に吸い込まれてしまうのだろうか、なんて馬鹿なことを考える。そんなわたしの隣で、しばらくの間は座っていた憂望ちゃんも同じように寝転がると、喋り始めた。

「今見えてる星って、一体いつ光ったものなのかなあ」

「ううん……気が遠くなるほど昔だって先生がこの前言ってたけど、実際はどれくらいかな」

「今、リアルタイムで光ってる星の光が届くのもずっと後なんですよ？ 少し寂しいね」

「うん……今の輝きが届く頃も、誰かがここで星を見てくれたらいいのに」

「おそらくその時にはこの場所、なくなってると思うけど」

「そっか、そうだね」

それからしばらく、私たちは黙って夜空を見上げていた。憂望ちゃんがいるし、近くには民家だってあるのに、なんだかすごく寂しい。何故だかそのとき強く、目を離さないで、今この瞬間の星空を、空気を、孤独を、しかと心に刻んでおこう、と思った。

時を忘れてお互い夜空に見入っていたが、雪がちらつき始めたため名残惜しいが身体を起こす。あ、そうだという声と共に、憂望ちゃんはリュックを漁り始める。ちょっとの間ごそごそやってから、はい、と私に向けてラミネート加工された絵を差し出す。そこに描かれていたのは、朝と夜の間の時間、昇り始めた太陽と、空にうっすらと残る星、そしてその下で輝く海と砂浜でファインダーを覗き込む女の子。この絵も本当にきれいで、なんだかもらうのが申し訳なくなってくる。

「これ、もらっちゃっていいの？」

「葵ちゃんのために描いたんだから、もらってくれなきゃ怒るよ。ね、気にしないで受け取って

」

そうまで言われて受け取らないのは逆に悪い。私はそれと交換で、前に憂望ちゃんがきれいだと言っていた写真を現像したものを差し出す。ありがとう、と言って受け取った憂望ちゃんは、しげしげとそれを眺め、それから丁寧にリュックにしまった。

「よし、もう遅いし帰ろうか」

それから私たちは荷物を片付け、空き地を出た。いつもの公園に来た当初、顔色が悪かった憂望ちゃんも、星座観察している間にすっかりいつもの調子に戻っていた。横に並んでいる今もいつも通りに見えて、少しだけ安心する。

「じゃあ、また今度ね」

私がいつものように別れの言葉を言うと、憂望ちゃんはこちらへ向き直った。どうしたのかな、と思っていると、そのまま動きを止めてしまう。風が、私たちの間を通り抜けた。

「葵ちゃん」

「どうしたの」

続きを促すけれど、それからしばらく沈黙が続いた。そういえば、憂望ちゃんと一緒にいるときに居心地の悪さを感じるのは久しぶりだと考える。互いに一緒にいる時間は、初めの頃よりもかなり長くなっていた。

憂望ちゃんは、うろうろと地面を彷徨っていた視線を思い切ったように上げると、私の目を見ては視線を外すことを二、三度繰り返した。そして口を開く。

「また来年も……一緒に、こうやって星を見に来ない？」

「そんなこと、もちろんいいよ。今度は夏にでも見に来よう」

なんだ、そんなことくらい言ってくればいいのにと思いつつ、返事をする。すると、ほっとしたようによかった、と呟く声が聞こえた。断られるとでも思ったのだろうか。

「葵ちゃん、わたし、冬休みの間あんまり公園にいないかも」

「わかった。私もおそらく家に居ろって言われるから、あんまり行けないと思う」

会話しているうちに、親に告げてきた帰宅時間がすぐそこまで近づいていることに気づく。

「じゃあ、今度こそまたね」

「うん……また」

私は、家へと歩き出した。振り返らなかった。憂望ちゃんが歩き出す音はしばらくの間聞こえてこなかった。

冬休み明け、始業式。結局、あれから私たちは冬休み中に会うことは一度もなかった。私は家で家に居たし、一度だけ公園を覗いてみた時も憂望ちゃんはタイミングが悪く、いないようだった。星空観察のときに撮った写真を渡したかったけれど、会えなければどうしようもない。自由研究の提出は始業式の次の週だったから、学校で渡せばいいだろう、と考えていた。

始業式を終え、教室に戻ると、担任の先生の話が始まる。早く終わらないかな、と思いながら何気なく教室に視線を彷徨わせていると、ふといつもは合う視線が今日はないことに気づいた。憂望ちゃんが来ていない。珍しいな、と思っていると私の耳に、先生の声が飛び込んできた。

「えー、それから三浦憂望さんですが、家庭の都合ということで冬休みの間に転校、ということになりました。皆さんと過ごした時間は短かったです、お世話になりましたと伝えてください、と言われたので——」

それからの話は全く耳に入ってこなかった。転校。転校？ 何も聞いていない。冬休みの間に転校って、私はその冬休みの間に会ったのに。自由研究を一緒にしたのに。頭の中がぐちゃぐちゃになって、何も考えられなかった。

先生の話をして上の方で聞き流し、学校が終わるとすぐさまいつもの公園へと向かう。誰もいない。ただ、いつも通りベンチが一つとブランコがあるだけの簡素な公園。まるで私の方がいつも通りじゃないように感じさせるそれらが恨めしかった。上がった息を鎮めるため、一人静かにベンチに座った。

そうして呼吸を落ち着かせていると、絡まっていた思考がゆっくりと動き出した。ああ、もう憂望ちゃんは学校に来ないんだな、という事実が自分の中で咀嚼されていく。そして理解した途端、泣きたくなった。どうしてかな、私より、こういうときに泣くのはいつも学校で周りにいた女子たちがふさわしいんじゃないかな、と思いつつ、喉元にこみあげてくる塊が飲み込めなかった。多分、もう会えない。そうだろう。彼女がどこへ行ってしまったのか、私にはわからなかった。連絡先も、何もかも、彼女について私はあまりにも何も知らなかった。

そうして不意に、星座観察が終わった帰り際に取り付けられた口約束を思い出す。おそらく、あれも叶えられることはないだろう。来年も一緒に夜空を見ようって、そう言った彼女に、私はそんなこと、って言ってしまったのだ。全然そんなことじゃなかった。もっと、もっと何か気の利いた言葉をかけてあげればよかった。だってあの夜、彼女は様子がおかしかった。でも見ないふりをしてしまった。その方が楽だったし、余計なことを言って関係を崩したくなかった。彼女が煩わしく思うような友人の一人には、成り下がりがくなかった。憂望ちゃんは私を見て羨ましいって言ってくれたけれど、私の方が彼女を羨ましいと、ずっと思っていた。彼女は、たとえ友人を面倒くさいと思っても、逃げなかった。突然話しかけてきた私のことだって、蔑ろにはしなかった。人にちゃんと向き合っていた。向き合ってくれた。けれど、私はそういうものに今まで向き合ってこなかった。面と向かったことがなかった。だからだ。あの夜、私にはなんて声をかければいいのかわからなかった。本当は、憂望ちゃんと本当に本当の友達になりたかったのに、いつだって足を一步踏み出せなかった。躊躇っているうちに全ては過去へ流されてしまって、私にはもうどうすることもできなかった。いつか、憂望ちゃんが言っていた言葉を思い出す。一人は好きだけど独りは嫌。きっと私もそうだ。彼女と何も変わらない。私はこの公園で憂望ちゃんと会うことで、気づかないふりをして自分の孤独感を埋めていた。私と憂望ちゃんの違いはきっとただ一つだけで、それは人と向き合う勇気をもっているか、いないか。それだけだった。

それから私は、宵の口に雪がちらつくまでずっと一人、もう私のほかには座る人がいなくなってしまったベンチで考えていた。

宿題を提出しなくてもよかった憂望ちゃんが、私に自由研究を持ち掛けてきた理由――。

ジューンブライド

ジューンブライド

雪兔

白い雨傘くるりと回して

子供が煩く歌いだす

もたり ぐたりと 足跡を残して

あーあ

なんだか 酷く煩わしいのだ

僕の吐き出すため息ひとつ

鈍色の糸が絡めとる

しとり しとりと 質量を増して

あーあ

なんだか 酷く重苦しいのだ

窓に書かれた誰かの落書き

差し手のいない相合傘

ほたり ひたりと 傘が泣き出す

あーあ

なんだか 酷く寒々しいのだ

ウェディングドレスを纏った君が

知らない誰かの隣で笑う

はらり ひらりと 花を舞わせて

あーあ

なんだか 酷く泣き出したいのだ

やっぱり僕は君が好きで

叶えようとしなかった僕の怠慢で

あーあ

それでも 貴方を想って泣くだけは

どうか 許してほしいと思ってしまうのだ

水たまりに溶かす雫の一粒くらい

許してほしいと思ってしまうのだ

初めのころはレポートにうんざりしていたのに、今はもう、慣れてしまった。

そんなことを、図書館の席が徐々に埋まるのを見て私は思う。見てわかるのだ、私だって来たばかりのころは空席を見つけるのに少しばかり苦労したから。経験したことならば自ずとわかるだろう。

ちら、と画面の右端に目を向ける。……随分と長く居座っていたようだ。小腹も空いたし、文字数もかなり増えている。丁度いい頃合いだろう。私はパソコンを閉じて立ち上がった。

空はゆるりとオレンジ色に染め上げられている。外に出て無意識に息を吸った。閉鎖空間にいたからだろうか、喉を流れていく空気がいとおいしい。澄んでいるのに奥でまとわりつく香りにどこか安堵しているのもそのせいだろう。この感覚はどこかで感じたような気がする。明日の天気でも暗示しているのだろうか。……明日の天気。明日。引っ掛かりを覚えてスマホを起動させる。ロック画面に表示されたものを見て、そうだ、そういえば明日は一限からあるんだった、と思い出した。取りたかった授業をひとりで取ったんだった。

男子の賑やかな声が耳に届く。自転車の甲高いブレーキ音がする。ああそういえばタームの変わり目、ちょっと浮かれていたときもあったな、なんて考える。長期休みがないのに授業が増えたり減ったりすることが、どうも新鮮で楽しみだった。ああいや、高校までで長期休みのあとに授業が変わるなんてないってことは百も承知、二百も合点。とにかくここに来て初めてのことから、胸が高鳴るのは当然と考えるのがいい。決して、それをまわりに隠していたりなんて、しなかったとも。それに、ちょっとした失敗というか、ほんの些細なことなのだが、月曜一限の講義がなくなったのを忘れて飛び起きたことがある。急いで支度をしているときに思い出すのはこの上なく辛かった。絶望した、と言い換えてもいい。何せ家を出る時間が四時間半ほど違うのだ。できればもっと布団にくるまって微睡んでいたかったのに。……今年は、去年とは反対の意味で絶望的起床、なんてことがなければいいのだけど。

ああ、いけない。寄り道をしてしまった。こんなことを思い出したくて開いたんじゃない、明日の天気が気になってスマホを開いたのだ——というところで、かしゅん、と音がした。横目でそちらのほうを見ると、向こう側の歩道で女性が自転車のそばに立っていた。立っているだけなのにどうも目が離せない。簡潔に述べると、きれいな人だったのだ。

しかしながら、違和感を覚える。正門方向を向いて停めているし、女性は自転車から離れようとしなぬ。否、離れられないのだ、と気づくのにそう時間はかからなかつた。彼女の服の——スカートの——白いチュールレースが、チェーンに絡まっていたのだ。彼女が後輪のうしろを回るとサドルの上でぴんと張られていたそれがしゃらりと揺れて落ちる。一方ではふわりと笑うのにもう一方では満足に踊れやしない。

女性は何度かチュールを引っ張ったりチェーンのあたりに顔を近づけたりしていたが、しばらくしてスマホを取り出した。誰かに電話しているように見えるが、少しして耳からスマホを離した。……背中が、少し丸まっていた。

「あの」

何やってるんだろう、わたし。

足は勝手に動いていた。喉も勝手に動いていた。だから仕方ないのだ、と言ひ聞かせた。

俯いていた彼女の目元はうっすらとあかく滲んでいる。私よりほんの少し背が高いが、化粧の薄いところと不安げなその表情から一年生だろうと思った。

「どうかしましたか」

「ええと、その、スカートが絡まってしまつて」

意外と大人っぽい声だった。心にくんと針がかけられたような感覚がある。

「取れない、ですか」

「何度か引っ張ってはいるんですけど、チェーンの下に入ってしまった」

改めてそちらを見ると、なるほど、三段変速のギアがついているようだった。そうしてそれを切り替えた拍子に挟まってしまったと思われた。遠目からは真っ白に見えたスカートも今は油で

黒く汚れている。勿体ないなあ。

「はい。私も、そう思います」

「あ、……もしかして、声に出てました？」

彼女は沈黙したまま私から視線を外した。すみません、と謝ってすぐ、かわいいスカートだし、とっても良く似合っていますから、と慌てて付け足した。

「私もこれはお気に入りだったので、申し訳ないことをしたな、と思って」

「そうでしたか。残念でしたね」

事実、彼女によく似合っていた。ふんわりと揺れ動くチュールがすらっとしたというより華奢な彼女の体型をカバーして心地が良い。それから差し色になっているレモンイエローのカーディガンのゆったりとした袖口、それが女子っぽくて可愛いらしい。スカートをあまり履かず、今日もシャツにスラックスの私とは大違いである。

彼女はほかにどんな服を着るのだろう。ストライプのワンピースとか、ベイクドピンクのスカートとか似合うんじゃないだろうか。

「……てますか？」

「はい？」

「ハサミ。持ってますか？」

「あ、はい」

突然話しかけられて驚いた。自分から話しかけたのに意識がどこかへ行ってしまっていたとは先輩として情けないな、なんて思ったりした。しかしながら、ハサミ、ハサミか。突拍子もないその言葉にいくらかの疑問を感じながら、ポーチから折りたたみ式のハサミを取り出す。普段使うスリムなペンケースにも折りたためるものならと購入したのだが、結局入らなかった。面倒ではあるが、大きめのポーチに付箋やスティックのりと一緒に入れて持ち歩いている。たったいま取り出した円柱型のそれをケースにいれたまま差し出した。

「切りづらいかもですけど」

「いえ、大丈夫です」

檸檬色のカーディガンから白磁の腕がすうっと伸びて、ハサミに触れる。中指の先と先とがあたって、爪の滑らかなカーブを思う。つややかな桜色に光る親指のそれが小さく震えるたび、セロファンを貼りつけているみたいにオーロラ色になってゆらゆら輝いている。

「ありがとうございます」

小さく首を揺らしているのを見て、会釈だったのかと気づくのに少しの時間を有した。その間に、彼女はおもむろに腰を曲げ、そして、チュールに刃を添わせていた。

「なにやってるんですか」

思わず声をあげた。あげてから後悔して、顔に熱が集まっていくのを嫌でも感じる。視界がしらけて、手先が痺れていく。

「切っちゃおうと思って。このままじゃ、帰れませんから」

「でもそれお気に入りだって……」

彼女はちいさく揺れた。まっすぐな長い黒髪が風に攫われてみだらに踊るのを、耳にかけることなくそのままにして俯いていた。これ以上、言葉は紡げなかった。

「だって、そうするしかないじゃないですか」

ただひとことそう聞こえて、チュールは静かに悲鳴を上げた。

ありがとうございました、と彼女からハサミを手渡された。そうして一人歩いて消えていく背中をぼんやりと見ていた。

薄いそのレースを、わたしのハサミを使って切り裂いていく。前に進むのはつらかろう、時々くいとスカートをつまんでこらえるようにしている。傷口の三日月になるのをただ眺めている。

差し出されたハサミはさらに大きく揺れる。彼女の柔くしっとりした指のはらの冷たさにおかし

くなってしまうかと思う。かたちばかりの感謝を述べるくちびるのつややかな、加えて伏せられた瞼と涙袋のぼかしたような、あかく染まったその、言いようのない、熱。視線が逸らせなくなる。喉元を絞められたように息ができなくなる。

あの瞬間に思う。ただ空虚なところのなかを、ただわたしという存在で埋めてしまうことができたなら。その愁いを帯びた闇に、光を差すことができるだろうか。

——なにを、馬鹿な、ことを。

今ではもう過ぎたこと。影はすでに消え、存在の証明さえかなわない。名前も、学年も、学部もわからない。できることはもうない。ほら、もう声を思い出すことだって。

彼女の記憶が上書きされていくように、空にぶちまけられていたオレンジ色のペンキも濃紺で塗りつぶされていく。風はいつそう澄んだ香りに変わっている。金星がわたしを見つめている。...
...もうすぐ夜が来る。

レポートで悩んだり、授業の変わるのに高揚したり。そんな気持ちは風に吹かれて、土に埋もれて見えなくなる。だからきっと、あのひとのこともいつしか些細なことに成り果ててしまうのだと思う。そんな予感がしていた。

それでも私は、彼女のその表情を、後ろ姿を。

今でも鮮明に覚えている。

あとがき

かなわない恋をします

過ぎ去った過去に思いをはせます

これが私なりの憂いのかたちであります

哀Need憂

香月日向

眼ヤニが張り付き、まぶたが上手く開かない。肌に悪いとわかってはいたが、私はまぶたを擦って無理やり眼ヤニを除去する。眼を開いても、視界はゼロ。真っ暗で何も見えない。今何時だ。私は枕元に置いたはずの携帯を探す。無い。充電器に繋いでいたはずの携帯が無い。代わりに、充電器のアダプターを発見する。コンセントから抜けている。寝ているうちに自分で引っこ抜いてしまったのだろうか。しかし、これで携帯は見つかる。アダプターから延びたコードを手繰る。この先に、携帯がある。拾いに行こう。

「なあっ？」

どしっという衝撃。もぞもぞ動くうちに布団ごとベッドから落下したのだ。受け身を取り損ねた私は、右半身に落下のダメージを受けることになった。軽くうめいた後、なんとかダメージから回復して再びコードを手繰り寄せる。あった。私の携帯。電源ボタンをポチリ。しかし携帯はうんともすんとも言わない。完全に充電切れだ。マズい。とにかく、充電しなければ。私はさっきとは逆方向にコードを手繰り、アダプターを引き寄せる。よし、アダプターを掴んだ。後はこれをコンセントに繋がなくては。私は暗闇の中、コンセントを探し当て、充電器を接続した。携帯の画面に灯が入り、機能が回復する。これで一安心。

「痛っ……」

鋭い痛みが指先に走る。携帯の画面の明りで指を照らしてみると、左手の中指の腹から出血していた。そのまま画面の明りだけで周囲を探索すると、刃をしまい忘れたカッターが転がっていた。あれで切ったのだ。そんなものが落ちている床に転げ落ちてしまったとは。背中 of 皮膚が泡立つ。

あれが首筋にでも当たって、ナントカって言う血管を切っていたら……。また死にそびれてしまった。私は後悔と安堵を混ぜたグレーを溜息と共に吐き出した。

改めて携帯の画面を見る。時刻は午前二時。日付は、私が学校に行かなくなってから丁度一か月と言ったところか。画面上部にはSNSの通知が何件か。その中に、私は見知った名前を見つけた。通知があったのは三十分前。

ユーキさん、まだ起きてたんだ。トクンと心臓が跳ね、微かに頬が熱くなる。

ユーキさんは、私が学校に行けなくなった頃に出会ったSNS上の友達（と呼んでいいのだろうか？）だ。自分と同じように現実生活に疲れ、精神を病んだ（もちろん、精神医学的に病んでいる訳ではない。俗に言う「メンヘラ」だ）人たちの病み垢や裏垢と繋がりたいと思ってSNSをサーフィンしていた時、偶然見つけたのがユーキさんだ。私と同じかそれ以上に病んでいて、すごく寂しそうにしていた。傷を舐めあう人がいて良かったと思った私は、思い切ってユーキさんに話しかけてみた。出会い厨（エロい自撮りを揚げる裏垢女子と出会っちゃってヤっちゃいたい変態ども）だと思われて警戒されたくないから、性別は聞かず、あくまでお互いの心の闇をぶつけ合うだけにした。そうやってやり取りを続けるうちに、ユーキさんは私が何か投稿すればかなり高確率で反応をくれるネット友となったのだ。

ユーキさんなら、話し相手になってくれるかな。私はSNSを開き、ユーキさんにダイレクトメッセージを送った。

「ユーキさん。夜中に突然不安になるのって、どうしたらいいですかね？」

あ、ユウ君からメッセージが来てる。ってか、こんな時間まで起きてたんだ。あたしはユウ君が自分の存在に気づいてくれたことに歓喜し、布団の中で小躍りした。航行不能になった宇宙船のパイロットが、宇宙軍の艦艇に救難信号を受け取ってもらった時の喜びは、きっとこれに近い。がつっ！

「うぎゅっ！」

暴れすぎた。ベッドの脇の壁に足をぶつけた。それも小指。あたしは枕に顔を埋め、悶絶を押し殺す。

なかなか眠ることができずに日付が変わった頃、あたしは話し相手が欲しいと思って別に言わなくてもよさそうなことをSNSで呟いてみた。もしかしたら誰か構ってくれるんじゃないか、そんな淡い希望を抱いて携帯を握りしめたまま布団にくるまっていたのだった。そしたら、最近よくやり取りをしているユウ君がメッセージを送ってくれたのだ。

あたしとユウ君の出会いは約一か月前に遡る。あたしは冬になると精神が不安定になる性質で、^{たち}どうしようもなく追い詰められてしまったのだ。毎日高校に通うのが億劫で、世の中の人全部敵に見えてしまう。そんな状態で精神病んだ呟きをSNSに投稿しまくっていたのだ。日記に書くなどして自己完結させるのではなく、わざわざ人目に触れるSNSに公開したのはもちろん、誰かが救難信号をキャッチしてくれることを期待してのことだ。誰でもいい、誰かに、この愛さえ知らずに育った怪物の心の中身をぶちまけたい。泣き叫ぶ

代わりに病み投稿を呟き続けていたのだ。そしたら、ユウ君があたしを見つけてくれた。最初は出会い厨（SNS上を徘徊して女を漁るヤバい連中）かと思ったが、性別を聞いてこないのが本当にあたしと話したいだけの人だとわかって安心した。あたしが不安で押し潰されそうになっていたなら相談に乗ってくれるだけでなく、彼自身が不安な時はあたしにその感情をぶつけてくれる。あたしのようなギリギリヒト科の獣みたいなヤツでも必要としてくれる存在。それがユウ君だ。

「ユウ君こんばんは！ わかるよそれ。とりあえずホットミルクでも飲んでみな。メイプルシロップ入れるのお勧めだよ。さあ、電子レンジに急げ！」

ユーキさんに言われた通り、私はホットミルクにメイプルシロップを入れて飲んでみた。温かい液体が食道を通過して胃に落ちる。その間に心臓の付近を通過して、心が物理的に温まっていくように感じた。確かに、温かい飲み物を飲んでいるうちに不安が解けていき、平穏が戻ってくる。それに、メイプルシロップを入れたホットミルクはまったりこっくり甘く、とても美味しい。未明に糖分と脂質たっぷりの甘い飲み物を飲むのが、ここまで背徳的な幸福感を与えてくれるとは知らなかった。どうせ死ぬのなら、この甘い幸せな飲み物で糖尿病に侵されながら死にたいものだ。

腹の中から温められて、ちっとも寒くない。そして、言いようのない安心感が血液に溶けて循環していく。なんだかよく眠れそうだ。私はベッドに戻り、再び眠りについた。

眠ったら時間が消し飛び、朝が来る。また一日が始まるという結果だけが残るのだ。それは当然のことで、逃れようのない定めである。

鋭い女の声が、私の眠りを切り裂いた。

「ユウ！ こら起きなさい！ 何時だと思っているの？」

「うげえっ！」

大っ嫌い。カーテンから差し込む光が網膜を刺す。鼓膜に刺さる声はママの声だ。

「ユウちゃんあなた、今日も学校ズル休みするつもりね！ 今日という今日は許しませんよ！」

寒い。ママは布団を剥ぎ取って私を無理やり起こしたのだ。

大っ嫌い。私を否定する存在全て。世界も、学校も、ママも、みんな嫌いだ。誰かクッキーに

して喰ってくれればいいのに。

なんで私が不登校になったかという、これは自分でも答えることができない。本当になんとなく行きたくないのか、それとも他に理由があっても、上手く言葉にできないだけなのか。それはわからない。でもとにかく、学校という環境に拒否反応を起こしてしまうようになったのだ。

私は、この世界には三種類の人間がいると考えている。一つ目は集団のルールになることができる強者。二つ目は与えられたルールの中で要領良く立ち回る凡人。そして三つ目は、要領が悪くルールに適応できない敗北者。私はその三つ目だ。だから学校というルールに弾かれたのだ。環境というルールに適応出来なかった種族は絶滅するしかない。それがこの地球^{ほし}の生物進化のルールだ。アノマロカリスの一族も、恐竜たちもマンモスも、皆そうやって滅んでいったのだ。だとすれば、私が適合できずに腐っていくのは、自然の摂理じゃないか。

ママが私を起こした時には、既に一限の授業に間に合う時間ではなかった。遅刻するくらいなら休みたい。そう思ったが、ママは私を車に乗せて高校まで送っていった。

「ママはね、ユウにちゃんとした大人になって欲しいの」

赤信号で車が止まった時、運転席に座るママのうなじが私に語りかけてきた。

「最近話題になってるでしょ、不登校ヨーチューバーとか。ああいうのは子どもに正しいやり方を教えない親が悪いと思うの。学校でちゃんと『我慢する練習』をしなかったら、社会に出ても色んな苦労や努力に耐えられない弱い人間になってしまうの」

信号が変わり、車がゆっくり加速し始める。私はママのうなじから視線をそらし、流れる車外の景色を見る。ああ、通学路だ。一か月前まで嫌だ嫌だって思いながら歩いていた道が、すごい速度で流れていく。胃を鷲掴みにされて揉みしだかれるような不快感が喉元まで迫ってきた。私は思わず口を押える。

「我慢ができない弱い人は、結局家に閉じこもって、引きこもりになってしまうでしょ。そのまま大人になったら、もう誰にもどうしようもないじゃない。そのまま大人になった人が、この間の事件みたいに、大勢の人を傷つけるようなことをするんでしょ。ママはユウに、そんな人になって欲しくないの」

学校の生徒玄関前に停車するためにハンドルをきりながら、ママは優しく言った。ゆっくりと優しく、私が最も言われたくないことをナイフの如く胸に突き刺した。

不登校は、やがて引きこもりになり、どうしようもない殺人者になる。ママの話を要約すると

、そういうことなのだろうか。

はは、私、人殺しになるんだってさ。学校に行かなければ人殺しになる。でも学校は私が居ていい場所じゃない。学校は不適合を排除するためのフィルターだから。だから私は殺人者になるしかない。そういうことだろ。分ってるよそんなこと。

血液が鉛に変わったみたいに全身が重い。私は鉛の塊と化した自分の体を、校舎の二階の教室まで引きずった。何が面白いのかと思うほどの大笑い、そして喧騒が教室から私の歩く廊下に排泄される。喧騒は私の鼓膜をぎりぎり削り、不快感をたっぷり耳に塗り付けてくる。私は奥歯に力を入れる。

「……おは……よ……ございます……」

がらりとドアを開け、教室に入る。休み時間中の教室の騒がしさが一瞬収まる。その一瞬に、クラス四十余名分の視線が私に集中砲火される。なんでお前来たんだよ、そう言いたげな視線もいくつかある。視線にハチの巣にされた私は、それでも何とか自分の席に着こうとする。

「あれ？ 梶間来たの？」

「調子悪いんじゃないかったの？」

教室の一番前の私の席の周りには、女子が数人たむろしていた。その女子の視線には困惑と好奇の色が混ざっていた。

「あ、ごめん。机荷物置いちゃってたわ」

女子が退いて姿を現した私の机には、女子たちのカバンや辞書が積み上げられていた。ああ、私の場所はやっぱり無いんだなと、視覚的に理解させられるようだった。

「……ごめん……あり……がとう」

言葉を絞り出すたび、剃刀でも吐き出しているみたいに胸が痛む。喉の奥が酸っぱくなってきた。胃酸が逆流してきたのだろうか。私は心理的にも物理的にもこみあげてくる汚物を飲み込み、なんとか席に座る。

「おい座れ～授業はじめっぞー」

やる気のなさそうな、聴いているだけで疲労が伝染り^{うつ}そうな声が聞こえた。ああ、ヤツだ。数学の

ハゲ。教室の白っぽく汚れた黒板の前に立ったハゲは、空気が抜けたみたいにしわくちやの顔を不機嫌そうに変形させ、教室の中を観察する。そして、最後に一番前の席に座る私を発見する。

「おお梶間来たか。引きこもりは治ったか？ 最近話題だもんな引きこもり、通り魔して小学生刺したってな……課題をちゃんと提出する、試験で赤点取らない、そういう当たり前のことを普通にできないヤツはああやってね、どうしようもなくなって暴力に訴えるからな……梶間もそうならんようにな」

当たり前のこと、普通のことのできない人間は、殺人者になる。ママが今朝言ってたことと同じだ。

なら、一か月も課題プリントを白紙のまま保存している私は、とうに犯罪者となっているだろう。

ハゲが、しわに埋もれそうな小さな目で私を見下ろす。当然のことのできないヤツはダメな奴だ。そう言いたげな目だ。よく知っている。この目も、私は嫌いだ。周りの人が普通にできていること全部、私はまともにできない。それでも、このくらいできて当然、できないのは異常、努力でなんでもできる、できないのは怠慢だって、異常を排除しようとするのが学校だ。だから私は嫌で嫌で仕方ないんだ。

でも、嫌だって拒絶すれば、いつか人を殺すような社会不適合者になる。だったら耐えなきゃ。

「じゃあ梶間、ここやってみろ」

ハゲの気だる気な声に、体がびくっと跳ねた。その様子を見たクラスメイトのひそひそ笑いが聞こえる。また酸味が喉を這い上がってくる。こめかみのあたりには、昆虫でも埋め込まれたみたいに、ギリギリとした痛みが蠢うごめいている。

その言いようのない不快感を堪えながら、私はなんとか立ち上がる。薄汚れた黒板に汚い字で板書された問題の前に立とうとする。粉に半分埋もれたようになっているチョークを拾い、問題を解こうとする。そこまで難易度は高くない、はず。しかし、わからない。そもそも、何を問われているんだ？ そもそもどこからこの問題だ。いや、その前にこれはアルファベットなのか？ キリル文字ではないのか？ あれ、神聖文字ヒエログリフが……。

意味不明の文字列が回転する。後頭部から尻までの広い範囲に強い衝撃が走る。

後で聞いた話によると、私は二限の数学の授業中に倒れて保健室に運ばれたらしい。一か月ぶ

りに登校しても、一つも授業を受けることなく早退することになった。パパもママも仕事で忙しいので、迎えを呼ぶこともできなかった。

ひとりぼっちで私は学校を後にした。途中で雨水用の側溝が見える度に、そこに吐しゃ物を出してしまいたいと思った。

「学校に行けない不適合者は引きこもりになって、通り魔するんだってさ。僕じゃん（笑）」

平日の昼間にこんな病み投稿に反応する暇人はいない。私はそう思いながら、SNSに呟きを投稿した。

ひょっとすると、今にも人が死ぬかもしれない。その不安が、今のあたしを動かしていた。放課後になって携帯を開いた時、ユウ君からの通知に気づいた。ユウ君がまたメッセージをよこしたのだ。それも、遺書ともとれる内容だ。

「生きててごめんなさい。人でなしなので消えます」

まあ、生きててごめんなさい、なんて思うのはあたしだって毎日のことだ。死にたいって思うのなんてしょっちゅうだし、そう思って「死にたい」って呟くのだって普通だ。「死にたいなんて言うなよ」だって？ やかましいわ！

でも、そうやって呟くのは、本当に「死にたい」とか「生きてるのが申し訳ない」って思っているからじゃない。「生きたい」からだ。誰かに「生きていてもいい」と承認してほしいからだ。誰かに助けてほしくて、叫んでいるんだ。事実、あたしがそうだった。そんな時にユウ君がいたから、今あたしは生きている。胸骨の内側で心臓が動いているのも、腹に納まった肝臓が熱を作っているのも、全部ユウ君があたしを助けてくれたからなんだ。

だから、ユウ君は助けてほしがっている。なら助けなきゃ。

「消えちゃダメだよ、寂しいじゃん」

あたしはとにかくメッセージに返信した。

「ごめん」

「でももう無理だよ」

「ユーキさんには悪いけど、僕は死ぬって決めたんだ」

すぐにユウ君は返信し、立て続けにメッセージを送ってきた。あたしはすぐ返信しようとしたが、生徒指導の先生が巡回を始めたので携帯を隠さざるを得なかった。自称進学校は放課後であっても校内は携帯使用禁止だ。見つければ狩られてしまう。中には昼休みに抜き打ち監査に入って携帯十三台を押収した先生もいるくらいだ。ユウ君との唯一の「繋がり」を失うわけにはいかない。あたしは急いで家に帰ることにした。

あたしはほとんど走るようにして家に帰った。

真っ直ぐに自室に向かう。カバンを投げ出してベッドに腰掛け、携帯にかじりつく。SNSを開くと、また通知があった。

「どうせまたかまってちゃんだって思われてるよ、きっと」

「でもいいよ。もう僕には関係ない」

「人殺しになる前に死にます」

何を言っているんだコイツは……？ あたしはどう返信すべきか悩んだ。下手なことを言えば、相手を余計刺激しかねない。慎重に、出来るだけ軽く、いつもと変わらない感じで話しかけなければ。

「何言ってるんですか」

「本気でそんなこと思ってるの？」

「ビビるんだけど」

送信ボタンを押してから、しまったと思った。死にたいって、死ぬと決めたことを否定してしまった。これでは余計相手に警戒されてしまう。どうしよう。マズい。もしユウ君が本気で死んでしまったら。明日の朝刊を見るのが嫌になった。

大丈夫、大丈夫、大丈夫だよ。きっと、絶対マジじゃない。死にたいとか自殺しますとか言って、構って欲しいだけだよ。まったく、可愛いんだから。あたしは必死に自分を安心させようとした。

「何言ってんの？」

「みんなそう言うけど本気だよ」

え、ちょ……おま……。心臓がバクバク慌てふためく。

ぺっと、ユウ君から送信された画像がトーク画面に映し出される。そこには、どこかのビルの屋上と思われる風景が写されていた。

「ここから飛び降ります（笑）」

（笑）じゃねえよ！ 本気かよ！ やべえじゃん！ 危うくひっくり返りそうになる。待て、ダメだ！ どうしようどうしよう！ 心臓も脳も、とっくにパニック状態だった。落ち着け、こんな時こそホットミルクメープルシロップ入りを飲んで……。

あたしはキッチンに行き、ホットミルクでも作ろうかと思った。その時、またメッセージが来た。

「じゃあ、死にまーす」

飲んだら場合か！ 今まさに人が死にそうなんだ！ あたしの脳内で、ガチャリと自転車のギアとチェーンが噛み合うような音が響いた。脳に十分な量の酸素が巡り、目の前が一気に明るくなったように感じる。暴れる心臓は全身の筋肉に酸素を運び、いつでも駆け出せる準備をしてくれた。

あたしはユウ君が送ってきた写真を注意深く観察する。ビルの屋上だが、雑草が生い茂っている。管理が行き届いていないようだ。背景には赤くて大きい家電量販店の看板が見える。どこでも便利な駅の前……。あたしの脳に電流が走る。

駅裏の廃ビルだ。あそこなら十分な高さがあるし、管理もずさんで屋上にも容易に侵入できる。そこに、今にも死にそうなくらい傷ついたユウ君がいる。

あたしは、曲がった鉄砲玉のごとく玄関から飛び出すと、そのままの勢いで自転車に跨った。整備不良でギャリギャリ悲鳴を上げるペダルを通常の三倍の速度で漕ぐ。運動が得意じゃないあたしの体はすぐに熱くなり、肌は真っ赤になる。

間に合え！ 間に合え！ あたしは必死に念じながら自転車で風を切り裂いていった。

もう話せるのも最後だからと思い、私はユーキさんにダイレクトメッセージを送った。

「生きててごめんなさい。人でなしなので消えます」

回りくどいけど、サヨナラって意味だ。そしてありがとうって意味でもある。こんな人型不燃ゴミみたいな私に、いままで付き合ってもらったんだ。最後の最後まで、お礼がしたかった。いくら社会不適合者の人でなしって言っても、そのくらいの礼儀はわきまえているつもりだ。

冬の匂いを残した冷たい風が、私の髪に絡みつく。遮る物のないビルの上にいるからか、風は地上よりもずっと強く冷たかった。鳥が糞をして運んできた草が好き勝手生えた屋上は、まるで天空の野である。今にも落ちてしまいそうなくらい傾いた太陽は真っ赤な光を投げってくる。まるで空が血を流しているみたいだ。この赤い光の中に、私はこれから溶けていくのだ。私の身体全て溶かし、無残に飛び散らせてくれ。

ぶーっと、ポケットに入れた携帯が唸る。見ると、ユーキさんが私のメッセージに返信してくれたようだ。ユーキさんと最後に話せるんだ。こんなに嬉しいことはない。体が熱くなるのがわかった。私はこみあげる熱い物を抑えながら、メッセージを確認した。

しかし、そこには量産型の良心が出力した、どこかで聞いたことのある「自殺は良くないよ」が転がっているばかりだった。

「消えちゃダメだよ、寂しいじゃん」

知るかバーカ！ 私は自分で考えて自分で死んだ方が良いつて思ったからこうなってるんだよ！ 「寂しい」なんて安い言葉で片づけるな。私はユーキさんの量産型「自殺は良くないよ」を迎撃すべく返信する。その後もユーキさんから「自殺は良くないよ」の第二次攻撃部隊が来るので、逐次迎撃する。

私は携帯のカメラを起動し、周囲の風景をパシャリ。撮った写真をトークに送信する。これでおしまいだ。私は本気だ。

落ちれば間違いなく死ぬ高さの屋上の写真を送ってから、ユーキさんからのメッセージは途絶えてしまった。そうだ、それでいい。

やっと静かになった。これで安心して死ぬ。私は目を閉じ、恐らく最後になるだろう呼吸をする。じっくり、深く、空気をよく味わう。

ああ、どうして私は不適合者なんだろう。なんでみんなと一緒になれなかったんだろう。パパとママはどうして私なんか作ったんだろう。なんで、普通に生きられなかったんだろう。私は、本当はどこに居るべきだったんだろう。私の、本当の居場所は、どこにあるんだろう。体が熱暴走したみたいに熱くなり、相対的に外気の冷たさが増して感じられる。寒い。寒いはずなのに、私の眼は熱い液体を流して排熱しようとする。

この世に未練がないわけじゃない。やりたいことは山ほどある。でも、この世界は私が生きるには過酷すぎる。もっと優しく、生きるのに便利な世界に転生できたらいいな。そこで、ずっと、しっかり生きていこう。私はゆらゆらと屋上の端に向かって歩き出した。

「うらあっ！」

ドンがらガッシャン！ 突然背後から大きな音と声がある。私は思わず飛び上がりそうになった。あんまりびっくりしたので、投身自殺とはまるで関係ない所で心臓が止まるかと思った。

私は恐る恐る振り返った。見ると、私が屋上に上がるのに使ったドアがあるべき場所に無かった。ドアは錆び付いた蝶番を無残に変形させ、屋上の雑草の上に横たわっている。そしてさっきまでドアがあった長方形の穴には、黒い影が立っている。よく見ると、それは少女であるらしい。小柄な黒髪の少女が、真っ黒なセーラー服に身を包んでいる。ボブヘアに切られた黒髪は汗でびしょりと濡れ、額や頬に張り付いている。屋上へと向かう階段に繋がる闇はほとんど少女の黒髪黒セーラー服と同化し、闇の虚空に真っ赤になった顔だけが浮いているようにも見える。

「……だ……だれ……で……すか？」

ひくひく震える喉を絞り、私は少女に尋ねた。

とっくにオーバーヒートし、発汗による放熱も文字通り焼け石に水状態となったあたしの体は、それでも走るのを止めなかった。脚が折れるんじゃないかと思うほど痛む。限界を訴える体の悲鳴を黙殺し、あたしは廃ビルの暗い階段を駆け上がる。駆け上がった先に、光の線で長方形が描かれている。これが

屋上に出るドアだ。この先に、ユウ君がいる。ドアよ！ お前に恨みはないがそこをどけ！ 階段を駆け上がった勢いのままに、私はドアを蹴り開けた……つもりだった。

「うらあっ！」

ドンがらガッシャんと派手な音を立てて、ドアはその生涯に幕を閉じた。錆びきったドアの蝶番は通常の三倍の速度で突っ込むあたしの蹴りに耐えられなかったのだ。変わり果てた姿になったドアの向うには、雑草の生い茂る屋上が広がっている。その先には、赤い家電量販店の看板が見える。間違いない。ユウ君が送ってきた写真はここで撮られたのだ。

しかし、屋上にはユウ君はいなかった。と言っても、ユウ君の姿など見たことがないので、あくまで私がユウ君だと想像していた人物がいなかったのだ。まさか、もう飛び降りたのか？ いや、そんなはずがない。このビルから飛び降りるなら、人通りの多い駅裏通りに落下するはずである。そうなればもっと大騒ぎになる。でもそうじゃないということは、つまり、まだ誰も飛んでいないということだ。

「……だ……だれ……で……すか？」

前方から、蚊の羽音のように細い声が聞こえた。わたしの注意が一気に音源にオートフォーカスする。そこには、紺のブレザーを着た人が立っている。深紅の夕日に透けるダークブラウンの髪は、風になびいて正確な長さはわからない。性別は……少年？ しかしスカートをはいているから女の子？ いやでもこの時代、スカートをはく男の子だっているだろうし。顔立ちだって男の娘って考えれば不思議じゃない。いったいどっちだ？ あたしは混乱したが、一先ず質問に答えることにする。

「あたしは……結城加奈子。そういうあなたは？」

あたしはドアの亡骸を越えて屋上に出る。あたし的に現時点で男の娘説が有力などっちかわかんない子は、少し戸惑いながら口をもごもごする。

「……わ……わわ、私は……ユウ……梶間ユウ、で……す」

うっかりすれば風の音にかき消されてしまいそうな細い声で、その子は名前を教えてくれた。SNS上の名前が本名だとは限らないが、この子がユウ君である可能性が一段と高まった。

「ユウ……じゃあ、あなたがユウ君ってことで、良いのかな？」

「ユウ……君？ 確かに、ユウって名前でSNSやってるけど……そういう加奈子さんは……ユーキさん、なの？」

あたしは静かにうなずき、肯定の意を示す。冷たい風が吹き、ユウのダークブラウンの髪はふ

わりと舞う。徐々に近づくユウの姿は、あたしにはそのまま風になって消えてしまいそうに思えた。

「あの……ユウ、君？ 色々言いたいことはあるんだけど、一先ずははっきりさせない？」

「はっきり？ なんのこと？」

「どっち？ 男の娘？ それとも、女の子？」

ユウは「あ、」という顔になる。

「あ、その、えっと……ごめん。私、SNSだといつも自分の事『僕』って言ってるから……あんまり性別とかバレちゃうと変な人が寄ってきそうで怖くて……その……女の子、だよ」

あたしの中のユウ君は蒸発し、代わりに、ダークブラウンの髪を風に舞わせるユウちゃんが目の前に現れた。男の娘はおろか、僕っ娘でもなかった。少しだけ、寂しいような気がした。

「あ……あの……どうすれば、いい？」

ユウがまた話しかけてくる。うむ、確かに可愛らしい女の子の声である。あたしはユウの少し手前で立ち止まる。

「どうするって？」

「なんで……ユーキさんは、ここに来たの？」

そろそろ本題に入りますか。

「ユウ、あんたさっき、『人殺しになる前に死にます』とか言ってたよね」

「うん……」

グラグラと、腹の底で熱いものが沸騰し始める。あたしはその熱を声に乗せて放つ。思わず声が震えそうになる。

「撤回しろ！ 今ならまだ間に合う。それに、ここから飛び降りたらどうなるか想像してみろ？ 駅の裏って言ったって大勢の人が歩いている。そこに女の子一人分の重さの物が、こんな高い所から落ちてくるんだよ。死ぬのは身を投げた子だけじゃないって、わかるでしょ……」

ユウは、人殺しになるくらいだったら死ぬと言っていた。どうやったらこんな子が人殺しになる未来を予測できるのかわからないが、とにかくユウは「いつか他人を傷つけるくらいならたった今死にたい」って思っている。なら、自分の自殺に巻き込まれて人が死ぬのは不本意だし、自殺の動機とも矛盾するはずだ。頼む、どうか思いとどまってくれ。あたしは心の中で手を組み、普段は中指立てまくっているはずのカミサマに祈った。

もつとも、こんなことで思いとどまるくらいなら、最初から飛び降りて死のうなんて結論には至っていないのだろうが。そんなに簡単な話じゃない。

「ふふっ……出たよ！ 型抜きしたみたいでありきたりでつままない『命を大切にしよう』が…
…ふざけないで！」

さっきまでとは違う、軽くドスの聞いた声でユウは言う。そうだろうな。わかるよすごく。あたしはうなずきたいのをこらえた。今のユウには、共感も憐れみも、全て攻撃と認識されてしまう。

「一生懸命に考えて考えて考えて、苦しくて苦しくて苦しくて、やっとたどり着いた答えなの！
もう死ぬしかないの！ 学校に行けない、わがままで我慢ができない弱い人は、引きこもりになって弾かれるの！ そしていつか、何もかも嫌になっていっぱいいっぱい人を殺すんだ！ たまにあるじゃんそんな事件、社会に見捨てられて失う物も守る物も何にもない、すっ空かんの『サイキョーの人』が通り魔するの！ 私はいつかそうなるって、ママも数学のハゲもみんな言うんだ！ 無理なんだよ！ 私にはこの世界は難しすぎた！ ここから飛んで、もっと優しい異世界に転生するんだ！」

ユウがヒステリックな声で叫ぶ。あたしはその声を腹に叩き込まれた。ヒステリックなボディブローが体を貫いていく。まるでユウから一種の波動が放たれているかに思えた。

「ホントはさあ……死にたく……ないよ……でも仕方ないじゃん！ 私が生きていていい場所なんてどこにもない！ みんなが死ねって願ってるようなもんなんだよ！ だったら望み通りにしてやる！」

ぷちっと、何かが切れた。とりあえず、非常弁全閉鎖！ 強制注入器作動！ 総員、対ショック・対咆哮防御！

「みんなって！ 誰さんと何ちゃんと何くんのことだよ！」

あたしの喉が、力いっぱい空気を震わす。声帯から発せられた空気の疎密波に弾かれたかのよ

うに、ユウの上半身が後方にのけぞる。

「そのみんなに、あたしは入れてもらえるのかね？ 無理だろうな！ あたしはいつだってみんなと違うところで独りぼっちだったもんな！ 仲間外れは慣れてんだよ！」

大きく一歩踏み出し、間合いを詰める。腕に筋肉に血が走り、瞬時に身を引こうとしたユウのブレザーの襟を掴む。

「生きてよ！ あたしを置いて死ぬなんて許さない！」

ごーんと衝撃が脳を揺らす。ユウに頭突きを食らわせた頭蓋骨がびりびり震える。

「みんなはあんたに死ねって言うけどあたしは違う！ 生きろ！ 死んじゃヤダ！ あたしを独りにするな！」

目、鼻、口全ての穴から液体が迸る。至近距離であたしの咆哮（とヨダレ）を浴びたユウはあたしの手から逃れんと暴れ、ガリガリとあたしの手を引っ掻いた。あたしは右足を軸に力をこめ、ユウの体を屋上の端とは反対のドアがあった方に向かって放り出す。そして回転エネルギーをそのまま自分の体に伝えて、ユウと一緒に雑草の上に倒れ込む。襟を掴む手を引き、ユウが頭を打たないようにする。

「痛い！ 何するの！」

「見りゃわかるだろ！ 押し倒して組み伏せる！」

「痛い！ 放して！ お願い！」

「嫌だ！」

あたしはユウの首に左腕を巻きつけ、自分の胸に縛り付ける。

「ユウ君だけだったんだよ……あたしの声を、心の叫びを聞いてくれたのは……あたしを助けてくれたのは！」

あたしはユウの肩に顔を押し付ける。ブレザーに鼻水を拭い付けてしまうが、構う物か。ユウを拘束するのに使わなかった右腕を、ユウの後頭部に回す。柔らかいダークブラウンの髪の毛の感触が手のひらの神経を刺激する。拘束を解こうと暴れていたユウから徐々に力が抜け、代わりに細い嗚咽が残る。

「本当に……私は生きていていいの？ こんな私に、居場所なんて……あるの？」

「ああ、生きてちゃいけない命なんか、あるもんか。居場所なら……あたしが創る」

「どうやって？」

ギクッ！ やべえ、具体的なこと考えてない！ あ、頭突きのダメージで脳が……。

「どうやってって、まあ、その……なんだ、あたしの家族を黙らせなきゃなんないけどさ、もし家に居づらい気分なら、あたしの部屋に泊めてあげる。女の子同士なら、まあ何とかかなるでしょ。学校の勉強わからなくなったらあたしが教えてあげる。あ、数学と基礎無しの理科以外ね」

自分で言うのもなんだが、あたしは頭が弱い。勉強もあんまり得意じゃない。それでも、何とかして教えたい。あたしの部屋でユウと二人教え合いながら勉強して、ベッドを取り合いながら寝るのも楽しそうだ。

「ユーキさん……私……」

「大丈夫、あたしはユウ君の味方だ……」

ユウがあたしの肩に顔を押し当てる。ずーずー鼻水をすする音が聞こえる。これはあたしの制服も洗濯しないと。あたしもユウのブレザーにヨダレと鼻水拭い付けたからお互い様か。

「私は……ユーキさんの……」

嗚咽と鼻水すすりの間から、ユウが何か言おうとする。あたしはユウの頭を撫でながら耳を澄ませた。

「友達……で、いいの？」

ぎゅっ！ あたしは絞め殺すつもりで、ユウを抱きしめた。

「ありがとう……もちろんだよ」

「うげえっ！ づぶげるうぐう！」

友達。自分にとって最も縁遠い物が、今腕の中にある。あたしは、残った全てのエネルギーを

腕に回し、ユウを締め付けた。締め付けられるユウの体からは、しっかりとした鼓動が聞こえた。

ああ、この子、生きてるんだ。（終）

解説とあとがき

・梶間ユウ（ユウ）……メンヘラ裏垢不登校女子。お題が「憂（ゆう）」だったことから連想し、ブルーディスティニー号機パイロットのユウ・カジマから名付けた。

・結城加奈子（ユーキ）……三日に一度は自殺願望に駆られるメンヘラ。常に愛に飢えていると同時に自己否定が激しい。複雑な家庭環境で育ったという設定（今回未使用）で、愛さえ知らずに育った怪物である。小柄で体力的には低スペックのはずだが、今回は筋肉少女枠として脳筋っぷりを発揮することとなる。

・RX-79BD-1ブルーディスティニー号機……連邦軍の試作モビルスーツ。陸戦型ジムの頭部に対ニュータイプ殲滅システム「EXAMシステム」を搭載し、胴体以下を陸戦型ガンダムの物に交換した機体。機体は青を基調としたカラーリングが施されている。通称「蒼い死神」。実験部隊「モルモット隊」所属のユウ・カジマの乗機となり、強奪されたブルーディスティニー二号機に撃破されるまで各地を転戦した。なお、本作とはパイロットの名前以外全くの無関係である。作品コンセプトは「『憂』を憂鬱にしない」こと。以前「文芸部に入ろうか迷ったが、部誌に掲載される話が暗すぎて止めた」「心の闇を吐き出すために創作をしたんじゃない」という意見を耳にした。講義室が開くのを後ろで待っていただけの人だったので詳しい話を聞いたわけではないが、確かにちょっとこの部は鬱展開（というか死亡率高め）な話が多いと感じていた。なんとか明るく楽しい話を書けない物かと悩んでいる所で今回のお題「憂」である。ネットで「憂」と検索すると「憂国あんでな」という保守速報のお友達が出てき。憂、憂鬱

の憂。何かとマイナスなイメージがある言葉だ。ここで、新明解国語辞典で「憂い」を引くと「①心配。②悲しみで心が閉ざされ、ゆううつなこと。（中略）②は「愁い」とも書く」とある。また「憂」単体の漢字の意味を引くと単に「心配する。心配」とあった。つまり「憂」の辞書的意味ではそこまでマイナスな感情でもなく、単に「心配」くらいの意味であると解釈することもできる。また、何の番組だったか記憶は不確かだが、武田鉄矢氏が「『憂い』が多い『人』と書いて『優しい』です。優しい人は、それだけ憂いも多いのです」と言っていたような気がする。人を想い心配する、人のために「憂える」人は優しい人だということだ。今回の作品では、そんな優しさが描けていれば幸いです。誰にも伝わらないネタと筋肉論破で終わってる感あるけど。それではまた。

ここはきれいな海の中。今日もたくさんの生き物であふれかえっています。たくさんの生き物が会話する音、砂や岩が海底で動き回る音が聞こえてきます。

「やあ、今日もいい天気だね。調子はどうだい」

と、一人のクラゲがもう一人のクラゲに話しかけます。

しかし、話しかけても相手は全く答えてくれません。彼のことなど気にせず海の中をゆらゆらとキレイに漂ってばかりです。これには彼も困ってしまい、自信を無くしそうになります。だけでもここであきらめるようなくらげではありません、何回も話しかけて相手の注意を惹きます。

「あそこにいい食事場があるんだ。一緒に行かない？」

「君のスマートさと、かさの丸さは群を抜いてきれいだね、一目ぼれだよ」

「君に出会えてとてもうれしいよ、これは運命なんだろうね」

何回も何回も話しかけますが相手は無視してばかりでつっけんどんな態度です。これには彼も自分のふがいなさに自信を失ってしまい落ち込みます。

いったんはあきらめ彼女から離れることにしました。海の中をぶらぶらと潮の流れに任せて漂います。失恋した後だというのに、太陽の光に輝く海の中はとてもきれいで、クラゲは少し気分が落ち着いてきました。

ああ、今日はとてもいい天気だなあ、何も日光を遮るものがなくてきらきりと光が入ってくる。僕たちクラゲを狙ってくるような奴らも光の温かさと海の心地よさでのんびりしているから襲

われる気配もない。このままどこまでも流されて新しい世界を見つけてそこでゆっくり暮らしていこうかなあ、と彼は思い始めました。

しかし、海の美しさに触れて癒されているうちにだんだんとあの彼女のことを思い出してきました。一度は忘れたはずなのにやっぱり彼女のことを完全には忘れることはできないのでした。彼は彼女を探しに出かけていきました。しかし、探そうにも彼女がどこに行ったのかはわからず、自分もどこにいるのかわからなくなってしまいました。

「もしかしたらこのまま会えずに消えて、海の一部になってしまうんじゃないか」

と、不安になってきました。

夜になり、真っ暗な世界の中で、まだ彼は漂い、考え続けていました。会えずに終わってしまうのも悲しいが、会ったところで結局同じように無視されてしまうのではないか。そうしたら僕は一体どうしたらいいのだろう。いっそのこと、この世界から消えてしまおうか。とも考えていました。

海の暗さは彼をとて暗い気持ちにさせます。どこかもわからず何も見えない世界で恐怖におびえながら彼はただ漂うばかりでした。

「いや、このままではいけない、海の暗さに飲み込まれてしまっている。まだ何も決まったわけじゃない、僕だってプライドがあるんだ。今に見ている、君を絶対見返してみせるぞ」

と、彼はつぶやき体をゆらゆらさせました。

夜が明け、また明るいきれいな海が戻ってきました。しかし、ここがどこの海なのか全くわかりません。それでも彼には彼女に会うという使命があります。絶対にあきらめたりはしません。

その時奇跡が起きました。なんと彼女がいたのです。彼はあまりの嬉しさに触手を躍らせ体をゆらゆらと大きく揺らして喜びの意を表しました。あとは彼女に近づいて話しかけるだけです。

「ついにこの時が来たぞ、まさかこんなところで会えるなんて奇跡に違いない。努力して漂い続けた結果が出たぞ。やっぱり努力ってした分だけ報われるんだなあ」

と、海の中に言葉を吐き出しました。

ゆっくりと彼女に近づき、余裕そうな表情をしながら彼女に話しかけます。

「やあ、今日もいい天気だね。調子はどうだい」

やっぱり彼女は何も答えてくれません。しかしここで出会ったからには必ず彼女に答えてもらうんだ、という気持ちで挑みます。

何回も何回も話しかけても絶対に彼女は答えてくれませんでした。彼もあきらめません、これを逃してしまったら一生彼女に会えなくなってしまうと思ったからです。

「僕は何としても君が欲しいんだ、お願いだ、何かしゃべってくれ」

と彼が大きい声で話しかけました。これで相手が答えてくれなかったらもうきっぱりとあきらめて一人でゆっくり漂って残りの人生を過ごそう、と彼は決めました。

相手は体を揺らして漂うばかりで全く答えてくれませんでした。

彼はついに彼女をあきらめることにしました。もうここまで無視されてはあきらめるしかありません。

「僕は君をあきらめることにするよ。素敵な相手が見つかることを願っているよ」

と、彼は寂しそうな口調で彼女に別れを告げました。

その時、何か大きな影が彼のすぐそばを通り彼女の方向に向かっていくのが見えました。びっくりしてそっちのほうを見ると、大きな亀が彼女にかみつぎ、食べようとしているところでした。びっくりしてそこに向かおうとしましたが、すでに食べられた後でした。そもそも潮の流れに流されるだけなので一生懸命泳ごうとしても流されるだけなのでした。

目の前で自分の好きだった子が食べられてしまった、その事実が彼の心を水底へ沈めていきました。

「ああ、なんてこった、彼女がこの世界からいなくなってしまった。なぜあのタイミングで奴がやってくるんだ、もし僕があの時あきらめずに話しかけ続ければ僕が身代わりになって彼女を救うことができたかも知れないのに」

と嘆きました。

が、嘆いたところで彼女は帰ってきません、ただ海の中にはむなしく彼の声が吐き出されては消えてゆくだけでした。

今は昼のとても明るい楽しい時間のはずなのに、彼にとっては新月のとても暗い海か、うわさに聞く深海という真っ暗な世界と同じ居心地でした。

「いっそのこと僕も食べられるか何か悪いことが起きてそのまま消え去ってしまいたいなあ」

と呟くのでした。

一体僕はどうしたらよいのだろうか、生きる希望もなくしてしまった。ここでは僕を知っている生き物もいないし話を聞いてくれる人だっていないだろう。だからと言って死にたいと思ってもなかなか死ぬるものではない。僕には勇気が足りないのだ、だから彼女のこと失ってしまうのだ。ああ、だれかこの臆病で生きる価値のない僕を救って楽にしてくれるような素晴らしい立派なやつはいないものだろうか。こんなことを考えてしまうのは本当はよくないんだろうけども今回は仕方がない、事情が事情なのだ。今はだれも文句は言うまい。

「しかし、今日はやけに海面を漂っている魚が多いものだ、大きさもばらばらでクラゲみたいなやつもたくさん漂っている。なんだか形が変だし生きているかもわかんないや。何かの異常気象だろうか、まあ、鳥や大きな魚たちにとってはごちそうだろうなあ。僕は小さいからあんなに大きなものは口にすることができないけどね」

などと言いながら海の中を旅行中なのでした。

これからのことを考えながら海の中にいると、なんだか海がおかしいと気づきました。なんだろうと思い周りを見渡してみると、なんだか海が暗くなってゆくのが分かりました。

「なんだろう、夜になるといってもさすがに早すぎるよな、いやそれとも僕があまりにもいろいろ考えすぎて時間があっという間に過ぎてしまったのだろうか」

と思い周りにだれか会話ができそうなやつはいないものか、と見渡してみました。

が、どこを見渡してみても誰もいませんでした。

「まいったな、これじゃ聞こうにも聞けないし、誰もいない海なんてただ青くて広いだけでものすごくつまらないじゃないか。どうしたものかなあ」

などと愚痴をこぼして見るのです。

ふと上を見上げてみると、海面にはたくさんの魚たちの影が見えました。

「またたくさんの魚たちが浮かんでいるなあ、でもさっき見たたくさんの魚たちとは形が違うなあ。ちゃんと目やひれ、尻尾もついているぞ。もしかしたら僕が今までに見た影は魚ではなかったのかもしれないぞ。一体何だったんだろうか」

彼は今までぞっこんだった彼女のことは忘れ、新しくわいてきた疑問を考え始めました。

しかし、どれだけ考えても全くわかりません、手掛かりも何かを知っていそうな生き物が全くいないのです。

でもまあ考えたところすべて僕の創造にすぎないし、よほどのことじゃなきゃ生き物は滅びないから別にいいかと彼は気楽に考えていました。

とその時、彼の目に彼女を食べたあの亀の姿が映りました。

「やばい、ついに僕のことまで食べにやってきたのか、ここで僕は死にたくないぞ、どうしよう早く逃げなきゃ。」

彼は慌てて逃げようとしたのですが何かが変だと思いました。確かに亀はこちらに来ているのですが動いている感じがしないのです。

「変だな、僕を襲ってこようとしないぞ、生きている気配もしないし。もしかして死んでいるのかも」

と思ったので頑張って潮の流れに乗って近づいてみました。

「やっぱり死んでいるな、いったい何があったかは知らないが、これで僕を襲ってくる奴が少しでも減ってラッキーだ」

と考えていましたが、次第に海の様子がおかしくなっていることに気づきました。海水の味が少し変なのです、さらに色も少し濁ってきていたのです。

「なんだこれは。僕が考え事をして時間をつぶしていた間に一体どうなってしまったんだ。そういえば生き物の姿が全く見えなくなっていたな、あれは海が暗くなったから夜だと思って眠り

に行ったのかと思っていたが、まさかみんな死んでしまっているのか、何かの異常気象でも起きているのか」

と彼はとても怖くなりました。

「いやだ、こんなところで死にたくない。みんながいなくなったとしても僕は生きたいんだ。たとえ小さな命の僕でも生きていれば海は生きているのと同じなんだ。絶対に生きてみせるぞ」

と心に誓いました

しかしたくさん動いて疲れたのかなんだか眠たくなってきました。ここで眠ってしまっただけは何が起きるかわからない、せめてどこか安全なところで眠らなければ、彼は必死に自分に言い聞かせ起きていようとしていましたが、結局眠ってしまいました。

彼が目を開くとそこはいつも通りのきれいな海でした。そこにはたくさんの生き物が楽しそうにぎやかに泳いだり海底で動いたりしていました。

「僕は今夢を見ているのだろうか、とても暖かくて気持ちがいい。何かに包まれているようでこのままずっといたいぐらいだ。しかしここはどこだろう、こんなにきれいな海は聞いたことがないぞ、誰かに聞いてみるか」

そう言って近くにいた魚に、ここはどこかと聞いてみました。しかしその魚は彼を見てもにこにこして泳いでいるだけでした。確かにそれは生きてるとわかるのになんだか変な感じが彼にはしました。

「変な奴だったな、聞いているんだから答えてくれてもいいのに、あまりに居心地が良すぎてずっと夢でも見てるんじゃないのか」

と彼は考えました。まあ確かにこの海はとても居心地がいいので、別に何も聞かなくてもずっとここにいれば問題ないかと考えました。そのまま彼はずっとこの海で幸せな時間を過ごしたのです。

ここはとある海の中。ただただ濁った青い、生き物の気配が全くない、広い海があるだけなのでした。

ここでニュースです、昨日未明、原油を乗せたタンカーと化学物質を乗せたタンカーが何者かによって襲撃されました。犯人は不明ですが、政府は最近話題となっているテロリストグループによる犯行の可能性が高いとして調査を開始する予定です。 今日までプラスチック等による海の汚染が問題となっている中で、今回の事件によって環境改善に更なる打撃となりそうです。

れんげ
蓮華の愛を貴女に

ユルング

外を眺めれば雪が降っている。

空も濁っている。

終わるにはこんな日が良いだろう。

そんなことをずっと考えていた。

気掛かりなのは亀くらいだ。

今もグラブパイを食っている。

亀はいい。

温かく、穏やかで、ただ穏やかで、ゆっくりと。

誰も気にせず、自分だけで喜んで、愛し、愛されたりも、する。

もういちど外を見る。

やはり、雪が降っている。

ずっと、ずっと。

私は雪が嫌いだ。

冷たくて、真っ白で、ただ真っ白で、淡々と。

誰にも必要とされず、喜ぶのは子供くらいで、疎まれ、危険視されたりも、する。

私は自分と違うものが好きだ。

大抵それは良いものだ。

私は自分と同じものが嫌いだ。

大抵それは良くないんだ。

何かを好きになる度に、自分が嫌いになってゆく。

そんな気が、する。

今日こそは決しよう。

今日こそは、彼女の思いを知ろう。

今日こそは、だ。

決するために外へ出よう。

い
忌むべき雪に包まれて行こう。

今日は、まるであの日のようだ。

あの、忌むべき日のようだ。

濡れた彼女の横顔は、さながら蒼いユキツバキ

枯れた私の横顔は、さながら紅いシクラメン

美しいのが好きだった。彼女もそうだった。

醜いのが嫌いだった。今もそうだ。

雪に降られた道を往く。

カラスが啼いている。

ざくざくざく。

かアかアかア。

耳障りだ。

開けた道から森へ^い入る。

薄暗く、深い。

このまま歩くも良いだろう。

帰るも良いだろう。

目先の枝が肥えていた。

はやにえだった。

刺さっているのはモズだった。

刺したのもモズだろう。

刺されたのは幸せそうだ。

ああ、刺したのは哀れだ。

私の最も憎むのは、静かに独りで終わること。

私の最も愛すのは、可憐な誰かと生きること。

彼女は醜くなった。ああ、私も。

雪が降り続いてゆく。

ぱらぱら、ぱらぱら。

かい
悔が降り積もってゆく。

たらたら、たらたら。

遠くの方に彼女が見えた。

ゆらゆら揺れて、風にな凪いで、消えた。

もっと森の奥へ往こう。

ずんずん、ずんずん。

もう少しだ。

カラスの聲が大になる。

かアかア、かアかア。

けんごう
喧囂だ。

木立の上にそれはいた。

その下にも、いた。

上のは啼いていた。

ただ、声が響いた。

下のは動かなかった。

ただ、雪が積もった。

ああ、悲哀の唄が聴こえる。

かアかア、かアかア。

うた うた
同じ詩を唄ったんだ、私も。

ああ、虚ろな目が見ている。

じろじろ、じろじろ。

同じ目をしていたんだ、彼女も。

もうすぐ、あの日の池に着く。

記憶が明滅する。

もうすぐ、彼女の元へ行ける。

鼓動が膠着する。

遠くで開けているのが見えた。

どくり、踊った。

薄光の中に彼女を認めた。

こちらを見ながら、白に溶けて、消えた。

漸く、深い森を抜けた。

漸く、あの日の池に着いた。

結局、私はここで終わるんだね。

意味もなく、呟いた。

池畔はただただ真っ白だ。

遠山も、ただただ雪に降られている。

池の淵に寄り覗き込む。私の顔が見える。

彼女の側に来て尻込む。私の顔が消える。

彼女は待っているのだろうか？

彼女は恨んでいるのかしら？

もう、詩も唄えないじゃないか。

いや、もう、いいんだ。

取り繕うことも無いんだ。

そう、もう、いいんだ。

詩で繕わなくていいんだ。

遠くにぼんやり蓮華が見えた。

季節外れの蓮華が見えた。

大変綺麗な華でした。

彼女の笑顔に似てました。

あれを、彼女に贈りたい。

私の気持ちを知ってほしい。

あれを、彼女に贈りたい。

私の愛を見てほしい。

あれを、彼女に贈りたい。

あれを、あの華を……

ぽしゃん。

私は、ゆっくり降りていった。

まるで、雪が降るみたいに。

私は、しっかり握っていた。

あの、可憐な白蓮華を。

遠くの方が明るくて、私はずっと眺めている。

何があるのかわからなくて、私はずっと眺めている。

ふいに、光が揺れて何か出てきた。

それは、可憐な彼女に見えた。

私は光に包まれて、

私は彼女に包まれて、

私は全てを理解して、消えた。

ああ、うん、久しぶり。

.....

どうしても、君に伝えたくて。

.....

いや、いいんだ。そんなことはどうだって。

.....

いいさ、向こうに残っているものなんてないんだ。

.....

それと、ずっと君に謝りたかったんだ。

どうしても、謝らないといけなかった。

.....

本当にごめん。

君には辛い思いを沢山させてしまった。

君が傷ついている時、優しい言葉もかけてやれなかった。

.....

そうか、ありがとう。

でも、これからはちゃんと伝えるから。

.....

ああ、あと、手土産があるんだ。

綺麗だろう、君の笑顔に似てるんだ。

.....

そんなことないさ、似てるよ。

.....

うん、これを君に。

この蓮華を、蓮華の愛を、貴女に。

男は眠りにつきました。

綺麗な寝顔でありました。

全ては夢の中でした。

蓮華も彼女も光さえ。

真白の夢の中でした。

それでも男は幸福です。

そんな寝顔でありました。

通常作品集

『不審者に注意』

杉原太蔵

赤いゴシック体と交番の電話番号が街灯に照らされている。

涼成は同じ番号が表示された携帯を見つめたまま、発信ボタンを押せずにいた。

もしかしたら正当防衛で無罪になるかもしれない。

でも、もしそうならなかったら？

両親は職を失う。弟妹は学校に行けなくなる。

思考が同じところをぐるぐると回る。

足元にはとても目を向けられない。しかし、目を逸らしていても鉄臭い臭いから逃れられる訳ではなかった。むしろ目を逸らしているために涼成の想像がかきたてられている。

今逃げてもどうせ捕まる。

でも。

その時、不意に涼成の視界が明るくなった。

「……！」

顔を上げると、見覚えのある白いワゴン車がこちらに向かってきている。

「あ、」

見られた。間違いない。

体が一気に冷えていくのを感じる。車は涼成の目の前で止まり、ドアがガチャリと開いた。

「涼成、ここにいたのか。どうした」

「さ、通広先輩、なんでここに」

「通りかかったただけだが、ん」

涼成のところにつかつかと歩み寄った通広は涼成の足元にあるモノに蹴躓き、その時初めてその存在に気付いたらしく下を見る。しかし、彼は叫ぶでも騒ぐでもなく、ただ眉をひそめて「また模倣犯か」と吐き捨てるように言った。

「もほう、はん？」

通広はポスターを顎でしゃくる。

「最近ニュースでやるだろう、やれ人が消えただのやれ血痕がだの。それに乗っかろうとした輩だろう。」

「あ、いや、先輩、俺は、」

「お前じゃない。こいつがだよ。」

まあ、返り討ちに遭っちゃあとんだ笑い物だが」

そう言うと、「お前は脚のほうを持って」と言っておもむろに男の脇を抱えあげた。

「...えっ？」

「埋めるぞ。こいつを後ろに乗せる」

「自首は、」

「お前が捕まるがいいのか？きょうだいがいると聞いていたが」

「.....」

涼成が無言で脚を抱え上げると、通広は後部座席のドアを開けた。

車が山道を登ってゆく。と、いうのはガタガタという音と振動を感じる涼成の想像に過ぎない。通広は人通りの少なくなった辺りで車のライトを切って運転していた。申し訳程度に街灯が点いているものの、彼の表情を窺い知ることはできない。

「ここだ」

通広が車を止めた。

言われるがままに車を降りると、目の前に山小屋らしき建物があつた。自販機の光が目痛い。

「足元に気をつけろ」

死体は車から引きずり出され、土の上に横たえられている。涼成自身も先ほどから少し時間がたって落ち着いてきたのか、脂肪のついた脚の柔らかさを感じる。それが言いようもなく気持ち悪かった。

歪んだ表情の顔がこちらを向く。涼成は耐えられずに目を逸らしたが、通広は涼しい顔をしていた。

引かれるままに歩いていくと、自販機の光が爪の先ほどの大きさになった辺りで立ち止まった。

「落ちるなよ」

足元に深い穴がある。かなり最近できたものらしく、黴のような土臭い臭いがした。

ドサリと鈍い音がして死体が落ちる。

「...どうして、」

「なんだ？」

「俺なんかのためにこんな...ヒッ！」

涼成は凍りついた。

穴の中の男が、動いている。

小さなうめき声をあげ、右手で胸のナイフを掴んで左手をばたつかせている。

やがて男は身を起こし、涼成の足首を掴もうとして—

「触るな」

湿った音と共に穴に崩れ落ちた。

いつの間にか涼成の隣にいた通広がスコップを降り下ろしたのだ。

二度三度と通広はスコップを降り下ろすと、「あとは頼む」と涼成にスコップを手渡した。

涼成が穴の中を見ないようにしながらそれを埋めている間、通広が何をしていたのかは分からない。

「今夜は泊まっていけ」

帰りの車の中で通広がぼつりと言った。

「え、でも、先輩って部屋狭いって、」

「お前は自宅通いと聞いたが。その格好じゃ帰れないだろう」

涼成は自分の服を見た。泥やら枯草やらが裾や袖のあちこちにこびりついている。確かにこんな格好で家に帰ったら家族に質問攻めにされるだろう。

「あ...はい。お言葉に甘え、て」

「ならいい」

通広は満足げに言うと車のヘッドライトを点けた。

町の明かりが近づいてくる。

—今日はいい掘り出し物を見つけた。

通広は微笑した。隣の涼成がその表情を察するには車内は暗すぎ、外は明るすぎる。

当初の予定ではあの穴に埋められるのは彼であったのだ。人があの穴に連れてこられ、死を前にした時の怯えた表情を通広は愛していた。それが想定外の事態で中止されたわけだが、通広は満足していた。

—一人は死を前にしなくともあんな表情ができるものなのか。

右耳に挿したイヤホンからは死体を埋めている涼成の嗚咽が流れている。先ほどの様子はよく録音できていた。

「...どうして、」

「なんだ？」

「俺なんかのためにこんな...ヒッ！」

あ、音声が一周した。

あとかき

BLGLNLをひとつずつ書いてご挨拶に代えたかったのですが、GLを落とした上にNLが変質しました。自分の計画性の無さを痛感した次第です。

それは再会の感動ではなく

杉原太蔵

背筋を伸ばして、できるだけ音を立てないように、頭は上下させない。それでも渡り廊下の床板はきしりとかすかな音を立ててしまい、視線の高さは歩行にあわせて僅かに変化する。

それでは駄目だ。

「父上」

父の叱咤が聞こえた気がして、頓五郎はびくりと足を止め、辺りを見回した。父の姿はない。考え込んだが、部屋で自分を待っていることを思い出す。よく考えてみれば当然のことだった。

これでは駄目だ。

今度は自分で自分に戒める。父の求める水準には全然届いていない。自分はこの家の、あの父のたった1人の子供なのだから。この家を継ぐのだから、父がそうであるように全てを完璧にこなせなくてはならない。数多の戦功を上げる武将として、世に名高い優れた歌人として、そのほかにもたくさん――

向こうから歩いてくる足音に立ち止まり、挨拶をする。

「中院様。お早う御座います」

「.....おう、坊か」

彼は元々、京の都に住む公家であつたらしい。訳あって朝廷を追われた彼を父がこの屋敷に招いたのだと聞いたことがある。普段は頓五郎が話しかけても返事が返ってくることはなく、これまで会話が成立することはなかった。公家とはそういうものなのだとな頓五郎は理解していたのだが、しかし今日はこちらに視線を向けて珍しく返事をした。それどころか、わざわざ足を止めて頓五郎の視線に合わせて屈みこんでくる。なぜか眉をひそめていた。

「師匠...お前の父上に呼ばれたのか」

「はい。中院様もなのですか？」

そうではないのだが、と彼は口ごもった。

「客、が来ていたからな。ちょうど同じ年くらいの小さい子供を連れてくるようだった」

「それは存じ上げませんでした。有り難う御座います」

頓五郎が立ち去る間際、中院は何か言いたそうな顔をしていたが、結局何も言わないまま目を伏せ、背を向けて足早にそこを離れた。

「貴方が頓五郎？」

渡り廊下の終わり近くで、見知らぬ女性に声を掛けられた。彼女が客人なのだろうか。それにしても、今日はよく人と話す日だ。

「ええ。お初にお目にかかります」

そう言って一礼すると、女性は「ずいぶんとお利口な子ね」と微笑む。

「父上に教えていただきました」

「そう。与一郎とも仲よくしてあげてね。あの子は気が短いところがあるから心配で。この前も自分より大きい子と喧嘩して大変だったんだから」

「そう、ですか。分かりました。宜しく願います。」

聞いたことのない名前に疑問を覚えながらも返事をすると、女性は満足げに使用人達のいる離れの方向へと立ち去っていった。

敷居を踏まぬよう注意しながら部屋に入ると、両親がいつもの場所に座っている。しかし、家族で集まる時に頓五郎がいつも座っている場所には見知らぬ少年が座っていた。背丈も体格も自分と同じくらい。険のある目付きで、警戒しているかのように頓五郎をじっと見つめている。

「頓五郎、座りなさい」

「あの、父上」

「座りなさい」

言われるがままに座ると、父はにこやかに言った。

「与一郎、紹介しよう。頓五郎だ。」

君の実の弟だよ」

頓五郎の父は嘘をつくような人間ではない。

「ちち、うえ……？それは、どのような、」

言葉が上手く出てこない。これでは駄目だ。でも、どうやって直したらいいのか思い出せない。

自分は父の唯一の子供だと、そう教えられて育ってきた。

そう教えられてきて、期待されてきたからそれに応えようとしてきた。

「ああ。そういえば、頓五郎には言っていなかったね。彼は与一郎だ。頓五郎が生まれる前、私達が逆賊から將軍を救い出す時に京に置いてきてしまったのだけれど、今日戻ってきたんだ」

母までもが嬉しそうに言う。

「ええ。私も与一郎はもういないものだと思って生きていたのだけれど、乳母があの戦の中から助け出してくれていたの。」

「おまえ、いくつだ？」

頓五郎の居場所を占領していた少年があからさまに顔をしかめて頓五郎に顔を向ける。

「今年で、六になりましたが、」

「おれは七つ」

無愛想に言い捨てると、少年は父を睨み付けた。その唇がかすかに動く。

「……このクソおやじが」

「与一郎」

父がたしなめるように名前を呼ぶ。

不意に瞼が熱くなった。駄目だと思った時にはもう遅い。涙が流れる。母が心配そうにこちらを覗きこむ。しゃくり上げる。母を、他のひとを心配させてはいけない。それは分かっているのに、止まらない。なぜ自分がこうなっているのかわからないから止まらない。

口の中に塩味が広がる。駄目だと言う声さえもう聞こえない。その理由も分からない。

それでも、それが悲しみの涙でないことだけは理解できた。

あとかき

半分くらいは来年の大河ドラマにギリギリあるかもしれないシーン。説明がとても長くなりそうだったのでカットしましたが、逆に説明不足になったのは否めません。そのあたりのバランスの取り方をご指導いただけると幸いです。

アレルギー

田代 霞

郊外の廃れた住宅地にある、一軒の小さな家。彼はもう十年ちかく、たったひとりでここに住んでいた。

その理由は、彼の持病のアレルギーにある。しかし、アレルギーといっても食品や化学物質に対するものではない。彼のアレルギーは、人が抱く憎悪や不快などといった負の感情に対するものだった。

最初に症状が出たのは、彼が小学生のころだ。もともと体の弱かった彼はある日、急に体調を崩して病院に運ばれ、生死の境をさまよった。一命をとりとめたものの、彼にはアレルギーがみつかった。彼はもともと人の感情に敏感だったが、精神の発達にしたがってそれが強くなっていき、人のマイナスの感情、つまり悪意のようなものに触れたとき、体に異常をきたすほどのストレスを生むのではないか。そして悪意が大きいほどストレスも強くなり、呼吸困難などを起こして、最悪の場合死に至る。医者から彼の両親へされた説明は、こんなものだった。薬や治療法はない。なにしろ前例がまったくないのだ。できることといえば、原因となる悪意をなるべく遠ざけるくらいだった。

両親は郊外に家を買って、そこに彼を住ませた。資産家であったため、息子の食事や衣類など惜しげもなく与え、勉強は良質な本やビデオ教材などでさせた。ただ、その家を訪ねることだけは、めったになかった。それは自分たちが知らず知らずのうちに抱く負の感情から彼を守るためだったのかもしれないし、あるいは、人の悪意にすぐ気づいてしまう彼が、怖かったのかもしれない。

最初のうちは家族や他人と関わろうとしていた彼自身も、周囲の感情や自分の病状を悟ると、半ば諦めたようになっていた。彼はそのときから、人の悪意も、愛も知らずに生きてきたのである。

友人もおらず、訪ねてくる者といえば、週に一度、食料や本を持ってくる配達業者の人間くらいだった。その配達員も、こんなところにずっと一人で暮らす彼を変わり者だと思ってか、玄関

先に荷物を置いてチャイムを鳴らすと、すぐに帰ってしまう。彼の顔を見る人はいなかったし、彼も配達員の顔など見る気はなかった。

ある日の事だ。彼はベッドから起き上がり、カレンダーの今日の日付に赤い線を引いた。こうしていないと、日にちも曜日もわからなくなるのだ。今日は金曜日。配達員が来る日だった。

しばらくして、チャイムが鳴った。彼は読みかけの本を置いて、玄関の扉を開けた。

彼は仰天した。いつもは荷物が置いてあるだけの場所に、人が立っていたのだから。初めて見る配達業者の制服は、濃い青色だった。そして、配達員は三十歳くらいの女性だった。彼女はにっこりと微笑み、彼に言った。

「こんにちは。ヤマモト配送サービスです。お届け物をお持ちしました」

彼は我に返り、うつむいたまま荷物を受け取って、逃げるように家へ入った。ドアを閉める前に、配達員が深くお辞儀をするのが見えた。

人と顔を合わせたのは、何年ぶりだろうか。再び本を読み始めてからも、彼はそのことばかり考えていた。

あの配達員は、今日からここの担当になったのだろう。しかし、異動なんて今までにもあったはずだ。誰も彼と顔を合せなかったのは、会社の者から彼のことを聞いていたからかもしれない。あの配達員だって彼のことは聞いていただろうに、どうして玄関にいたのか。その日はなかなか、眠ることができなかった。

次の週も、彼女は配達にきた。ドアの前に立ち、彼が出ると微笑んで挨拶をした。彼のほうも、先週と同じくすぐ中に入り、その後は彼女の行動に首をひねった。

こんなことが数回続いたある日、彼は彼女に、挨拶を返してみた。たった一言だったが、久しぶりに交わす言葉だ。少しかすれたその声に、彼女はいつものように微笑んだ。人との関わりを断っていた彼がなぜこんなことをしたのか、それは彼自身にもわからない。しかし、彼女に悪意がないことは、彼の体に異常のないことが証明していた。

彼女はしだいに、挨拶だけではなく世間話などもするようになった。ここに来るまでの道で野良猫を見かけたとか、甥っ子が七五三のお宮参りをしたとか、他愛もない話だ。しかし、長いこ

と外に出ていない彼にとっては、どれも鮮やかに聞こえた。

彼は短く相槌を打つだけだったが、彼女が微笑みとともに紡ぐ言葉は、彼にまだ元気だった幼い頃を思い出させた。そしてその中に、噂話や悪口はひとつもなかった。

彼はいつの間にか、金曜日を待ち遠しく思うようになっていた。

季節は移り、夏が近づき始めた、金曜日。彼女は今日も配達にやってきて話をし、彼はそれを聞いていた。最近の気候について話し始めたとき、彼女は思い出したように言った。

「そうそう、この近くに、公園があるでしょう？ 来るときに前を通ったんですけど、ツツジがきれいに咲いていますね。明日、見にいってみようかしら。……あなたも、たまには散歩でもしてみたらどうですか。ここからなら、ちょうど良い距離ですよ」

彼女はいつものように微笑んで、お辞儀をした。彼はその姿を見つめながら、さっき言われた言葉を反芻していた。

次の日。彼はベッドから起き上がり、カレンダーに目をやった。今日は土曜日。いつもなら家で本を読んで過ごすのだが、この日は違った。クローゼットを開け、埃を被ったよそ行きの服を取り出す。デザインは少し古いだろうが、部屋着よりはましだ。下駄箱の革靴も埃を払って、足を入れた。今日は数年ぶりに、外に出るのだ。行先は決まっている。ツツジの咲く公園だ。

公園には、家族連れや恋人たちなど、多くの人がいた。しかし彼は、ためらわず進んでいく。悪意を持った人間は少なそうだし、いても問題はないと思っていた。他人の悪意に触れても、症状が出ることはないだろう。確証はない。だが彼女のことを考えると、そんな気持ちになってくるのだ。彼女が教えてくれた愛が、治療法のない病気を治してしまったようだった。他人の悪意を避ける必要は、もうないのだ。

彼はツツジを見るのもそこそこに、彼女の姿を探した。会える気がしていた。そしてついに、彼はあの笑顔を見つけた。純粹で美しい。いつも自分に向けてくれた、悪意のない、愛にあふれた笑顔だ。

ひとつだけ、いつもと違うところがあった。その笑顔は、彼に向けられたものではなかった

のだ。彼女の視線の先にいるのは、隣に立つ見慣れない男。二人は手をつなぎ、楽しそうに話していた。

その瞬間、彼は全てを理解した。しかし、悲しむ間も無いうちに、彼の体に変化が現れた。心臓が締め付けられるように痛い。息が上手くできず、めまいもしてきた。アレルギーの症状だ。すぐにここを出て、原因となる悪意から離れなければならない。だが、周りには悪意をもっている人は見当たらなかった。その間にも、症状はどんどん悪化していく。立っていることもできなくなり、彼はその場にばったりと倒れた。

救急車が着くころには、彼はもう事切れていた。アレルギーによるものであることは、すぐに判明した。あまりに強い負の感情に触れたことで、彼の体はショックを起こしたのだ。

しかし、アレルギーの原因が、彼自身が抱いた嫉妬と憎悪であったことは、医者にも、看護師にも、そして彼自身にも、わからないままだった。

順路

笠原ざわ

平日の昼間から美術館に行く、と言うとまるで芸術鑑賞が趣味みたいに聞こえるけどそんな崇高な趣味なんて私にはない。たまたま午後の授業が休講になったから。大学からバス一本で行けるから。静かな所へ行きたくなったから。そんな些細な理由が積み重なった結果、美術館の入口前に一人突っ立っているだけのことだ。

正直、図書館に行くノリでここまで来てしまった事を少し後悔してはいる。でも何もしないで帰るのはもったいないし、なんて考えながらロビーへ入った途端、正面に展示されていた大きな絵に目が釘付けになる。大人が四人寝転がれそうなくらい大きなキャンバスいっぱい外国の寺院が描かれていた。

その静かな佇まいに圧倒される。まるで時間が止まったみたい。それでいて絵の奥から風が吹いてきそうな雰囲気がある。とても、すごい。

いらっしやいませ、と女性に声をかけられるまで私はその絵から目が離せなかった。

受付の彼女によると、ロビーに展示されていた絵は鳴海正吉という画家の作品なのだから。そしてちょうど今特別展示で彼の作品展をやっているのだと。

今なら人も少ないですのでゆっくり見れますよ。

あっけらかんと言う彼女はかなり暇してたみたいで色々語りたそうな顔をしている。

捕まったら長くなるやつだ、これ。

珍しく仕事した勘に従い、私はパンフレットを受け取って軽く会釈するなり早足で展示室へと向かった。

最初の展示室は結構小さめの部屋で、展示されている作品も一つだけだ。受付の女性が言っていた通り人の姿は全然無く先客は二人しか見えない。額縁の真ん前にはスーツ姿の青年が一人、厳しい顔で絵を見ている。その少し後方では品のある服をきっちり着こなした、老紳士っぽい雰囲気男性が青年を見守るように立っている。

彼ら二人しかいない室内はすごく静かだ。入口で感じた緊張が帰って来る。真面目に鑑賞しているらしき彼らに近付いていいのか迷っているとふと老紳士がこちらを向く。彼は目元のしわを深め手招きをした。

その仕草に親しみを感じて、どことなく実家の祖父を思い出して自然と肩の力が抜ける。パンフレットを適当にカバンに入れ、誘われるままに老紳士の隣に並ぶ。彼はそっと右手の人差し指を口元に立ててから流れるように絵を指し示した。

誘導のままに絵を眺める。展示されているのは滝と虹が描かれたキレイな絵だ。どこかに実在しそう。そう感じるほどにリアルな作品。でもそれだけだ。ロビーで見た絵とは違い、ただ風景を描いただけって感じがする。

だいぶ失礼な感想だよなあと口には出さずに思っているうちに少し人が増えていたみたいで、気付けば青年の周りに中高年の男性が五、六人立っていた。

ただの見物客にしては彼らの雰囲気は何故か重苦しい。誰も彼も眉間にしわを寄せ、見定めるように作品を眺めている。

技術はあるがそれだけだ。

誰か一人が呟いた。それを皮切りに彼らは口々に意見を述べ始める。

意図が全く伝わってこない。若気の至りだろう。自己満足としか思えないな。

呆れや失望がにじんだ言葉が重なるにつれて青年が項垂れていくのが後ろからはよく見えた。

うるさい。そんな事分かってる。

耐え切れなくなったのか青年がぼつりと呟く。その背中はずっきまでと比べて小さく頼りないも

のに見える。

ああきっと彼がこの絵の作者なのだ。

悔しそうに肩を震わせている姿を見て、根拠はないけどそう思った。

大人達の指摘は延々と続く。私はそっと耳を塞ぐ。否定的な言葉は苦手だ。聞いているだけでも胸が痛くなる。

彼は未熟さを自覚してる。だからこそ悔しいんだろうな。そう考えると未だうつむいている彼の気持ちが少しだけ分かる気がした。

自然と下がっていく視線が完全に青年の足元まで落ちた頃、ようやく大人達は順路に沿って進み出した。

反発するように青年は逆方向へ駆けていき絵の前に私と老紳士だけが取り残される。耳元から手を離し、そろそろと視線を上げる。小さく息を吐いてから隣に立つ老紳士を見やれば彼は真っ直ぐ絵を見つめていた。

そのまなざしは意外にも優しく、それでいてどこか羨望を含んでいるような。単に他人の作品を見ているだけには思えない。

親子なのかな。横顔もちよっと似ているし。

視線に気付いたのか老紳士はこちらに顔を向ける。じろじろ見ていたのを注意されるかと思っただけ彼は気恥ずかしそうに目を泳がせただけで、そのまま順路の方へと歩を進めた。

老紳士の後を追って案内表示の指示通りに次の部屋へと向かう。どうやらこの作品展は小展示室がいくつも連なっている構造になっているようだ。矢印の先、さっきと同じく小さな展示室の中に足を踏み入れる。

先にこの部屋へ向かったはずの大人達はいない。その代わりに真逆の方向へ駆けていったはずの青年が絵の前で座り込んでいた。

何で彼がここに？

どこか疲れているような印象を受ける彼の背中を眺めながら不思議に思う。けどそのまま入口で突っ立っている訳にもいかなくて、室内に展示されている唯一の作品——ブラウスを着ている女性の胸元から上が描かれた油絵に近づく。

その正面、絵の中の彼女と向き合うように座っている彼との距離も自然と縮まる。縮まった、だから彼の表情もよく見えてしまった。

絵を見上げた状態で彼は静かに涙を流していた。

見えてしまった彼の表情はむなしいような悲しいような。そのままの姿勢で彼は何か名前のような単語を口にする。まるで絵の中の彼女に向かって呼びかけているみたい。

その光景がどことなく神聖なものに感じて、これ以上見てはいけない気がして。逃げるように絵の脇に設けられているプレートへと視線を移した。

『眠り』と題されたこの絵は死別した妹を描いたのだとプレートに書かれた説明文は語る。彼女は二十三歳のとある朝、眠るように息を引き取ったらしい。

なるほどと無理やり気持ちを落ち着けてから改めて作品に目を向ける。女性は真っ白なブラウスに身を包み、金の額縁の中で死んだように眠っている。いや本当は逆だ。白菊の花に囲まれて彼女は永遠の眠りにについている。

それでも、今にも瞼を開けて微笑むのではないか。胸元が微かに上下するのではないか。そう錯覚させるほどにこの作品は美しく、そして恐ろしかった。

青年は今も声も出さずに泣き続けている。微動だにしない彼の元へ老紳士が静かに近寄る。そしてわずかに腰をかがめて慈しむように彼の頭を優しく撫でた。

二人の様子を少し離れた所で眺めていると目の前がにじんでいく。悲しい訳じゃない。ただ胸の奥が握られたように痛い、それだけだ。

老紳士の手動きに合わせて青年は徐々にうつむいていく。抱え込んだ膝に目元を押し付けた彼からそっと手を離すと老紳士はこちらを振り返る。その頃には私の視界はかなりぐちゃぐちゃになっていて、あふれた涙は次々と頬を伝っていた。

老紳士はポケットからハンカチをぎこちなく取り出す。それで涙を拭うとさっきまで青年にして

いたのと同じように頭を撫でてくる。孫扱いされているみたいだ。でも不思議と嫌悪感は無くて、素直に撫でてもらう。

少しして涙が止まったのを確かめ、彼は手を止める。そしてまたゆったりと順路の方へ歩き出した。

部屋が変わると作風もがらりと変わり、そのたびに違った感情が湧き上がる。自分でもコントロールできない感情に振り回されてすぐに足が止まる。老紳士はそんな私を見守るように、ちゃんとついてきているのを確かめながら進んでいた。

不思議な事に、作品の前には必ずと言っていいほど例の青年がいた。部屋が進むにつれて彼が歳を重ねていると気付いたのは何部屋目だったか。それでも彼が例の青年だって気付けるのが不思議だった。

還暦を迎えるくらいの年代になった例の青年の背を見届け次の展示室へ入る。入って、すぐに足を止めた。

室内の照明はほとんど落とされ、絵だけが浮かび上がったように照らされている。ここが最後の部屋だ。そう思わせるような、どこか寂しい雰囲気がした。

絵の前に例の青年はいない。それどころか室内には私達以外誰もいない。その静けさが微妙に気持ち悪くて進むのを躊躇っていると横に並んでいた老紳士がたどたどしい足取りで絵に歩み寄り、その正面で立ち止まった。

追いかけても隣に並んでも彼は一切反応せず、絵を鋭い目つきで見つめている。今までの彼とは違う素っ気ない態度にどこか違和感を抱きながらも、彼に倣って絵に視線を向けた。

その絵には額縁もプレートも何も無かった。キャンバスの上半分は気持ちいいほどの水色に塗り潰され、下半分には若葉色や枯草色とか様々な緑色が広がっている。その真ん中、丘みみたいに小高くなっている所に白い服を着た誰かが背を向けて立っている。

爽やかな感じがする絵だ。でもさっきまでの部屋で見た作品と比べると、この絵はまだ完成していないような気がした。

未完成感に首をかしげていると老紳士が更に足を進める。左半身をかばうような動きはぎこちない。それでも一步一步地面を踏みしめ確かめるような歩みで彼は絵の真ん前に立つ。そして躊躇いなく右手を伸ばしキャンバスに触れた。

作品に触るなんて。彼の突然の行動に思わず体が強ばる。けれど予想していた乾いた音は聞こえない。それどころか。

ペとり。

彼の指が絵の具を拭い取り布地から離れる瞬間の、みずみずしい音が私の耳にまで届く。声をかける隙もなく彼はその指で壁に触れた。

薄暗い展示室の中、白く照らされた壁に鮮やかな緑色が付着する。それが当然だと言わんばかりに彼は慣れた様子で指を滑らせ何かを書いていく。三十秒ほどで手を止めると彼は壁から数歩離れた。

b y e

壁に現れたその三文字を理解すると同時に何故か胸の奥がざわつく。言いようもない不安が全身を包む。なのに彼は満ち足りたと言わんばかりの顔だ。

さっき抱いた違和感の正体は何なのか唐突に理解する。この展示室に入ってから、彼は一切私を見ていないんだ。

わざと、じゃなさそう。彼はそんな人じゃないと思う。なら本当に見えてない？ そう考えただけで寒気が背中を伝う。両足が氷漬けにされたみたいに動かない。視界の端で老紳士が動き出す。左足を引きずるように順路の先へ進む彼を私は見送る事しか出来なかった。

彼の姿が出口へ消え、急に膝から力が抜ける。やっと動いた足を急かしロビーに出たけどあの老紳士は影も姿も見当たらなかった。

呆然と作品展の入口を眺めていると受付の女性がいそいそとこちらへやって来る。

もう一周しますか？

まだ混乱していたのもあって、私は素直に彼女の提案に頷いていた。

カバンに入れっぱなしだったパンフレットを取り出して再入場する。さっきまでとは違い室内にはちらほらと人がいるけどその中にあの青年と老紳士はいない。最後の部屋の絵はちゃんと完成していて、真っ白な壁のどこにもbyeの三文字は見当たらなかった。

美術館を出る頃には日が傾いていた。帰り道、バスに揺られながらカバンを探る。適当に放り込んだままだった携帯端末を取り出し検索サイトを開く。検索欄に鳴海正吉と入力すると、検索候補の一つに入院の文字が出て来た。

吸い寄せられるようにその二文字を付け足して検索してみた結果、表示されたのは彼がつい二、三日前に脳出血で倒れたという記事。淡々とした文面とそのそばに表示された写真が目に入った瞬間、端末を操作する手が止まる。そこには今日一緒に絵を見ていたはずの老紳士が写っていた。

端末をスリープモードに切り替えてカバンに戻す。今の記事でどっと疲れが増した気がする。まるで狐につままれた気分だ。私は白昼夢でも見ていたのかな。

背もたれに思いっきり体重を預けた姿勢で窓の外を見る。遠くに見える夕日はいつもと何も変わらない。そうだ、今日はただの平日だ。明日も授業がある。いつもならそう考えるだけで気だるくなるのに今感じているのは何故か心地いい疲れで。不思議と今日はよく眠れるような予感があった。

まどろみながら思う。
今日見たのが彼の人生だとしたら、どうかあの無言の旅路が彼の走馬灯になりませんように。

スクリュードライバー

如月深琴

彼女と初めて会ったのは三ヶ月ほど前の事だった。この店の常連だった男(今はもう違う)が「この店のことを彼女に話したら、ぜひ来たいと言っていた」と言って連れてきたことが始まりだった。

常連客が女性を連れてくることは珍しいことではない。店内の雰囲気を考えれば、女性が此処に来たがるのは寧ろ必然だとも思う。全体をダークブラウンなどのシックな色でまとめ、それだけでは暗い雰囲気になってしまうため、観葉植物とキャンドルライトを置いている。カウンター周りは明るくなりすぎ無い程度の照明を設置してあり、我ながらお洒落な店だと思う。だが店の場所は入り組んだ路地の中であり、女性たちはわざわざ危険な路地には入らないために、この店の客の多くは男性であった。

そうしてやってきた、男の同僚だという女性は、とても素敵な人だった。開店時間が20時頃であることもあり、この店にやってくる多くの客は仕事の疲れを滲ませているのだが、彼女にはそれが一切見当たらない。疲れていない訳ではないだろう。男曰く、彼女はキャリアウーマンで、他の人の倍以上の仕事をこなしているらしい。だと言うのに、その疲れを塵ほども表に出していない。彼女より仕事が少ないはずの男の方が疲れていそうなくらいだった。それなのに彼女は、男を労るのだ。謙虚な方だ。男と同じだけとは言わないが、もう少し我を出してもいいと思う。

「マスターごめんなさいね。この人お酒に弱いのに、無理に強いカクテルばかりを頼んでしまうから、マスターも困ったでしょう？」

男が来店してすぐに頼んできたのは、度数の高いブラック・ルシアンというカクテルだった。アルコールに耐性があり、自分の限界を把握している人ならば、酔いはすれども、完全に潰れることは無いはずだが、男は酔いつぶれてしまった。普段は自制して飲む男なのに、彼女の前で格好つけたかったのだろうか。

「普段はこんなこと無いので驚きはしましたが、迷惑ではありませんから安心してください。」

私よりも貴女のほうがお疲れでしょう？」

私は男が望むカクテルを作っただけで、それはただの仕事である。正直に言うと、男が酔いつぶれたとしても、余程の重大事件を起こさない限りは私にはどうでもいい。

「どうぞ召し上がってください」

「え、あの、私頼んでないです」

「サービスですよ。彼から貴女の話聞いていたのですが、ずっとこのカクテルを捧げたいと思ってまして。エル・ディアブロと言うのですが、ご存知ですか？」

「お恥ずかしながらお酒には疎くて……いえ、お酒だけではないですね、嗜好品全般に疎いんです。昔からずっと勉強とか仕事に没頭してしまっていて……どんなカクテルなんですか？」

「そうですね……ジンジャーエールが入っているので口当たりは少し刺激的です。レモンリキュールとカシスリキュールによる酸味がジンジャーエールとの相性抜群で、全体としてはとても爽やかな味ですね。色がまるで血の色のようにだということで悪魔を意味するディアブロが名前にあるのですよ」

悪魔という言葉を見た彼女は少し驚いたのか目を見開いていた。けれどそれも一瞬のことで、すぐに穏やかな表情に戻ってしまった。

「少し怖いお酒なんですね。でも、どうしてこれを私に？」

もしかして、悪魔みたいな女だと思われていたのでしょうか、なんて苦笑いする彼女は悪魔とは程遠い。

「ああいえ、そういう訳ではありません。カクテル言葉というものを知っていますか？花言葉と似たもので、カクテルにもあるんですよ」

「あ、つまりそのカクテル言葉が、私に伝えたい内容ってことですか？」

「そういうことです。……お渡ししてから聞くのもおかしいのですが、炭酸など苦手ではありませんか？」

本来ならばカクテルを作る前に確認しなければならないことを聞かずにいたことに気づき、慌てて尋ねる。女性客には炭酸が苦手だという方が多く、あまり多くないこの店の女性客には必ず苦手なものを聞いていたというのに、この失態。

「大丈夫です。好き嫌いが少ないのが私の数救い取り柄なんですよ。……うん、美味しい。このカクテルの意味はなんなんですか？」

「……苦手でないなら、良かったです。そのカクテルの意味は、気を付けて、です」

他人の何倍もの仕事をこなし、他人のことを日常的に気遣っているという彼女のことを聞いた時、倒れてしまいそうだと思った。体調管理が出来ないような人間だとは思っていなかったし、それは実際に会ってみても変わらない。けれど。

「きちんと、ご自分のことも考えてくださいね」

そう言うと彼女は、雲のようにふわふわと、金平糖のように甘く笑った。

それからというもの、彼女は男よりも頻繁に店に訪れるようになった。

何回目かの来店の際には互いに簡単な自己紹介をし、彼女の名前を知ったその日から彼女は、少しずつ日々の愚痴を零すようになっていった。もちろん最初から深い話はしなかった。精々「今日はいつもより少し仕事が多くて疲れた」という程度のものだ。けれど日を追うごとに、少しずつ彼女の内側に近づいていると感じるような愚痴が増えていった。

「聞いてくださいよ川崎さん！ 亮ったら今日も用事があるって言って私を置いて帰っちゃったんです！」

「おや、またですか。どうしたんでしょうね彼も。以前なら余程のことがない限りは早乙女さんと一緒にいたがっていたのに」

彼女が初めてこの店に来てから二か月ほどが経った頃、もともと常連だった男はめっきり来なくなっていた。その代わりと言うべきか、男一亮的彼女である早乙女さんが常連となっている。彼奴のことを考えている時の彼女の目にはいつも宝石が詰まっていた、キラキラしていた。心の底から彼奴のことを想っていることが伝わる。

「……最近、亮に後輩が出来たんです。途中入社の子で、とても可愛くて、とても優秀な子……。亮、あの子のことでいっぱいいっぱいになってるんです」

浮気されたら嫌だなあと小さな声で呟く彼女は、目の中の宝石の輝きを鈍らせていた。

——ああ、私ならそんな顔をさせないのに。

彼女にとって私はただの行きつけの店のマスターであり、それ以上の存在になれることもない（少なくとも彼女が彼奴と別れるまではあり得ない）というのに、独占欲と嫉妬心だけはすくすくと育っていく。

彼女が今日飲んでいるのは、シャンディーガフだ。

——カランカラン

今日もいつも通りの日だった。少なくとも、来店を知らせるベルが鳴るその瞬間までは。

入り口のほうへ目をやると、そこにいたのは彼女だった。いつもと様子が違う。普段はどんなに疲れていても、落ち込んでいても、どこか穏やかな雰囲気や纏っていた彼女が、目に見えて憔悴している。数分が経っても入り口付近から動こうとしない彼女をカウンターの左端に座るよう勧める。淡い光しか当たらず、人目にもつかないその席はいつの日か彼女の特等席になっていた。幸いにも今日は客も少なく、というより現在は彼女以外の客がいないため、急遽臨時休業の立て札を出す。

席に座った彼女は泣き出してしまいそうなのをこらえているのか、唇を噛んでいた。

「何があったのか、聞いても……？」

「……亮に、別れようって、言われました」

「は？」

曰く、以前彼女が話していた後輩を好きになってしまったから別れようと告げられたと。曰く、後輩の方が甘え上手だから守ってあげたくなると言われたと。曰く、自分を信頼していない女

とはいたくないと言われたと。

怒りで目の前が赤くなったような気がした。あの男はこの人の何を見ていたというのだろうか。甘え上手ではないかもしれない。だが、彼女を守りたくならないのは、彼女の問題ではないだろう。信頼されていないと思っていたのなら、信頼されるに足る行動をとれば良かっただろう。なぜすべてを彼女に押し付ける。

「私、私なりに彼を愛していました。私、本当はすごく面倒くさい性格をしているから、彼は、面倒な女が嫌いだって言っていたから、どうにか嫌われないように、そうやってきたのに……」

前言撤回。彼女に非はなかった。あつたとしても数ミリ程度のものではあつたが、それすらない。こんなにも献身的に尽くしてくれていたのに、あの男は。次に会ったら必ず殴ろう。

「……早乙女さんは何も悪くありませんよ。今は、何も我慢せず、吐き出せるだけ吐き出しましょう。さあ、これを」

「ありがとう、ございます……これは……？」

彼女の前に置いたグラスには、青色のカクテルで、レモンが添えられている。ソーダのような色で、あっさりとした味わいだ。

「ブルーラグーンというカクテルです。さっぱりしてはいますが、度数がやや高いのでお気を付けください」

務めて冷静であるように装う。ほかの女性であればもう少し共感を表しつつ接することで話をしてくれるが、彼女はそうではない。相手が気負ってしまっているとわかると、その時点で話すことをやめてしまう。

「ありがとうございます。……いただきます」

それから10分ほど、彼女は何も話さず、静かにカクテルを飲みながら静かに涙を流していた。不謹慎であるとはわかっているが、声を出さずに泣く彼女は、今この瞬間、世界の中で最も美しい存在であるように思えて、目を離すことができない。

グラスのカクテルがほとんど空になるころ、ぽつりぽつりと彼女は話し始めた。

「……私、高校生のころまではコミュ障だったんです。今なんて比にならないくらいの。人と話

すときには必ずもってしまうし、相手が男の人だったりしたらもう最悪。……でも、そんな自分が大嫌いで、変わりたいと思って。だから、大学に入ってから色んなことに挑戦しました。接客のアルバイトとか、任意参加のインターンシップとか。そのおかげなのか、大学卒業前にはたくさんの友人ができて、どもることもほとんどなくなりました。その時に、私、思っちゃったんです。ああ、人間関係って意外と簡単なんだなって。そんな訳、ないのに」

だからこれは、きっと神様からの天罰ですね。

そう笑う彼女の顔には痛々しく涙の跡が残っていて、どうしようもなく抱きしめたくなくなった。けれど、私は今それができる立場の男ではない。

彼女の目から、堪え切れずに溢れてしまった涙が落ちる。ああどうして、私は彼女を抱きしめて慰めることができないのだろう。

——歯がゆさでどうにかなってしまいそうだ。

「……実を言うと、私もそこまで弁が立つ方ではないんです。なので、いつも皆さんのお話を聞いて、私の思いをカクテルに託しているんです。言葉だけでは、私は人に不快な思いをさせてきてしまっただけだったので」

彼女の前に二つのカクテルを置く。言葉を使うことは得意ではない。けれど、カクテルならば。自分の持つ技術をすべて用いて作れば、想いを伝えられる。

「アプリコットフィズと、ハイライフです」

どうぞ召し上がってください。

意味は伝わらなくてもいい。伝わってくれたら、それはとても素敵だが、これはただのわがままだ。

しかし彼女は一向にカクテルに手を付けない。髪をかけている彼女の左の耳が灰かに赤い。

「……川崎さん。私、初めてこのお店に来た時にカクテル言葉を知ってから、いろんなカクテルを調べてたんです。その、もちろんこの二つも」

顔を上げた彼女は、真っ赤になっていた。まるであの日のエル・ディアブロのように。肌が白さと、漆黒の髪が彼女の赤さを引き立てる。可愛らしい。けれど私も人のことは言えないであ

ろう。彼女がこの二つを知っていると知ってからずっと沸騰してしまいそうだ。

そして彼女は、アプリコットフィズを口にする。意味が分かっている、それでもなお受け入れてもらえるというのなら。

彼女が手にしなかったハイライフを口にして、覚悟を決める。このカクテルに恥じないためにも。

「私も頑張らせていただきます。どうか、よろしくおねがいしますね、早乙女さん」

頷く彼女は、もう泣いてなどいなかった。

エル・ディアブロ

「気を付けて」

シャンディーガフ

「無駄なこと」

ブルーラグーン

「誠実な愛」

アプリコットフィズ

「振り向いてください」

ハイライフ

「私は貴方にふさわしい」

スクリュードライバー

「貴方に心を奪われた」

あとがき

駄作の極み乙女。パソコンの調子が悪すぎて途中で書く気力がほとんどなくなってしまった結果です。言い訳です。すみません。

カクテル言葉で告白するバーテンダーのおじさん（37）めちゃくちゃかわいいと思う。ちなみに途中から川崎さん（バーテンおじさん）が頭の中でホモになり始めてどうしようかと思いました。ホモじゃないです。

一切作中に出せなかった設定なのですが、亮さん（早乙女さんの元カレ）と川崎さんはプライベートでもお付き合いのある友人です。たぶんこの後亮さんは川崎さんにぶん殴られる。

早乙女さんはこれから川崎さんに猛アタックされて、無事川崎さんとくっつきます。でも亮さんに言われたことと、高校までのコミュ障な自分がコンプレックスとなって、卑屈になっちゃう。でもまあどんな風になっても川崎さんは貴方のことが好きだから安心していいと思う。川崎さんは早乙女さんが大好きなので、取り繕ってない心の中では語彙力のないオタクみたいになってます。

関係ないですが、早乙女さんの元カレの名前を亮にしたら、前作ラブレターボックスの男の子亮太君とごっちゃになってしまって泣きそうになってました。以上です。

ありがとうございました。

一生のお願い

炬燵猫

下校時刻の校門は、普段より騒がしかった。

誰かを待っている女子生徒や談笑しながら歩く男子生徒たちの間を縫って、長谷川由貴は帰路につく。

昨日までは雨が降っていたが、今日は晴れあがっている。梅雨の晴れ間というやつだろうか。由貴の鞆には、必要のなくなった折り畳み傘が入っていた。

明後日にはテストがある。テスト一週間前は部活禁止だから、普段は部活動に精を出しているであろう生徒も今日はまっすぐに帰宅するはずだ。帰ったところで勉強するかどうかは怪しいものだが。

とてとてとて、と軽い足音が背後から聞こえてきた。雑多な足音とは違う、聞きなれた音。

振り返らなくても、すぐに誰だかわかる。

背後の人物が追いついたところで念のため顔を確認。

「堂本有咲」

「え、なんでフルネームなの」

ぼさぼさになった長い髪を整えながら、堂本有咲ははにかんだ。

「置いてくなんてひどいなあ」

「明後日からテストだろ。早く帰って勉強しないと、今回数学がやばいんだよ」

「あー、えっと、そっか」

有咲は一瞬考え込むようなしぐさをしてから、頷いた。こいつまさか、テストの存在を忘れていたのではないだろうか。

「堂本はどうなんだ？　今回は赤点なしですみそうなのか？」

「……………」

有咲の視線がゆっくりと、明後日の方向に向く。

「おい」

有咲の顔を覗き込むと、視線を合わせまいと避けられた。と思ったら、急に顔を動かして満面の笑みでガッツポーズなんかして。

「私たちまだ高校二年生なんだよ？　しかもまだ春！　勉強なんて放っておいて遊ぶ時期だよ！」

「なわけあるか」

そんなことが許されるのは、一部の天才だけである。残念ながら由貴も有咲もその一部ではなく。

「あ。あれ」

有咲が空中の一点を指さす。

二階建ての家の、ベランダあたり。何もかかってない物干し竿とハンガー。

「いるな」

白くて半透明で、ふわふわした毛玉。そうとしか表現できないようなものが浮いていた。

幽霊。死んだのに未練があって必死に現世にとどまっている魂のかけら。

「人間じゃなさそう……。犬っぽい？　どうする？」

「どうするって、成仏してもらうしかねえだろ」

左手の手のひらを上に向けて、右手で手招きをする。やさしく、ゆっくりと。

幽霊が、由貴に向かって動きはじめた。たんぽぽの綿毛のように、その動きは遅く、蛇行している。それでもせかさない。

せかすと逃げられてしまう。

「大丈夫だから、おいで」

風に流されかけながら、幽霊がやっと由貴の左手の手のひらに乗った。すかさず由貴は息を吹きかける。

綿が舞い散るように幽霊は飛ばされて、やがて透明になって消えた。

「おお、上手」

感心した様子で小さく拍手する有咲の頭を小突く。

「堂本が下手くそすぎるだけだ。この前も右手で幽霊をつついてどっかに逃げられちまっただろ。あの幽霊、まだ見つかってねえし」

「あー、そんなことあったかなー」

ひゅーひゅーと音の出ない口笛で誤魔化そうとする有咲。

なるほど。なら。

「そういえば、誰かさんが面倒くさがって歩きながらやったらこけて」

有咲の顔色が変わった。

「わーかーりーまーしーたー！ 今度探しに行きますう！」

「ねえ、あそこのゲーセンに寄らない？」

有咲が指さしたのは、あと五分で駅という場所にあるゲームセンターだった。

「よらない。俺ゲームしないし」

「いいじゃん。私がするから」

「そもそも明後日テストだし」

「ぐう……あ、幽霊。由貴君、あの中に幽霊がいる」

「嘘つけ。俺には見えないぞ」

そもそもゲームセンターの内部がよく見えない。日の光を遮るためにすだれがかかっている、外からの目も完全にシャットアウトしている。

「ほら！ わがまま言ってないで行く！」

どっちがわがままだよ。

そう思ったが、結局言わなかった。

さっきはああいったが高校二年の春では焦りを感じることもないし、テスト勉強ならもう一日ある。有咲も長居するつもりはないだろう。

どのみち有咲がこうなったらよほどのことがない限り折れてくれない。

由貴は有咲に半ば引きずられるようにして歩きながら、そんなことを考えていた。

外からは全面にすだれがかかっているように見えたが、どうやらそうではなかったらしい。暗すぎないように適度に太陽の光を採り入れている。

ゲームセンターの中は、平日だというのに意外と混んでいた。主に学生で。というか、見知った顔がちらほら。

「あいつら、なにやっているんだ……」

思わず頭を押さえてしまいそうになる。中には赤点常習犯もいて、少しは自重しろよと。

「入った時点で由貴君も同類だよ？」

理不尽極まりない発言が飛び出してきた。ここまできると、何か言い返す気力すら湧いてこない。

有咲は入り口のあたりで店内を一通り見渡すと、

「あれがいいかなっ」

ゲームセンター内でもかなり明るい一角を指さした。

「UFOキャッチャーなんてできるのか？」

「できるっ。わーたーしーはっ天才っ少女、だもん！」

すでにその歌だけで頭の中がお花畑のおバカな女子高生なのだが、わかっているだろうか。

即興の変な歌を歌いながら有咲はずんずん進んでいって、流れるように百円玉を投入。ティロリティロリとあの特有の音に合わせてアームを動かしていく。

(あ、ミスってる)

長谷川由貴は、UFOキャッチャーに関してはそれなりに経験も技術もある。今有咲が挑んでいるような『少し小さめのぬいぐるみ』なら、たぶんとれる。

「きたあああああああああ」

「うるさい」

小躍りする有咲を小突こうかと思って、やめた。そんな必要はない。

アームが下がって行って、ぬいぐるみを掴みかける。しかし現実は無情だ。ぬいぐるみはアームほど大きくはなく、するりと滑り落ちてもとの位置に収まってしまった。

「あああああああああ」

「うるさい。叫ばなきゃ生きていけないのか」

わざとらしく耳を塞いでみせる。

周りの人に迷惑になっていないか心配になってないか不安だ。ゲームセンターは大きな音であふれているから多分大丈夫だろうけど。

「なんであそこで落ちるの！ 物理法則に反している！」

「物理万年赤点は何言ってるんだよ」

ぐぬぬ、と歯噛みする有咲。むうううとか変な音を口から出して。

「なら！」

人差し指……ではなく百円玉を由貴の眉間のあたりにつきつけた。

「由貴君ならできるの？」

どや、と笑顔を浮かべる有咲をあきれた目で見返した。

なぜそこでちょっと得意げなんだ。

「まあ見てろって」

有咲からの挑戦状（百円玉）を筐体に放り込んで、念のためにぬいぐるみの位置を確認。これ

ならたぶん、あの辺を押せば簡単に取れそうだな、と目星をつけてティロリティロリ。

案の定、取り出し口に転がってきた。

「んなっ」

「ほら」

納得のいかない表情で残っているぬいぐるみを睨みつけていた有咲だが、やがて取り出し口からぬいぐるみを拾い上げた。

「これは私のだからねっ」

「わかってるって。いい加減帰るぞ」

出口に向かって歩こうとする由貴の腕を、有咲が掴んだ。

「……待って」

「なんだ？ 流石にこれ以上遊ぶのは」

明後日のテストに影響が出るかもしれない、と言おうとした由貴の目の前に、百円玉が差し出された。

「もう一個」

入ってきた場所とは別の場所から出てきたため、回り道をするようになってしまった。

「結構遠回りになったな」

駅前の交差点が見えてきたところで、由貴はぼやいた。

そういえば。

「結局幽霊いなかったじゃねえかよ、おい」

素早く有咲は顔をそむける。

「そ、そうだねー」

やっぱりでたらめだったじゃないか。

「ほ、ほらあそこにいるよっ」

「いないいない。帰るぞ」

有咲が指さしている方向を見もせず、由貴は歩く。

「いるって。ちゃんと見てよ」

仕方がないから顔だけ動かすと、コンビニの入り口あたりに半透明の白くてふわふわした球体がふわふわ浮いていた。

駅前コンビニなだけあって、人通りが多い。この時間帯だと特にコンビニに出入りする客が多く、今にも流されてしまいそうだ。

「成仏させる？」

無言で由貴は首を横に振った。

「ここは場所が悪すぎる。こっちが呼んでもこれないと思う。また別の場所であつたらで十分だろうな」

そもそも誰かにぶつかっちゃうんじゃないか、と続ける直前。

コンビニから出てきたおじさんの肩にあたってどこかに飛んで行った幽霊を見送る。有咲は横で手を振っているが、そういうものではない。

「幽霊なのに人とか風の影響受けるのってどうなの？」

「むしろ魂だけだから影響が大きいって考えたほうがいいんじゃないか。たぶんだけど、幽霊も俺達に大きな影響を与えようとすればできるんじゃないか」

「そういうものなの？」

「そういうものだ」

「ふうん」

納得しているような、していないような。

どちらとも判別のつかない返事が返ってきた。

「ならコンビニ寄ろっ。一生のお願い！」

「やだよ。一生のお願いならもっと大事なところで使えよ」

「これは、由貴君の一生分だから」

すごい。理不尽だ。今日は有咲からもたらされる理不尽の量が半端じゃない。

「自分の使えよ」

「私のはだめ。もう決めてあるから」

「だからって人の一生分を使うのかよ……」

呆れるしかない。

これは、また由貴が折れるまで押し問答が続くやつだろうか。ここで有咲を説得するのにかかる時間と、コンビニによる時間を天秤にかけてみる。

「わかった。買うもの買ってさっさと帰るぞ」

「やったあ」

コンビニだから、店内はそれほど広くはない。というか狭い。狭いくせに人がごった返して
いて、移動が大変だ。

有咲に引っ張られてきたのは、菓子パンコーナーの前。

「どれにしようかなー。どれもよさそうだなー」

むむむ、と難しい顔で商品棚の上から下まで比べている。なんだか楽しいお買い物中悪いが、
さっさと決めてほしい。

「困った。どうしよう。こんな時の、由貴君！」

どこから湧いてくるのかわからないそのエネルギー。見習いたいとは思わない。

「由貴君一押しのパンを買おうと思います！ ハイッ。ずばり、おすすめはどれでしょうかつ」

行動がいちいち馬鹿っぽいのは、もう慣れたものだ。

インタビューするかのように伸ばされた腕を無視して、由貴は菓子パンコーナーを眺めた。

おすすめといわれても、詳しいわけではないからよくわからない。必死に記憶を掘り起こす。

過去に食べたもので一番おいしかったもの……思い出せない。なら一番買ったことのあるもの
、だろうか。

棚の上を滑っていた視線が、一点で止まった。

そうだ。

これだ。

「抹茶レーズンパン」

「え？」

聞き取れなかったのか、有咲は首をかしげる。

「だから、抹茶レーズンパン。そこにあるやつ」

「これ？」

むむむ、と悩むのも三秒。有咲は例の抹茶レーズンパンを二つつまみ上げる。

「二つも買うのか？」

「うんっ。ちょっと待ってて。買ってきまーす！」

声と動作とその他諸々すべてでうるさをまき散らして、有咲はレジで

「会計お願いしますっ」

「えっあはい」

店員に全力で引かれていた。由貴は早々に入口に移動して、全力で関係ないふりを決め込むことにした。

コンビニを出ると、目の前に交差点がある。

広い交差点で、右折も左折も直進もすべての車がスピードを出していて、つまりは危ない。

二人がコンビニから出たときにはすでに信号は青になっていた。人がかなり捌けている様子を

見ると、あまり猶予はなさそうだ。

「おい。急いで渡るぞ」

そうでなくとも寄り道していたのだ。

「え？ あ、うん」

抹茶レーズンパンが入ったレジ袋を握りしめてゆっくりと歩く有咲をせかすようにして、交差点に入っていく。

その横を、子どもが駆け抜けていった。

幼稚園に入っているかどうかという年齢だ。着ているものから察するに、たぶん男の子。後ろから母親らしき声が待ちなさいと言っているのが聞こえる。

なぜかその子どもから目が離せなくて。

その時ちょうど、左折してくるトラックがあった。

「危ない！」

思わず駆け出した。自然なほど体が動く。まるで、この時のために何度も訓練したかのように、体が覚えている。何を？

子どもが危険に気がついたようだ。猛スピードで走ってくる金属の塊のほうを振り向いた。

運転手も気がついたようだ。焦ったような顔。たぶんブレーキを踏もうとしている。

あろうことか由貴はトラックと子どもの間に割って入った。そのまま両腕を前に突き出す。

まるで、トラックを受け止めるかのように。

「由貴君？」

有咲の声が聞こえた気がした。

一瞬世界がスローモーションになって、

トラックが由貴に衝突した。

端から見ていれば無謀な行動に見えただろう。普通ならあっけなく轢かれて終わり。

「止まれええええええ」

地面に擦過痕を残しながら、由貴は抵抗する。摩擦で靴の裏が焼けて熱い。運転手がブレーキを踏みすぎたせいで、タイヤが完全に横滑りしている。

最悪だ。

「止まれっつってんだろおおおおお！！！！」

トラックのスピードが、ありえないくらい落ちていって。

腰の抜けた子どもの一歩手前で、止まった。

「はあ、はあ、はあ……」

完全に止まったことを確認して、由貴は肩で息をつく。

「おい、そこのガキ。もう飛び出しとかすんなよ……」

誰かに腕を掴まれた。

「今のうちに渡ろうよ」

返事も聞かずに有咲は由貴の手を引いてゆく。気づけば歩行者信号は点滅していた。

「運転手に一言いわせろよ」

「いいから」

「……」

いつにもまして強引な有咲に、何も言い返すことができずにただ後ろを歩く。

横断歩道を渡り切った先には、花束が備えてあった。

「これは……。そうか」

「そうだよ。一週間前——」

「——一週間前、由貴君は死んだ。交通事故で」

由貴が何も言わないのを確認してから、有咲は言葉を続ける。

「さっきみたいに、子どもを庇っての交通事故だった。由貴君が庇ったおかげで子どもは無事だったけど、由貴君は即死だったって」

話しているうちに、由貴の体が末端から壊れ始めた。手の指が、足の先が、ガラスのように砕けてから空気に溶けていく。

「もうだめみたいだな」

砕けていく手を眺めながら、由貴は何でもない風につぶやく。

「さっきので魂のほとんどを使っちゃったみたいだ。そろそろ消えちまう」

それが、強がりだということくらい、有咲にはわかる。

わかってしまう。

「じゃあな。しばらく会えないだろうけど、元気にしてろよ」

「うんっ」

「あ、あと赤点はとるなよ」

「うん……え、」

それはどういう意味なんでこの前の私のテスト結果知ってるのまさかみたの。

問いただす暇なんてない。

由貴の全身が空気と混ざり合って、溶けてなくなった。

後に残ったのは、白くてふわふわした半透明のあれ。

手のひらを向けると、呼ばなくてもやってきた。一瞬ためらってから一息、できるだけ優しく吹きかける。

「またね、由貴君」

有咲が去ったあと、花束のそばに抹茶レーズンパンとぬいぐるみが一つずつ置かれていた。

「ただいまー」

「おかえり。今日は早かったわね」

有咲が帰ると、エプロン姿の母が出迎えにきてくれた。

「今日はノ一部活デーだから」

月に一回、部活動禁止の日がある。部活の休みがないことが問題になったときにつくられたらしい。

「あと一時間くらいでご飯できるから、それ終わったら長谷川君の送別会行くわよ」

自室に向かう有咲の背中に、母が呼びかける。

「……っ。はい」

なんとか返事をする、部屋に駆け込んで扉を閉めた。

鞆を開いて、ゲームセンターでとってきたぬいぐるみをベッドの上に置く。最近になってぬいぐるみが増えている気がする。

椅子に座って、コンビニのレジ袋を開けた。中には抹茶レーズンパンが一つ。

涙が出そうになるのをこらえて、封を切る。甘い匂いが広がった。

一口、食べてみる。

じわりと、涙があふれた。

「ふえ……ひっく……ひっく……」

もう、味なんかわからなかった。

涙が。

溢れ出して、止まらない。

「なんで死んじゃったのおゆぎぐん……うええええ」

もう、我慢なんてできなかった。

手に由貴との思い出を握りしめて、有咲は突っ伏して泣いた。

「戻ってきてよお……一生のお願いだからさあ……」

キャラバン

佐久間 佳雪

早朝。森のなかの道を、幌馬車が走っていく。

がたがたと揺れる馬車のうしろに座るアスカは朝食代わりにりんごをかじった。前回の依頼の報酬でもらったそれはたくさんの日の光を浴びて赤く熟れており、かじると絶妙な甘みと酸味が広がる。太陽の味だ、と呟き、アスカは口の端を伝った果汁を拭った。

「スイ、セッカ起きた？」

「んーん、まだ。そろそろ起こしたほうがいいかなあ」

「そうだなあ、体痛めそうもんな」

覗き込んだ幌のなか、昨日積んだ木箱の間に挟まって寝る仲間の姿がある。眉間にしわを寄せてうなされている彼女の様子を見て、アスカとスイは顔を見合わせた。

「……なんでこんなところで寝てるんだろ」

「本当に」

スイはクッションにしていた布のかたまりから身を起こし、セッカの頬をつねる。うう、と苦しそうな声をこぼしたあと、うっすらと目を開けた。

「……んえ、う？ なに、ここ……？」

「木箱の間ね。りんご食べる？」

「んん……？ いる……」

「いるんだ」

笑みをこぼすふたりを見上げ、セツカは寝ぼけたまま起き上がった。ふらふらと馬車の揺れに合わせて頭が揺れる。変なところで寝ていたせいで体が痛いらしく、唸りながら肩や首を回した。そしてアスカが荷のなかから持ってきたりんごをかじって、一言。

「あまくて……おいしい……」

「ふは、っ」

セツカはお腹が減っていたらしく、それから黙々とりんごを食べる。しかし寝ぼけたセツカがつぼに入ってしまったふたりはしばらくの間肩を震わせていた。

笑いの波がようやく引くと、スイは馬車の前方にかかっていた帳を開けた。吹き込んできた早朝の冷たい風は清々しく、差し込む朝日は心地いい。まぶしい、とうしろから非難するような声がしたが聞こえないふりをして馬車を運転するふたりに声をかけた。

「おふたりさん、かわろっか？」

「いや、大丈夫。まだいける」

「そう？ 無理はしないでね」

うん、と手綱を握るウヅキが返事をする。その隣で読書に耽っていたソラは幌のなかを覗き、微笑んだ。

「せっちゃん、起きたんですね」

「体痛めそうだったから起こした！ あ、ふたりもりんご食べる？」

「あ、食べる。お腹減ってたんだよね」

「私もいただきます」

「了解！ アスカー、もう二個りんごちょーだい」

はいよー、と気の抜けた返事のあとに、りんごが二個飛んでくる。うまいこと受け止めたスイ

は軽く汚れを拭いてからそれをふたりに手渡した。

それから幌のなかに引っ込んだスイも、りんごをもらってかじりついた。全員が甘くておいしいりんごをしゃりしゃりと食べていく。

早朝の森は澄んだ空気で、様々な鳥の声、風に揺れる葉の音、それと馬車を引く馬の蹄の音が木々の隙間に響いていた。柔らかな朝日のなかを幌馬車は進んでいく。

そんななかで、はあ、と誰からともなくため息をこぼす。そして、ほとんど同時に全員の口から悲壮感に満ちた呟きがこぼれ落ちた。

「……肉、食べたいなあ」

各地を旅しながら配達の仕事をしている以上、彼女らはいつでもふかふかのベッドで眠れるわけではないし、いつでも温かくておいしいご飯が食べられるわけでもない。だからこそ立ち寄った町で食べるちゃんとした食事がたまらなくおいしく感じるのであり、まともな食事ができないときそれを楽しみに頑張ることができるのだ。しかし今回ばかりは少々事情が違っていた。

というのも、前回の依頼で立ち寄った町で長居ができず、食材の買い足しやまともな食事をすることができなかったのだ。従ってここ数週間、りんごとパン、たまに干し肉で食いつないでいる一行はもはや限界だった。

りんごを食べきってしまったセツカは足を揺らしながら馬車のうしろに座っていた。物足りなさを誤魔化すために干し肉を口にするけれど、心は満たされない。こんなかぴかぴの肉じゃなくて、分厚くて肉汁に溺れそうになるステーキが食べたかった。あと具がたっぷり入ったスープと甘いケーキも欲しい。

そんなことを考えてもやもやししながら肉を噛んでいた、そのときのことだった。

「セッカ、町見えてきたよ」

スイの声に飛び上がる。待ち望んだふかふかベッドとおいしいご飯がそこまできたと聞いて沈んでいた気分が一気に浮上した。セッカは転びそうになりながら御者台に顔を出す。

まっすぐな道の向こうに石造りの町並みを見つけた瞬間、セッカは数日ぶりに心からの笑顔を見せた。

「ステーキだ！」

「町だよ？」

「間違えた！」

それなりに賑わっている町に到着した一行は配達先のよろず屋に品物を納めたのち町のはずれに馬車を停めた。

御者台から降りたウツキとソラは大きく伸びをする。交代しながら馬車を操縦していたとはいえさすがに疲れたようだった。次にスイが荷物を持って馬車から出てきて、食堂へ走って行こうとするアスカとセッカの首根っこを掴み引き止めた。

「さて、どうしようか」

「肉！」

「はいはいわかったから」

スイに捕まった食いしん坊ふたりは主張を軽く流されたことでさらに騒がしくなった。しかし開いた口に干し肉を突っ込まれた途端静かになる。代わりに不満げな視線がスイに向けられた。

そんななか、ソラが手を挙げる。

「ご飯を食べたら動きたくなくなるでしょうし、先に宿をとりませんか？」

「いいね、採用」

馬を連れ、町のなかへ引き返す一行。渋々といった様子の約二名は食べ物につられていなくなりそうなるが、三回目でいい加減にしるとウヅキに叱られると、それきり大人しく着いてくるようになった。

利便性を考えて食堂近くの宿屋を訪ねると、昼前であったということもあってちょうど二部屋空いており、すんなりと今晚の宿が決定した。今まで宿決めが難航することも多かったため、早い段階で決まるのはありがたかった。

馬を預け、案内されたのは二階の隣り合った二部屋。ウヅキとソラが手前の部屋を、食いしん坊ふたりとスイが角の三人部屋を使うことになり、各々荷物を置いて準備をしてから再び集合することになった。

ちなみに三人部屋には二段ベッドがあったのだが、アスカとセッカのどちらが上を使うか、というしょうもないことで揉めに揉め、最終的にコイントスで決めたところアスカが上を勝ち取った。

「裏選べばよかった……」

「まだ言ってるの」

「二段ベッドで争うとか子供か？」

「男には譲れない戦いがあるんだよ」

「せっちゃんもアスちゃんも女の子ですよ？」

一仕事終えた開放感とこれからゆっくりできる喜びで会話が弾む。気持ちは完全にこれから食べるお昼ご飯に向いていた。

「お嬢ちゃん、ちょうどよかった！ 聞いたよ、あんたたち運び屋なんだって？」

「はい？ そうですけど……」

呼び止めたのは宿屋の奥さん。聞けば依頼したいと言っている人がいるそうで、これから尋ね

てほしいという話だった。

正直、早くまともなご飯を食べたい。しかし運び屋という仕事をしている以上、依頼者が最優先事項である。

ウツキの背中に食いしん坊たちの視線が刺さる。ご飯行こうよ、あとでいいじゃん、そんな声が聞こえる気がした。ウツキとてそうしたい気持ちは山々だ。あのふたりのように表には出さないが彼女だって早くおいしいご飯を食べたいのだ。

けれど。

「……はい！ 今すぐ伺いますね！」

ウツキは働き者だった。

やだー、ご飯食べたいー、とごねる数名を引きずり、ウツキたちは依頼者の元へ向かったのだ。

「も一夜じゃん！ お腹すいたー！」

半泣きのセッカの声が、夕暮れの町にこだまする。残りの四人には返事をする気力さえなかった。

夕焼け空の燃えるような赤が目にしみる。随分色濃くなってしまった影を見て、セッカは悲しいような気持ちになった。

石畳の道をふらふらと歩く一行は、見ての通り疲労困憊だった。

依頼したいと言ってくれていた織物屋のお兄さんから布を受け取って馬車に積み込むまではよかった。そこからあれもこれもといろんなひとから依頼を受けてしまい、荷物の積み込みやら報酬の受け取りやらしているうちにあっという間に夕方になってしまったのだ。もちろん昼食の時間などなく、五人は気休めにぱさぱさのパンをかじるしかなかった。

まず空腹が限界を超えたアスカが一切口を開かなくなった。そしてまあまあと食いしん坊ふたりをなだめていたスイから笑顔が消え、ソラがアルカイツクスマイルを浮かべはじめたあたりで

、ウツキはようやく己の選択を後悔した。

しかし時すでに遅し。時間は巻き戻らないし、空腹はなくなる。重い足を引きずって食堂へ向かうしか選択肢はなかったのである。

「なんでセッカは元気なの……」

「お腹減りすぎて逆にハイになってるの！」

ようやくたどり着いた食堂は、暖かなオレンジの光に包まれかなり賑わっていた。この町の住人と思しきひとたちが酒を酌み交わし、酔って大きな声で騒いでいる。宿場町の食堂や酒場ではよく見る光景だった。

一足先にセッカが店に入り、遅れて四人も中へ入る。すると騒ぐ若者たちを見て困った顔をしていたお姉さんがこちらへやってきた。

「いらっしゃい！ 五人かな？」

「はい、そうで、」

突然、ガラスが割れる大きな音が店内に響く。驚いて音のした方に目を向ければ、どうやら若者が喧嘩をはじめたらしかった。お姉さんはちょっとごめんね、と仲裁のためになかへ戻り男手を呼んできたようだが、それでも酔った若者を止めることはできない。

一方、極限状態のセッカたちは苛立っていた。

待ちに待ったご飯の時間を邪魔するな。こっちは汗水垂らして一日働いたんだぞ。早く座らせろ。肉をよこせ。いい加減にしろ——

我慢の限界は突然に訪れた。セッカとアスカ、食いしん坊ふたりが喧嘩の中心にいた若者にドロップキックをお見舞いしたのである。

どよめく店内。ドミノ倒しのように倒れ込んだ青年たちが喚き散らす。しかしとうに限界を超えたふたりには届かない。

「お嬢ちゃんだからって手加減しねえぞ！」

ひとりがそう叫んだことで、惚けていた仲間たちも拳を握った。食いしん坊は殺気を滲ませる

。

ここからはまさしく地獄絵図だった。

アスカは若者の拳をいなして背中側に回り無防備なそこを足蹴にし、体勢を崩した男を踏み台にひょい、と飛び上がったセッカは容赦なく男たちを踏んづける。掴みかかってくる相手に対しては懐に潜り込み急所である脛やら股間やらをためらいなく蹴り上げた。こうして出来上がった屍の山に無傷で立ったふたりは、声高に主張する。

「店にあるだけ肉もってこいやァ！」

歳若い少女たちの大立ち回りに食堂は熱気に包まれた。

わずかに残った理性と師匠の教えのおかげでものを壊さないように動きつつ喧嘩が収めることができたふたりは店側にとても感謝された。また、今日様々な依頼を受けてまわっていた運び屋だとわかると、常連さんたちが飯代を奢ってくれることになった。ふたりとしてはキレて八つ当たりしただけだったのが、それがどうやらいい方向に働いたらしい。

「はいよ、お待ちどおさま！」

そして今、待ち望んだまともなご飯がテーブルに置かれていく。濃厚デミグラスソースがかかった半熟目玉焼き乗せハンバーグ、ごろごろ具沢山のクリームシチュー、あつあつとろとろのグラタン、チーズたっぷりのピザ、ほくほくのポテトフライ、そして、夢にまで見た百科全書のごとく分厚いステーキ、など。大きな丸テーブルに所狭しとばかりに並んだそれらを見ているだけでよだれが止まらない。

りんごとパン、干し肉で腹を満たしていた日々が走馬灯のように思い出される。あの辛かった毎日はきっと今日この日のためにあったのだ。

ご馳走を前に手を合わせる。満面の笑みを浮かべた少女たちは声を揃えた。

「いただきます！」

一同が真っ先に手を伸ばしたのはもちろん、分厚いステーキだった。ナイフで大きめに切り分

けると、切ったところからじゅわりと肉汁が流れていく。それだけでもうたまらなくて叫び出したくなるのをぐっと抑え、口へ入れた。噛んだ瞬間、旨みと肉汁が口のなかに溢れ出す。肉汁で溺れたいなどと散々考えていたセッカは、嬉しさのあまり涙を滲ませた。

味付け自体はシンプルだが、間違いなく今まで食べたステーキのなかで一番おいしい。理由はよくわかっている。空腹という名のスパイスがよく効いているからだ。

「ああー、おいしいよお……」

もはやおいしいしか言えず、ぐすぐすと泣きながら肉を頬張るセッカ。一方同じくらい肉を欲していたアスカは黙々と料理を口へ運んでおり、ステーキはものの数分で五人の胃袋のなかへ消え去った。

「セッカ、ピザとって」

「はいよー。ていうかやっと喋ったなアスカ！」

「すーちゃん、シチューいりますか？」

「いる！ あ、ねえウツキ、ポテトちょうだい」

「ん、はい。ソラー、私もシチューいる」

念願だったステーキを食べ切ると、貪り食うだけだったみんなの顔にようやく笑顔が戻り、会話らしい会話が始まった。だが話しながらも食べるスピードはまったく落ちることはない。

店にいた人々は、大量の料理がどんどんなくなっていくのを呆然と見ていた。正直、テーブルに料理が並べられたときまではどうせ完食できないだろうと誰もが思っていた。しかし予想に反して少女たちの手は止まらず、あっという間に皿が空く。

しばらくして、見守る人々がざわめくなか、ソラ、スイ、そしてウツキが食器を置いた。

「ふう、私このくらいにしておきます」

「そうだね、お腹いっぱいーい」

「私ももういいや……セッカ、アスカ、残り食べ切れそう？」

「え？ 余裕」

「ねえ、ケーキ食べたいんだけど頼んでいい？」

軽々しく奢ると言ってしまった常連さんは頭を抱える。そんなことには気づかない食いしん坊コンビニの食欲は、止まるところを知らなかった。

三人脱落しても、残りふたりは食べる手を止めなかった。それどころかムニエルを追加で頼んだ上、デザートまできっちり完食し、それからようやく食器を置いたのだった。

「ごちそうさまでした」

きちんと食後も手を合わせ、大満足のふたりはすっかり綺麗になったテーブルに突っ伏す。

とても満ち足りた気分だった。これが幸せか、とアスカはぼんやり考える。

「おいしかった……満足……」

「うん、本当に……またお仕事頑張れる、なあ……」

「おいおいおい、そこふたりここで寝るな！」

「んん……スイうるさい……」

迷惑そうに言われ怒ったスイは、目を閉じて寝る態勢に入ったふたりの後頭部をひっぱたいた。いい音が響き、情けない悲鳴が上がる。せっかくいい気分だったのに台無しだ、とふたりは文句を言うべく立ち上がったが、朝のように首根っこを掴まれ店の外に引きずられていった。

「……ええと、お騒がせしてしまってすみませんでした」

「本当に申し訳ない……お金払います」

外で騒ぐ仲間の声を聞きながら、ソラが苦笑いを浮かべる。ウツキは頭を下げ、一応追加注文した分の代金を支払ったのち店を出た。

「本当に、お騒がせしました！ ご飯おいしかったです！」

最後にそう言い残し、一行は宿屋に帰っていった。

居合わせたひとのはちにこう語ったという。彼女らはまさしく嵐のようであった、と。

翌朝、五人の姿は賑わいはじめた町のはずれにあった。

ウヅキとソラは荷物とその配達先の確認を、スイは先ほど買ってきた食料など消耗品の整理をしている。件のふたりはといえば、荷物が多く狭い馬車のなかで隙間に挟まって眠っていた。

「なんで挟まって寝るかな……」

物資を積もうと覗き込んだ馬車のなかに昨日も見たような光景が広がっているものだから思わずスイはため息をついた。昨日も爆睡しておきながらまだ寝るとは、呆れたものだ。

「スイ、準備できた？ 出発するけどいい？」

「あ、了解、大丈夫だよ」

スイは物資を積むと狭い馬車に乗り込んだ。そしてすやすやと気持ち良さそうに眠るふたりの頬を叩き、起こす。

「おふたりさーん、出発するってさ」

「あ、ほんとお……？」

「わかった……起きる……」

隙間から起き上がったからもふたりはぼんやりと頭を揺らしていた。ほどなくして馬車が動き

始めると、ふとセツカがうしろに顔を出した。

「どした？」

「うーん、いや、楽しかったなあと、思っ」

だんだんと町は遠ざかる。たくさんの荷物を積んだ古い幌馬車は次の町へ向かっていく。

運び屋がひと所に留まることはない。そういう仕事だ。けれど深く交われない寂しさはいつだって、彼女たちの心のどこかにある。

「次の町も、きっと楽しいよ」

それでも五人は物を運ぶ。きつとこっちの方が楽しいから、と言って笑って、寂しさなんて忘れたふりをする。

「……うん、」

かくして、今日も幌馬車は走り続ける。

終

パラダイムシフト

パラダイムシフト

守目冥人

一時間おきに変わるパスワード、指紋認証、声紋認証、虹彩認証。それらを順当に解除していく。

ここのセキュリティは格別だ。ただセキュリティに予算を充てすぎたのか、設備とメシが最悪なのは勘弁してほしい。

慣れた手つきで全てのロックを解除した。

「おう」

「こんにちは」

室内は廊下とは違って涼しかった。部屋の主は身長一八三センチメートル体重八六キログラムの体格が良い男だ。年齢は今年で三四になるらしいがとてもそうは見え、四〇は軽く超しているように見える。美術教師や大学教授のような服装が原因だろう。彼の服装は似合っているとは言い難いが、彼の性格をよく反映している。彼は厳つい見た目とは裏腹に物腰が柔らかい人間だ。

それが俺には恐ろしかった。

設備とメシをないがしろにするほどのセキュリティには理由がある。連続婦女暴行事件の犯人、それが彼だ。彼の正体とか本性とか裏の顔とかではなく彼自身。

「それで今日は」

「はい」

「どうだ」

「どうだと言われましても。何のかわりもないですよ」

「そうだけどな、こっちも日報書かなきゃいけないわけで。何でもいいんだ、思ったこととか考えてたこととか」

「警察も暇ですね」

「お前という凶悪犯が捕まったからな。当分は暇だろうよ」

「いいじゃないですか。警察の暇は街の平和と同義です」

「お前……！」

自分がしたこと分かってるのか、と食って掛かりそうになって止めた。いくら相手が罪人だとしても権力に裏付けられた正義を振りかざしてはならないという、いち警察官としての誇りのようなものがあつたのかもしれない。それ以上に相手のガタイがよすぎて怯んだというのが、情けないが本心である。

「どうしてそこまで他人行儀でいられるんだよ」

一呼吸置き、言葉を推敲してから質問を投げる。

「よかったじゃないですか、日報に書くネタができましたよ」

そう言って彼はポケットから煙草を取り出した。

「自分が犯した罪に対しての自覚に乏しい、と」

「悪ィが嘘は書けねえんだ」

「何故嘘だと思ったのですか」

煙草に火をつける。

「実のところよく分かってないのです。動機も目的も」

煙の行く末に気を配って横に吐いた煙は、空調によって無慈悲にこちら側へと向かってきた。

「失礼」

特に悪びれた様子のない形だけの謝罪が煙の向こうから飛んできた。

きゃはははははは おまえマジしね！

うぎ、うっっっっぎ！

まじでえ？

え、てかさてかさ……

昨日あのあと**と**と一緒にコンビニ行ったんだけど、

マジチョーイケメンでえ！

痩せたーい

おーいー！ お前マジでさあ！（笑）

クーラー欲しー

えそれうちのせいじゃない？てか聞いて！だってさ

おとなのれんあいつてあこがれるよね

ホントこの制服やだ

おなかすいたー

マジであいつ無理なんだけど！ え、キモいキモい

それなー

この制服やだー

はいはいはいはいそれさんせーい！

今日テストどこまでだっけ

ああ、またここだ。

ここは夢のなか。夢だと分かるが体が動かない。

甲高い悲鳴が上がった。

声のした方を見る。

慌てて逃げようとする男、顔は見えない。

追いかけてたいがいつだって足は動いてくれない。

駄目だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ。

卑劣な性犯罪者は誰一人として許すわけには

目を逸らしたい、この次に映るものが分かっているから。

目は常に一点を見続けた。

目の前に変わり果てた姿の女子高校生が大写しになった。

死んではない。しかし彼女にとっては死んでいないという事実そのものが死よりも辛い事であらう。

また今回も救えなかった

着ていたTシャツが汗で纏わり付いてひどく不快だ。

起き上がって近くにあったペットボトルの水を飲み干す。

時計の針は二と三のちょうど間をさしていた。

こうなるともう再び眠りにつくことは困難である事は経験上分かっていたのでベッドから立ち上がり、風呂場へと向かった。

真夜中だからかシャワーがタイルを叩く音がやけに反響する。

鏡のなかの自分と目が合った。

俺は正気か？ 彼の案件が回ってきてからこのような自問自答を繰り返すことが増えた。俺が属する生活安全課子ども・女性安全対策室対策第一係（所属先が長ったらしいのは勘弁してほしい）は名前の通り女性や子供の安全に関わる犯罪を取り締まっている。

俺の性犯罪者に対する執着は自分でも常軌を逸していると思う。だがそれも無理のないことだろう。なにしろ

背中が泡だった。

俺以外誰も居るはずのない浴室。

少女と鏡越しに目が合った。

高い透明度と密度を兼ね備えた不思議な瞳だ。

俺は彼女を知っている。だって彼女は

「兄さん」

まだ十四歳だった。まだ十四歳だったのに。

「ごめん。本当に……っ

堪らず振り返った。

そこには誰もおらず、ただ床が濡れていた。

「風邪ですか」

「んん」

真夏とはいえ夜中の三時に素っ裸の濡れ鼠でいたら風邪のひとつも引く。

「何してらしたんですか。お腹でも出して寝たんですか」

「まあそんなごころだ」

突如、目の前が真っ白になった。ホワイトアウトではない、目の前の彼がタオルケットを広げて投げたのだ。

白の隙間から彼が現れた。

「今日は休んでください」

タオルケットに肩を抱かれる。

「お気持ちはありがでえが無理だ」

そのままタオルケットと溶けてしまいたい気持ちを押し殺し、渾身の力でもってそれを払い除けた。

「じごとがまだ……」

「一日くらいどうにかなるのではないですか？」

「ぞういう問題じゃねえんだ」

ぐずぐずの脳と鼻を必死に働かせ、言葉を絞り出す。

「お前みたいな奴から目を離すわけにはいかねえ」

沈黙、二度目のホワイトアウト。

今回ばかりは脳のせいだ。

きゃはははははは おまえまじしね！

うぎ、うっっっっぎ！

まじでえ！？

え、てかさてかさ……

昨日あのあと**と**と一緒にコンビニ

ああ、またここだ。何回目だろうか。

ふわり、と何処からか柑橘類の香りがした。本物の少し苦みばしった匂いではなく、例えば制汗剤のような人工物じみた匂いだった。

また甲高い悲鳴。

どうせまた今回も

「<><><><><><><><>」

突如耳鳴りがした。耳鳴りというか鼓膜全体が何者かに揺さぶられている感じ。

男が逃げる。

その速度はいつもの十分の一にも満ちていなかった。男だけでなく周りの人間も。何事かところちらを見やる主婦、迷惑そうな顔のサラリーマン、咄嗟に子供を庇う母親。その全てが十分の一の速度で動いていた。

今なら届く、今なら救える。

走り出すのに何のためらいもなかった。あるはずがなかった。

この夢を見続けて何年になる？

男を捕まえれば、少女を救えば、

やっと、やっと、やっと、

この悪夢が終わる。

男の腕をつかむ。

俺だった。

「……え？」

誰かに睡魔の糸を一気に抜かれたが如き目覚めだった。

ここは何処だ？ 彼の部屋だ。

彼は何処だ？

思わず飛び起きた。反動で世界が半回転したが必死に立て直す。

脱走？

まずい、まずいまずいまずいまずいまずい。

俺の処分もさることながら、犯罪者を野放しにしてしまうのは。

「兄さん」

ベッドの隣にある小さな机に、タブレット端末を持った小さくて大きな心的外傷が座っていた。

「……」

タブレット端末をこちらに差し出す。当然その手を取ることはできない。抱きしめることも血を拭いてやることも、乱れた衣服を直してやることも。

「R010622」

懐かしい声だ。最後に聞いたのは何年前のことだったか。

程なくして少女は消え、机にはタブレットが残った。

目の前に置かれた鉄の塊がやけに忌々しい物に感ぜられた。

何とはなしにタブレットを裏返す。

『保護観察所精神保健観察課備品』と書かれたラベルが貼ってあった。

保護観察所？

「おれはいままで保観のお古を使ってたってことか？ 経費削減にも程があるだろ。ははっ……」

引きつった笑みを浮かべていつものようにパスコードを入力する。

『error : パスコードが違います』

パスコードが違う？ そんなはずは

「R010622」

そういえば。

彼女の呟きが頭を過ぎった。

鍵は難なく開いた。

ということはこれは俺のものではないのか。では誰の？

[六月十六日]

風邪にて寝込む。本日未明に浴室の利用履歴。何も無いところで振り返る、虚空に話しかけるなどの異常行動が見られた。幻覚・幻聴の可能性。（独り言の内容は未確定）

なお本日より被害に遭った女性達の年齢層で人気の制汗剤、香水を嗅がせて反応を見る実験を行う。生活様式は前日と同様。

心臓が早鐘を打った。

さらに日報を遡る。

[三月二十六日]

本日より観察を開始する。対象は連続婦女暴行事件の加害者であるが心神喪失状態により犯行時の記憶を失っており、私を婦女暴行事件の加害者、自らをかつての役職である生活安全課女性安全対策室対策第一係係長であると認識している。ひとまず刺激を与えることを避け、話を合わせる。

堪らず部屋を飛び出した。飛び出せた。

厳重なセキュリティなんて頭の中にしかなかった。

真白な空間に出た。

スーツを着た男と目が合った。

男は胸ポケットに手を入れ、内線でどこかに連絡した。

ほどなくして数人の男に捕らえられる。

右脇腹に刺されるような痛みが走った。

「私の管理不行き届きです」

彼の声が遠くで聞こえる。

まだ指先がぴりぴりと痺れている。

心身喪失、幻覚、生活様式、実験……

あの日報は本物か？ 本物だとしたら、そもそも俺は誰だ？ 自分の正気を何処から問いただせばいい？

夢。

長い間ずっと見てる夢。

何で被害女性の詳しい状況を知っている？

「しかし何故これだけ思い出せないんでしょうね」

「これだけ？」

「彼には痴漢の前科があるんです。大分前ですけ

「俺はやってない！」

大声が空気と保護司達を振動させた。

「まずは落ち着いてください」

「無理だ！」

「ではそのまま話し続けてください、記録を取ります。どういうことですか」

「冤罪だ、はめられたんだ」

「証拠は」

「証拠が無エから捕まったんだ」

「……確かに痴漢の容疑で訴えられた場合、無罪を勝ち取るのは非常に困難です」

「あの、ひとまず座ったらいかがですか」

「……。それで、えっと何処まで話した話しましたっけ」

「痴漢の冤罪にかけられたが証拠がなくそのまま有罪に」

「そうか。それで……救いたかったんだ。もうあんなの見たくなかったんだ。だから、でも、……」

「誰かビニール袋持ってきて！」

「椅子から降ろしますね、体触りますよ！」

「体あずけてください」

「持ってきました！」

「吸ってー……吐いてー……」

「……」

「……」

「……まだ、話せそうですか？」

「……俺には妹が居たんだ。かわいい奴でさ、いっつも俺の後をついてきてさ、でももう居ないんだ。死んだんだ。殺されたんだ。まだ十四だったのに」

視界が霞んだ。

「だからもう根絶してやろうと思ったんだ。誰一人として同じ目には遭わせないって。それが無理でもせめて一人でも多く守りたかったんだ。でも違ったんだ妹は違ったけど違うんだ。違っ、あの、」

頭の中ではちゃんと喋れるのに、脳と喉の接続が悪いのか言葉がもつれてうまく喋れない。

「なにがJKブランドだ」

代わりに出てきたのは話の本質とかけ離れた言葉だった。かけ離れてると分かっているのに言葉は止めどなく溢れ出す。

「制服を着ているというだけで付加価値が何倍にもなるんだ。気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い！　そうやって持ち上げるから奴らはつけあがるんだ。強欲で自分の価値をはき違えて……冗談じゃない！」

「……では連続婦女暴行も」

「いや、それは俺がやった」

「そこまで憎んでいるのに何故」

「何故？　……ただ俺の人生を台無しにした奴らの人生を同じように台無しにしたかったんだ。下手すりゃ一生つきまとう傷をつけたかったんだそれさえできりゃ俺の体がどうなってもよかったんだ滑稽だったよ先生サマや親にばれることを馬鹿みてエに恐れてそれなのに男にひたすら飢えてまるで、さながら、そう性欲に手足の生えたがごとき獣のようだったよ女子校のカマトトなんか滑稽だぜちょっと若けりゃ喜んでホイホイついてくるんだ愛情？　あるわけ無エだろそもそも制服着た子供と付き合う奴なんてロクな奴じゃねえ。年上との恋愛？　夢物語も大概にしとけよお互いになあ？」

「……」

「……」

「つまりあなたは

「なあ性的倒錯は何処から病気なんだ？ 妹を殺したあいつはどう見積もっても子孫を残せない体に魅力を感じた。俺はどう見積もっても子孫を残せない性別に魅力を感じた」

凍り付いた室内に、一人の男の笑い声が響き渡った。

この物語はフィクションです。実在の人物や団体とは関係ありません。

夏は短し君は、

夏は短し君は、

大島治輔

転がり落ちるように降りたチンチン電車の内側から、背広のサラリーマンや書生風の青年たちがいぶかしげにこちらを見ている。ベルを鳴らして去っていく電車を見送りながら、千代はぐっと胸元を押さえた。矢絣の襟の奥ではまだバクバクと心臓が鳴っている。筆筒の中で一番可愛い銘仙の着物は千代には少し派手かもしれない。引き締まるような濃紺の袴は気持ち短めの、半靴を隠さない程度に。いつも学校へ通う時とそう変わらない格好になってしまったが、千代にとってはこれが最もハイカラな姿だった。

木々をざわめかせるそよ風が火照った頬を撫でていく。ツクツクボウシの音が陽炎のように生ぬるい空気を震わせる。クラっとしそうなほど暑い日だった。千代は木陰の parasol の下で、先日約束した目印をきょろきょろと探した。

曰く、チンチン電車の駐車場の桜並木を回れ右。そのまますいっと視線を上げれば、万緑の隙間に刻々とそびえ立つ赤レンガの時計塔なり。最寄りの大学の創立何十周年かに建設されたとかいう、この町のシンボルだ。千代とて近隣住民としてこの時計塔とは長らく親しんできたが、初めての『待ち合わせ場所』としての機能を携えたためか、どことなくいつもと違って見えた。まるで異国のおとぎ話に出てくる白亜の城のような、チカチカとしたときめきに満ちていた。

時を刻む針の真下。直射日光の降り注ぐ位置にて、約束の時間通り、彼女は手拭いで汗を拭きながら立っていた。カラフルな銘仙と海老茶の袴が太陽に照らされて鮮やかに花咲き、茶色交じりの髪を浅黄色の簪ですっきりと纏めたスタイルは彼女を実年齢よりずっと大人に見せている。容姿も性根も日本人然とした千代は、このハイカラな親友を見るたびに圧倒され、自分とは釣り合わないと思いながらも、やっぱり彼女の傍に居たくてたまらなくなるのだ。

でも遠慮することなんて何もない。そうよ、今日の私は――

「由貴ちゃん、おまたせ」

千代が手を振って声をかけると、その少女はちーちゃん、と向日葵のような笑みを浮かべて千代

の手を握った。容姿の割に無邪気で豪快な、いつも通りの由貴子の笑顔。見慣れた表情にほっと千代は安堵した。

「よかった。ちーちゃんが迷子にならなくて」

「もう、大丈夫よ。そんなに心配だった？」

「強がっちゃって。一人で電車なんて乗ったことないクセに。それにしても、よく許して下さったわね。あなたのご両親」

「お兄様がお口添えしてくださったの。昔とは違うのだから。女学生でいる間くらい、最後の自由を楽しませてやれって……」

キュッと、千代の手を握る由貴子の手が力が入る。

あの時、あんなに嬉しかった兄の言葉が、今は心に暗雲を呼び込む。女学生でいる間だけの最後の自由。自分で吐いた言葉が重しとなって千代の小さな背中にのしかかる。

違う。違うの。今日は、

「ダメ。ダメダメよちーちゃん」

ずいっと体を乗り出した由貴子に、千代の視界に光が差した。抱きしめんばかりに接近した由貴子は千代の両肩に手を置くと、

「今日の私たちは？」

そう問いを投げかけた。千代が由貴子に縋った日、このお出掛けを決めた日、二人で交わした合言葉。

「今日の私たちはヤンキーガール、でしょう」

「合格！ それじゃあ、いざ行かん銀ブラ二人旅！」

「ふふっ……ここ銀座じゃないけどね」

「いいのよそういうのは気持ちなんだから」

由貴子の言い訳に耐え切れず千代は吹き出した。由貴子は千代の手を引きながら、やっぱり笑っていた。

今日の私たちはヤンキーガール。煩わしいことは全てを忘れて、一日限りのランデブー。

家族も将来も何もかも、全て忘れて。

「……よし、バッチリ完成よ。可愛いわ。さすがちーちゃん」

満足げな由貴子の様子に、それでも千代はそわそわと落ち着けなかった。下ろした髪が風の手櫛に梳かれる。頭皮に浮いた汗が冷えてスースーする。頭が軽い。慣れない爽快感と開放感に、やっとの思いで沈めた胸がまた高く鳴りだした。

由貴子が真っ先に向かったのは仲店の呉服屋だった。曰く、せっかくハイカラな格好しているのだから、桃割れなんてナンセンスだわ、とのことで、由貴子は格安で白いリボンを購入し物陰に千代を誘うと、あれよあれよという間に千代の髪を解いてしまった。今は一部をリボンで結って残りは自然に流しただけの髪型になっている。千代はガラス窓に映った自分の姿を見て顔を真っ赤にした。

「凄い。モダンだわ」

「大げさねえ。それにモガの最先端はそんなもんじゃあないわ。アッパッパにショートカットよ」

「……アッパ？ ショート？」

「アッパッパはお洋服。長い貫頭衣みたいなもので、歩くと裾がパッと広がるからアッパッパ。ショートカットは断髪のこと」

私もいつか着てみたいなあ。由貴子はうっとりと語っているが、流行に疎い千代にはあまり想像がつかなかった。お洋服といえば正装のドレスやモーニングが真っ先に思い浮かぶし、断髪に至っては男の領域ではないのか。髪は女の命。それを切ってしまうなんて出家でもするのかと思ってしまう。

アッパッパもショートカットもよく分からないけど、もしそれを由貴子がやったなら。千代は少女雑誌の挿絵をぼんやりとした記憶の中から思い描いた。そしてそれを由貴子の身体にあてがってみる。祖父から兄弟まで男系一族総員士官出身の由貴子は、軍人の血筋故か手足が長くてがっしりした体つきをしている。背丈もそこらの殿方と肩を並べるくらい高い。髪も生まれつき茶色がかっていて、校内では混血児あいのこみたいともっばらの評判だ。そんな由貴子なら、お洋服も短髪もきっと似合うのだろう。由貴子の洋服姿ならいつか見てみたい。きっと宝塚の女優のように素敵なのだろうから。

仲店といえば、浅草。音に聞く浅草寺雷門周辺の、そこだけが商店街として異様に発達しているのだと、世間知らずな千代はそう思っていた。

呉服屋を後にして二人は中心の寺でお参りをした。今日一日楽しく過ごせますように、と一心不乱に祈り、ぎゅっとつむっていた瞳を開けて、さあいざと振り返った千代は、眼下の賑わい並び立つ店の数々に息を飲んだ。本屋に骨董、質屋、甘味処。一本道を逸れれば寄席や活動小屋が軒を連ね、視線を遠く向こうには『待ち合わせ』の赤レンガの時計塔やそのまた向こうの百貨店のビルディングまで見える。

ここを、今日は自由に歩いていいんだ。

高級嗜好で潔癖症の気がある千代の両親はそもそもお出掛け自体をあまり好まなかった。ましてや下町の仲店など足を踏み入れたことすらないだろう。それがどうだ。食わず嫌いならぬ行かず嫌い。何も無いと思っていた千代の町には、めまいがするほど鮮やかな場所があったとは！

「どう？悪くないでしょう」

背中を屈めてひょっこりと顔を覗き込んできた由貴子に、千代はコクコクと頷く。そうだ、ずっと羨ましかった。由貴子は兄たちに連れられて下町の商店街や劇場によく足を運んでいたらしい。千代にその話をたくさんしてくれた。由貴子の見てきた世界を、千代は想像することしかできなかったから。

「由貴ちゃん。今日はありがとう。私、私……」

「もう、まだ何にもしてないじゃない」

由貴子は千代の頭を優しく撫でた。せっかくの洋髪を崩さない程度の、優しい手つきだった。いくら優しく丁寧な手つきでも、日本髪ではこんなことはできない。これも今初めて知った。

「とりあえず、手始めに飴でも食べませんか？お嬢さん」

由貴子は芝居がかった仕草で飴細工の屋台を指さした。

受け取った金魚があまりにも不細工で、屋台から離れた所で二人そろってゲラゲラと笑った。自分からこんなに下品な笑い声が出るのかと、それがまたおかしくて千代は腹がよじれる程笑った。金魚は爛れるような甘ったるさと紙束のような匂いが鼻につく。しかしそのチープな味がクセになりそうだった。

「ねえちーちゃん、次はどこに行きましょうか」

「活動写真、なんていかが？」

「活動写真！知っているお話はあるかしら」

「何があったら嬉しい？」

「え、うーん……浄瑠璃の心中物だったら少しは分かるかな」

「じゃあ行きましょう！見終わったらご飯ね。この近くに洋食屋さんが出来たみたいなの」

「お寺に来たのに、お蕎麦じゃなくて？」

「細かいことは気にしない！」

由貴子は千代の手を取ると元気よく歩き出した。その活動写真も、きっと見に行ったことのあるところなのだろう。千代は引っ張られるまま、恐る恐る由貴子の腕に抱き着いた。由貴子は破顔して、ぐいぐいと千代にくっつきながら歩いた。そよ風がどこかの店先に吊るされた風鈴をチリチリンと鳴らす。風は二人の背中を押して、肌に浮く汗を拭ってくれた。

ああ、神様。仏様。私は今幸せです。幸せすぎて苦しい程に。幸せを感じるたび、満たされた幸福が刻一刻とタイムリミットを告げるようで。

結論から言って、活動小屋に二人の知っている話はなかった。しかしせっかく来たのだからと、ちょうどその時間に上映される予定だったアメリカ製の活動写真を見ることにした。

活動小屋は満員で、人々の体温と体臭で蒸し返っていた。小柄な千代は前席の禿頭が邪魔で伸びあがるようにしなければならなかった。由貴子はさすがというべきか、座高も並より頭一つ高い。由貴子の後ろの高島田が忌々しそうに由貴子の後頭部を睨みつけていた。

活動写真はラブストーリーだった。主人公の男性には親同士が決めた婚約者がいるが、彼は許嫁には目もくれず売春婦に熱を上げている。売春婦は主人公の好意に漬け込みどんどん金を要求するようになり、主人公はすっかり困ってしまった。そんな中、主人公の友人だという紳士が許嫁に接近して……。許嫁の慈愛と売春婦の色香の間で揺れる主人公。悲しみに暮れながらも貞淑を貫く許嫁。狡猾で欲深い淫売の悪女。間男となることで友である主人公を救った紳士。最後は主人公が淫売婦を見限り、許嫁に永遠の愛を誓って二人は抱き合う。

千代はそれを白けた気持ちで見ていた。初めは比較的境遇の近い許嫁と自分と重ねようとしたが、結局できなかった。

両親が見合いの話を持ってきたとき、千代は深海に沈むような絶望を感じた。ついに来たかと、とっくにしているつもりだった覚悟がどんなにちっぽけなものだったかを思い知った。

家族のことは嫌いじゃない。愛し、愛されてきたと思っている。しかし同時に、千代は知っている。真面目な父が一時期妾を囲っていたこと。優等生の兄に馴染みの遊女がいること。優しい祖父が祖母には手を上げること。特別なことなんて何もない。男に生まれたの、なら。

縁談の相手に会ったことはない。事後報告という形で写真を見ただけだ。やれ祖父同士が貴族院仲間だの、現役帝国大学生だの、そんなものに心は動かなかった。涼しげな男前だと母は喜んでいたが、千代には無機質な人形にしか見えなかった。紙に刷られたモノクロームは抽象画のようで、とても同じ人間のように思えない。

これを、私の人生にしると？

千代はもう無知でいられる程子供じゃない。結婚。男と女。夫と妻。何をするか、どうあるべきか。夢見る時期はとっくに過ぎている。だが全てを納得して受け入れられるほど大人でもなかった。

千代は、せめて学校は卒業させてほしいと両親に頼み込んだ。性根の古風な両親は体裁を気にして渋ったが、意外にも相手側から構わないとの返答があり、晴れて千代は僅かながらモラトリアムを勝ち取ったのだった。

どうして許嫁は主人公に尽くしたの？ どうして主人公は売春婦に骨抜きにされたの？ どうしてこの二人は愛し合っていると言えるの？

チラリと隣を盗み見ると、由貴子は大きな目を潤ませて主人公と許嫁のキスシーンに見入っていた。彼女の笑顔が向日葵なら、彼女の泣き顔は紫陽花のようだと千代は思った。

『ほら、私は不器量な上に大女だし。売れ残るだろうから卒業まで学校にいられると思うよ』

いつだったか、由貴子が笑いながらそう言った時があった。別に気になどしていないし、男より学校の方が好きだからむしろ好都合だと。どこまでが由貴子の本心なのかはわからない。しかし千代はこの言葉を聞いたとき、カッと視界が赤く瞬くのを感じた。

どうしてそんなこと言うの。そんなことないわ。誰かにそう言われたの？ みんな全くもって見る目が無いのだから。

『うちの兄たちなんて、所帯を持っても「これはこれ」とか言って堂々とカフェ通いよ。私のことを弟か何かだと思っているから隠しもしないの。ああいうのを見てるとさ、いっそ職業婦人にもなって独身貫いた方が人生楽しそうな気がするわ』

そうね。私もそう思う。由貴ちゃんが正しいわ。誰よ、負け犬の遠吠えなんて言ったの。何も悪いことなんてないわ。どうしてみんな理解しないの？ こんなに気持ちのいい人、二人といたのに。いいえ、やっぱりみんな知らないで。この子を連れて行かないで。由貴ちゃん、愛されることを諦めないで。

いつの間にか、スクリーンにはエンドロールが流れていた。今までの静寂は終わりを告げ、止まっていた時が動き始める。由貴子はぐすぐすとベソをかきながら物語の余韻に浸っていた。彼女がお涙頂戴のラブストーリーが好きなんて今の今まで知らなかった。

向日葵が真夏の日差しを浴びて大きく花開くように、紫陽花は雨に濡れてこそ美しい。そっと由貴子に体を寄せると、由貴子は両手を広げて千代を抱きしめて、千代の薄い肩口に顔を埋めて嗚咽を漏らした。

ねえ、由貴ちゃん。どうして私たち女同士なのかな。

活動小屋から出たのは二人が最後だった。由貴子は微笑とも苦笑ともつかない表情でごめんね、と言った。学校ではいつも一緒にいるが、決まり悪そうな顔を見たのは初めてだった。

「いいのよ。謝ることないわ。それより次は洋食屋さんよね。行きましょう」

「お蕎麦じゃなくていいの？」

「細かいことは気にしない！」

今度は少し大胆に由貴子の手を取って歩き出した。が、少しとしないうちに、千代には道が分からないことを思い出した。顔から湯気が出るくらい恥ずかしかった。

「結構おっちょこちょいなんだから、ちーちゃんは」

由貴子に引っ張られるように歩いた道は、見事に真逆だった。

お昼時と言うこともあり、ここも人で一杯だった。それもそのほとんどが男性客。いらっしやい、と掛け声と同時に一斉に視線が由貴子と千代に集まる。

「由貴ちゃん……今日の私たちは、」

「ヤンキーガールよ。遠慮することなんてないわ」

そう言った由貴子の声も強張っていた。男たちの無遠慮な視線が二人に突き刺さる。少し前まで騒がしかった店内に、今はひそひそ声が広がっている。明らかに自分たちは場違いだ。気の弱い千代はすっかり怖気付いてしまった。

しかし救世主は意外なところにいた。

「おっと、随分とハイカラなお嬢さんたちじゃねえか！」

「素敵なお着物ねえ。アタシもあと二十年若けりゃあ」

「女学生さんかい？ は一、時代は変わるモンだねえ。オマケしやっせ、遠慮なく食ってきな！」

「この馬鹿オヤジ！ 若い娘さんと普通のお客さんを一緒にするんじゃないよ！ ほら、そんなに盛ったら食べきれないでしょ」

洋食屋の恰幅のいい主人と女将は、ちょっと大げさなくらいヤンキーガールたちを歓迎してくれた。

運ばれてきたカツカツ丼は周りの客のものより一回り小さな器に盛られていた。分厚い豚カツは熱々で、一口ごとにズッシリと胃に落ちていくような重さがある。閉じた卵と餛飩色の玉ねぎが肉と合わさって、咀嚼するほど不思議な甘さを感じる。反面油とタレのかかったご飯はてらてらとしてしょっぱい。一度に濃い味がいくつも重なって舌がバカになりそうで、気付けば二人とも口も利かずに夢中になって食べていた。

「ご馳走さまでした。とても美味しかったです」

二人は膨れたお腹でよたよたと歩きながら、すっかり緩みきった笑顔でお勘定をした。主人の宣言通り、小盛だった分定価より随分とまけられていた。

「まいどあり。今度はコレとおいで」

主人は二人に小指を立てると、ニッと片目をつぶった。

「いい加減にしな、この助平オヤジが！」

女将の罵声に、店内が笑いで包まれた。

二人はしばらくあてもなくぶらぶらと店を冷かしていたが、腹が落ち着いてきた頃合いで、そうだ、と由貴子が声を上げた。

「カフェー、行きましょう！」

「カ……カヘー！ な、何で？」

「何でって、いかにもハイカラじゃない。コーヒー、飲んでみましょうよ」

思わず驚いて嘔んでしまった千代だが、由貴子の説明でああ、そっちかと胸を撫でおろした。お茶を飲みながら政治、経済、芸術と様々な議論が交わされてきた場所。世界史の授業で習ったところだ。

「ところでちーちゃん。カフェーって聞いて、ナニを思い浮かべたのかしら？」

「なっ……た、たまたま最近読んだ小説が女給さんの話だったってだけで、その、深い意味は……！」

「女給の話、ねえ。あ、確かここよ。お茶する方の、カフェー」

由貴子の言い方に悪意を感じながらも、カラン、と音と立ててドアを押す。洋食屋と違い、元々そんなに騒がしくはなかったが、やはりここも男性客ばかりだった。ただ今回は、白髪交じりのマスターがこちらを一瞥すると、睨みつけるように目を細めた。

やってしまった。由貴子の顔にそう書いてあった。第一に、コーヒーは熱い。カツレツ丼もホカホカだったが、食べ物と飲み物では勝手が違う。この夏日に熱いコーヒーを飲むなんて自殺行為だ。千代は何も考えずに口を付けて舌を火傷した。第二に苦い。一口飲んで、二人は思い切り顔を顰めてしまった。溝を煮詰めたような見た目をしておいて、妙な芳香の苦みが口内にへばりついて離れ

ない。こんなもの、とてもじゃないが飲みきれぬ気がする。どこからか舌打ちが聞こえる。由貴子は困惑を顔に張り付けたまま、ダラダラと汗を流していた。

どうしよう。由貴子はどんな表情も魅力的だが、そんな顔はしてほしくない。

だが、こんなところにも救世主は存在した。

「もし、その娘さんたち」

顔を上げると、一人の青年がにこやかに立っていた。学生だろうか。シミ一つ無いワイシャツに袴のいで立ちが洗練された印象を受ける、涼しげな容貌が目を引き優男だった。

「どうぞ。砂糖とミルクです。好きなだけ入れてください」

二人は突然現れた青年に驚きながらも、言われた通りに砂糖を一匙投入した。あまり変わった気がする。顔を顰める千代に、由貴子はさっさと追加でもう二匙とミルクを一回り、入れたところで彼女の表情が変わった。

「……美味しい」

千代は慌てて由貴子と同じだけの砂糖とミルクを入れた。甘い舌触りに、鼻に抜ける苦い風味が絶妙に混ざり合っている。ほろりと千代の顔がほころんだ。

「あの、ありがとうございます。助かりました」

「どういたしまして。僕も最初は苦くて飲めなかったから、他人事とは思えなくて」

「何が他人事とは思えなくて、だ。フェミニストも楽じゃねえなあ。え？」

突然の棘を含んだざらついた声に、千代は思わず竦み上がった。擦り切れた学生服に学帽と高下駄。由貴子や先程の青年が首を曲げて見上げる程の大男。育ちの良さげな優男とはまるで正反対の、バンカラ風の青年がこちらに向かって来ていた。

「どうした茂夫。妬いたのかい？」

「ほざけ。てめえの口説があまりにも寒いから回収しに来たんだよ、国見」

「……口説いたつもりはないけど。ああ、驚かせてごめんなさい。これは僕の連れで、政治や文学について語り合う学友です」

国見と呼ばれた青年の紹介に、茂夫と呼ばれた青年はチッと不満そうに舌打ちをした。千代はまたしてもビクッと縮み上がったが、由貴子は目をキラキラとさせながら、

「いいなあ、そういうの。素敵ですね」

と呟いた。

「政治や文学に、興味がおありですか」

「はい！と言っても、知っていることはたかが知れてますけど」

「それは素晴らしい！知識なんて後からついてきます。何事もまずは関心を持つことが大切なのです。もしよかったらこれから僕がお話ししましょうか？今の情勢や文壇について。追加でカステラでも頼んで……」

「舌の根の乾かねえうちに何言ってやがるこの軟派野郎！大体俺は出しゃばった女は嫌いだ。女は表に出るべきじゃねえ」

茂夫の一喝により、上機嫌だった国見の顔から笑みが消えていく。気の強い由貴子は露骨にムツとした顔をした。周囲が静まり返る。沈黙が痛い。千代はというと、茂夫は怖かったが、彼が国見を止めてくれて、心のどこかでほっとしていた。

「茂夫。お前のことは尊敬してるけど、この点は本当に合わないね。お前程の分別があれば、男より優れた才を持つ女性だっていることを分かっているだろう」

「分かったらあ。分かった上で言っている。その才を、家庭のために使えってな」

「才媛を家庭に縛り付けるなんて、文字通り宝の持ち腐れだ。僕は女性を特別視しているのではない。優れた人材は、性別の枠に囚われることなく活用すべきだと言っているのだ」

「不可能だ。男と女じゃ体の造りが違う。ただでさえか弱い肉体が出産・育児で時間も体力も否

応なく食われる。女を登用なんぞしてみろ。社会は回っていかんだろうよ」

「だからそれを支えるのが法律や制度だろう！ それに無能な男が蔓延る方がよっぽど非合理的だと思うけど？」

「能力は個人の努力である程度補える。何故そうまでして男は頑張れるのか？ 後ろに守るべき女がいるからだろう！ もし女が男と同じように表に出るようになったら、誰が家を守るんだ。何のために男と女がいるんだ！」

「はいはい、そこまで」

国見と茂夫。二人の緊迫した水面に、至って興味の無さそうなマスターの声が不意にぽちんと投げられた。

「君たち勉強熱心なのはいいけど、これ以上喧嘩するなら出禁にするよ」

マスターはあくまで淡々と言い放った。気が付けば店内の客のほとんどが、国見と茂夫に注目していた。波紋の走った水面。亀裂の入った空気。先に根をあげたのは茂夫だった。

「……クソッ、ごっそさん！」

茂夫は代金をテーブルに叩きつけると、勢いよく店を飛び出していった。国見は千代と由貴子のテーブルに迷惑賃、と言って小銭を置くと、店の外へ駆け出して行った。

ある意味渦中にいた由貴子もさすがに居心地が悪いのか、私たちも行こう、と千代と共に席を立った。マスターは一瞬こちらに視線を寄こしただけで、何も言わずにカップを磨いていた。

店を出ると茂夫、と切羽詰まった声が聞こえた。距離にして店のすぐ裏路地。大丈夫かな、と千代は呟いた。

「……見に行ってみる？」

「何言ってるの。他人様の修羅場なんて見物にしちゃダメよ」

「でも、気になるのでしょうか」

由貴子は千代に首をかしげて見せた。彼女の表情は、いたずらっ子のようにも、無理矢理笑っ

ているようにも見えた。

「今日の私たちは？」

「ヤンキーガール……です」

「バレなきゃ大丈夫よ。ね？」

由貴子は千代の手を取ると、ぎゅっと強く握った。千代は、殴り合いだけは起きませんように、と祈るより他なかった。

裏路地は強烈な西日が差し込んでいて、表通りよりも暑いくらいだった。由貴子と千代はちょうど影になる場所に回り込んで国見と茂夫を観察した。千代は横目で近くに派出所があるのを確認した。なってほしくはないが、暴力沙汰になったら直ちにあそこへ駆けつけられるように。

由貴子と千代からは国見と茂夫は逆光に位置し、眩しさに目をつぶりそうになる。傾きつつある太陽に照らされて、二人の影が歪な程に伸びていた。

「待てよ、茂夫。なあって！ お前、今日変だぞ。いくら何でも初対面の娘さん相手にあの態度は無いだろう」

「付いて来んな」

「確かに僕とお前で考えは違うけど、いつもはあそこまで喧嘩腰じゃないのに」

「うるせえ」

「あの状況じゃあ、お前はただの粗忽者だ。僕は娘さんたちに君の弁解をする暇も無かった！」

「黙れ！」

「黙らない。知っているだろう。僕が一番嫌いなことは、」

影が重なる。国見の台詞は不自然に切られた。時間にしてほんの数秒程度の沈黙。それでも千代はヒュッ、と息を飲んだまま、影が二つに分かれるまで、瞬きも忘れて立ち尽くした。

「……僕が一番嫌いなことは、惚れた相手を腐らせることだ。茂夫が悪者のままでいるのは、嫌だ」

「だから黙れつつってんだよ。……今日は女学生を口説いて、近い将来良いとこのお嬢と見合いする奴が、どの口で惚れたの腫れたの言いやがる」

「この口だ。他の誰でもない、君が塞いだ口だ」

「……言うんじゃねえよ、馬鹿」

「ああ、馬鹿だよ。馬鹿でいいよ。……だから忘れないでくれ。君に懸想した馬鹿な男がいたことを。」

もう彼らの会話も頭に入らなかった。はっ、はっ、と過呼吸のように息を殺しながら、同性の恋人たちを瞳に写していた。ぼんやりと視界に張っていた膜が、粒となってぼろりと落ちた。あの活動写真は理解できなかった。主人公も許嫁も売春婦も紳士も、みんな偽りだとしか思えなかった。でも今は違う。

二つの影が再び一つに合わさった。

今は彼らの苦しみが痛い程理解できる。

いつの間にか、由貴子と千代はお互いに支え合い、縋り合うように寄り添っていた。

国見と茂夫はそのまま二人、肩を並べて去って行った。裏路地に誰もいなくなった後も、しばらく動けなかった。二人が正気を取り戻したのは、六時を告げる寺の鐘が響いてからだだった。

「嘘、もう六時？ まだこんなに明るいのに」

「……帰ろうか。ちーちゃん」

由貴子の静かな声が千代の胸に突き刺さる。ぞっとするほどあつという間だった。だってまだ明るい。少し傾いてはいるけど、太陽だってまだ出ている。だから、

「そろそろ帰らないと、ご両親が心配するでしょう？ 今日は楽しかったわ。ありがとう、ちーちゃん」

夏は残酷だ。長らく太陽が顔を出しているから、いつまでも一緒に居られると勘違いしてしまう。

由貴子は表通りに向かって足を踏み出した。千代は今になって身体中のべたつき、気だるさを実感した。この汚れも疲れも、一日限りのヤンキーガールだった証。同じ距離歩いて、一緒に汗をかいた。由貴子と同じ時を共有した、愛すべき証。

そうよ、私はまだ――

「由貴ちゃん。最後にお願ひがあるの」

由貴子は振り向くと、笑顔でなあに、と聞いた。千代の位置から由貴子が逆光になり、落陽を背負った由貴子は千代に深い影を落とした。

「名前、呼んでもいい？」

由貴子は不思議そうに頷いた。途端に千代の胸が高鳴り、気管が狭まるのを感じた。酷く、とても酷く、緊張している。

千代は大きく息を吸って、ゆっくりと吐いた。動悸が収まらない。たった三文字。何度も舌で転がして、吟味して。父が母を呼ぶように。祖父が祖母を、兄が義姉を、そしてあの青年が片割れを呼ぶように。

「由貴子」

声は震えた。雑踏にすらかき消されそうな、あまりに頼りない三文字。由貴子は瞳を一瞬見開き、そして雪が解けるように、夕顔が花開くように顔をほころばせて、

「なあに、おまえさま」

今まで見てきた中で一番美しい顔でそう言った。

目の奥に火花が燦る。まだダメだ。喉元からこみ上げてくる嗚咽を必死に飲み込んで、千代はもう一度、声を絞った。

「お願い。私の名前を、呼んで」

「……ちーちゃん」

「ちがう」

「千代さん」

「もう、いじわる」

拗ねたような声を出す千代に、由貴子はクスクスと笑った。千代も思わず笑ってしまった。涙をこらえたまま唐突に笑ったから、きっと今、酷い顔をしているのだろう。

「お千代」

「……はい、あなた」

由貴子と千代はどちらともなく寄り添うと、こつんと、額をくっつけた。涙も声も出さない。身じろぎ一つ互いの間に挟みたくなかったから。

少女は夏の日、西日差す路地裏に真心を一つ、置いていく。

さようなら、私のヤンキーガール。

あまりの衝撃に、親同士の会話も右から左だった。

両家顔合わせは千代が卒業して間もなく、季節外れの雪が降るとても寒い日に行われた。

それでは後は若い人たちでごゆっくり。白々しい台詞を残して親たちが部屋からぞろぞろと出ていく。こんな寒いのにご苦労なことだ、と現実逃避気味に思いながらも、油の切れたブリキ人形のように体の節々が動かない。二人きりで残された部屋の中、千代の花婿となる男も、その涼しげな美貌を間抜けな程に呆けさせていた。

「あの、以前カフェで」

「あのときのハイカラな」

「……お、お久しぶりです」

「いえ、こちらこそ」

こんな偶然ってあるのかな。なまじまっさらな初対面じゃないだけに何となく気まずい。お互い困惑を顔に張り付けたまま、思いがけなさすぎる再会にただただ呆然としていた。

白黒写真では不気味な人形じみていた国見は、目の前にいると見違えるように血色もよく瑞々しく、ちゃんと血の通った人間であるのだと感じられた。

だがしかし、千代は見てしまっているのだ。彼が本気の愛を ^{うそぶ} 嘯く様を。それも、同じ性別の人に。あの光景は、千代の人生の中でも最も心を揺さぶられた瞬間だった。あの時、千代には国見の、茂夫の気持ちがよく分かった。身を引き裂かれる程に理解できた。だからこそ、千代は聞かずにはいられなかった。

「あのときのお連れの方は、元気にしていいらっしゃいますか？」

彼は口を開きかけ、しかし何も言葉を発せず俯いてしまった。それは言葉で何と言うよりよっぽど明らかな答えだった。

「も、申し訳ございません。無神経なことを、」

「……無神経と仰るからには、やはり見ていたのですね」

国見は喉から絞り出すような声でそう言った。端正な目鼻立ちに陰鬱な影が差すさまは目を逸らしたくなる程に痛々しい。これが本当に、自分たちに救世主のように優しく声をかけ、同志と喧嘩まがいの議論を交わし、恋人に毅然と愛と告げた人と同一人物なのかと思うくらいに。同時に実感する。それ程までに国見にとって茂夫は無二の存在だったのだと。

「どうお詫び申し上げればよいか……はしたない女だと失望なさったでしょう」

「いや、怒ってはいません。本当です。ただ貴女こそ失望したでしょう。生涯の伴侶となるべき男が、男色趣味なんて」

「いいえ。いいえ」

千代は即座に首を振った。嘘ではない。同情でも打算でもない。千代の心からの思いだった。

あの日覗き見てしまった逢瀬は千代の心に多大な影響を及ぼした。由貴子への気持ち、少女としての自分、そして軽蔑していた男性というものを考え直すきっかけになった。男も女も変わらない。皆しがらみの中で、ままならない愛を求めて生きているのだと。

「私も同じです。私もあの夏の日あの裏路地で、心を一つ置いてきました」

「貴女は……もしかして、あの娘さんを」

驚愕に上擦った声。国見は目を見開き、そして痛ましげに伏せてしまった。察しのいい人だ。そして、優しい人だ。千代は口元に自然と笑みを湛えていた。

「国見さん。私たち、きっと仲良くなれますわ」

「……ああ、そうだ。きっとそうですね」

釣られるように国見も微笑んだ。少し情けなさそうな、小動物のような愛嬌のある笑顔だった。

千代の胸はときめかない。頬も熱くなったりしない。しかし今、二人の間に奇妙な絆が芽生え始

めていた。この人は私だ、私と一緒に、と。

「改めて自己紹介させていただきたいのですが、堅苦しいのは抜きにしましょう。お近付きの
印に、議題『過去の恋愛経験について』なんていかがですか？」

「まあ素敵！是非お聞かせくださいな。私の最高の想い人のお話もしてよろしくて？」

「もちろん。でも最初は僕からです。僕の格好良くて、可愛くて、少し困った男のお話です」

案山子 2019年夏号

<http://p.booklog.jp/book/129883>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/129883>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社